川柳塔

平成二年十二月二十五日印刷
平成三年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七六四号

日川協加盟

同人特集・私の一句

No.764

一月号

平成三年

新春おめでとう会

とき　1月15日（祝）午後1時開会

ところ　大成閣

大阪市中央区大宝寺町中之町26

（心斎橋「大丸」と「そごう」の間を東へ百米）

電話06（271）5230

あいさつ　主幹　西尾　栞

◎句会

兼題「羊」　黒川紫香選

「光」　奥田みつ子選

◎祝賀会

会費　7000円

川柳塔社恒例の新春行事ですので、同人・誌友を問わず、こぞってご参加ください。

特に今回は、今年中に同人となられた方の歓迎会も兼ねます。総あたりの福引もあり、各題の天地人には賞品を授与します。

川柳塔社

NHK学園川柳近畿大会

とき　2月16日（土）午前11時受付

ところ　ラポルテホール（JR芦屋駅前）

（兵庫県芦屋市船戸町4―1―303）

宿題（事前投句・各題2句）

「磨く」　西尾　栞選

「多い」　堀口北斗選

「波」　去来川巨城選

席題（当日出題・各題2句）

梶川雄次郎　小松原爽介選

◇事前投句締切　1月22日必着

◇投句先

〒186-10　国立市富士見台2―36

NHK学園川柳センター

川柳近畿大会事務局

◇投句料　1600円（作品集代を含む）

《参加要領》

◇大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい

◇事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙2枚を、いずれも真中にタテの線を引き、1枚目の右半分に郵便番号、住所氏名（ふりがな）電話番号（NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号）大会への出欠を書き、1枚目の左半分に宿題①の作品、2枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ2句記入して下さい。

君が代

西尾　栞

謹んで新年をおよろこび申上げます。今年の新年は、天皇即位式も大嘗祭も、古式豊かに無事終了されて、洵に目出度い新しい年で私達国民の最もよろこばしい年を迎えたことを、皆さんと共に慶賀申上げる。

新年を迎えるにあたって、戦前は学校で、日の丸の国旗を校門に交叉して樹て、拝賀式には君が代の国歌を斉唱したものであった。それが戦後になって、一部の知ったかぶりの輩が、国旗をうとんじ、国歌を呪うが如く言いふらして、学童に君が代を知っているかと言うと、あの相撲の歌かと言うような非常識な答が返ってくる。一つの国家には、大小を問わず国旗のない、又国歌のない国家はないのである。

本年は海外旅行者一、〇〇〇万人ときいている。一度国外に出て、祖国日本を見る時、如何に日本国の有難さを沁々と覚えることか。円高をたのみに海外ショッピングにうつつをぬかす前に、他国と日本国と比較してみることこそ、高い旅行費を払うた価値があると言うものである。

そもそも国歌君が代は天皇ご一家の弥栄を願うた歌でなく、大和王朝以前の九州王朝の讃歌であったことは、福岡県の金印の出た志賀島の志賀海神社のお祭に歌われるのが、君が代で、

我が君は千代にましませさざれ石の
いはほとなりてこけのむすまで

というのがある。

我が国の国歌にするには、その儘では余りにも曲がなさすぎるので、我が君を君が代に、千代にましませを千代に八千代にと替えて、読人知らずとして勿体をつけたのである。志賀島には、細石神社、苔牟須売神を祀った櫻谷神社がある。

そもそも、君が代の君である君は、女性の神のことで、磐長比売のことであって、この比売の石が何時、何時までも長く苔のむすまでと祈ったのである。

大昔、石器時代は石が何よりも大切で磐長比売の讃歌が、明治維新のどさくさに国歌の必要に迫られて急遽、この讃歌をもって国歌とされたのである。

当今「君が代」は民主主義に反するとか、或いはもとは恋の歌だとか、戦争に通ずるとか言う一部の議論は、議論の為の議論で、之に替る国歌があるのなら、出して堂々と討論すればよい。

年頭にあたって、国歌「君が代」よって件の如し。

座右の句

止り木を一つ譲って打ち解ける　（紫香）

私の句

トロイメライ弾く孫囲み座は和む　**渥美弧秀**

川柳塔　一月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　君が代……西尾　栞……（1）
ご挨拶……橘高薫風……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（36）
■川柳太平記(152)　川柳の群像　吉川啞人……東野大八……（40）
■連載　柳籠裏三編研究（六丁）……（42）
〈同人特集〉私の一句……（44）
水煙抄……黒川紫香選……（58）
秀句鑑賞「同人吟……西田柳宏子……（78）
　　水煙抄……宮西弥生……（79）
銀河系……河内天笑選……（92）
■女性コーナー　茴香の花……小出智子選……（96）
平成二年度　銀河系賞受賞作品……（98）
平成二年度　茴香の花賞受賞作品……（99）

ご挨拶

橘高薫風

明けましておめでとうございます。

凡聖一如元旦のここ　路郎
ろしる
正月だゆったり右を　〃
歩くべし

新年の気持ちはこのように大らかで、

元日や我泰山の如く座す　栞

という句もあります。

理事長に就任の新年の私の抱負は、和と熱をもっての川柳塔社の運営です。

十二月二日、八木千代さんの川柳塔きやらぼく忘年句会に参加して、相変らぬその和やかな雰囲気、遠来の参加者、川柳塔社関係以外の川柳人の多さに感心させられました。きやらぼくの会員は仕合わせだと思います。そうそうたる好作家、好選者を迎えて得るものが多いからです。川柳塔だけの井の中の蛙でない勉強が出来ます。本社でも研究会を設けて、斬新な作品の指向を促進させたいと思ったことです。

作品は不易流行、ゆるりと動かねばならないのです。若者の感性を理解しなければ、川

受賞のことば　新家完司・佐藤奏月……（100）
■ひみこさろん「新年に思う」……竹内寿美子・林はつ絵……（101）
「開　く」……大矢十郎選……（102）
一路集「　鏡　」……秋元てる選……（102）
「未　来」……相馬一花選……（103）
初歩教室「番　組」……辻　白渓子……（104）
■ずいそう　あたらぬはっけ……西尾　栞……（80）
大空のこころ(1)……橘高薫風……（81）
■山陰紀行　みか月十周年大会……奥田みつ子……（138）
塔の会吟行記……山口美穂・新井朋子・新井晶子……（139）
本社十二月句会……（106）
■各地句会だより　川柳大阪50周年……中原比呂志……（137）
各地柳壇（佳句地十選／遠山可住）……（126）
柳界展望……（140）
■一月各地句会案内……（141）
■編集後記　田中正坊・西出楓楽・奥田みつ子……（142）

座右の句

長命の相有る男　門を掃き　（紋　太）

私の句

宝塚　君の思い出僕の夢　楊井二南

柳塔は濡れ落ち葉的存在になり下がってしまいます。

また、近来、日本川柳協会主催の全国大会や文化庁の国民文化祭の大会、NHK学園の各地方大会などで、川柳人の交流が激しくなって来たこともあり、川柳塔社内の交歓が一地方に偏ってしまった感がしますので、臨時同人総会を地方で開催するなど、常任理事の多くが出張参加する形で各地の声を聞きたいと思います。

恒例の川柳塔社おめでとう会で、前年に新同人になられた仲間に参加を呼び掛けているのも、目的は同じところにあってのことで、大方の賛同をお願いします。

常任理事を中心にした実務の役割担当者も熱をもって責任を遂行する所存でいます。

そして、後継者の育成にも思いを致さねばなりません。これは最もむずかしいことであり、最も大切なことであります。何事によらず十年とは言わないまでも、目先だけの対策でなく、少くとも五年先を見据えて行動したく思っています。

中村扇雀丈が三代目鴈治郎を襲名して、この一月二月の二ヶ月間、道頓堀の中座で襲名興行を打っておられます。三代目川柳塔社理事長を仰せつかった私も感慨深く、三代目の成駒屋にあやかりたく思い、新年の一句を成した次第です。

皆さんの絶大なご支援をお願い致します。

年新た襲名披露一口上　薫風

川柳塔

西尾栞選

島根県　西村早苗

父はもう仕事始めの手打ちそば
旅の膳紅葉が添えてあるゆとり
責任をもたぬ女がよく喋る
ほどほどに眠りつづけてまだ三日
恐ろしや女涙で攻めてくる
眼のはしに涙をおいた冬の駅

大阪市　津守柳伸

春の絵に騙されやすい心電図
水仙峡めざした母の千羽鶴
寝正月するには惜しい肌の艶
時刻表めくると故郷の香にむせる
万札を食べる羊とにらめっこ
たから物　適材適所友が居る

松原市　谷垣史好

冬日和見知らぬ人にお辞儀され
妬く奴があるかい夢の話だよ
割箸が無実の罪に泣いている
性談を絶えて久しくしていない
金あまりならば羊に食わそうよ
軽いから海部御輿はかつぎよし

豊中市　安藤寿美子

羊かて怒るとこわいの知ってるか
坐りよく河原の石はみな丸い
おだやかで温泉好きの友ばかり
大岩に階段刻み札所寺
十二単日本文化ここにあり
嫌地性あるのか職を転々と

和歌山市　福本英子

これからはお金のかかる名誉職
松茸も蟹も昔話にしておこう
江戸前の皿に小串の散り松葉
ああ都会ビルが浮いてる水たまり
地に還る日を喜々と舞う紅葉

紅つけて出たのに座席譲られる　豊中市　一瀬福一

銀紙で包んだ握りささ錦
日光浴エッチな視線まで浴びる
公害に怯えレジャーに酔う平和
髪染めてみても明治の顔は顔
黒猫のタンゴで開ける子供会
秋の色アルミサッシの窓にはめ　和歌山市　青枝鉄治

引き出しに昔のムダが詰めてあり
迷いから覚めさせたのは子の寝顔
子に残す地図へ近道など書かぬ
どん底の汗が活きてる二度の職
まっとうな汗かく父の固い椅子
少年を無口にさせた小鳥の死　京都市　松川芳子

人の和を時どき乱すつむじ風
約束がある人生の曲り角
美しい花に暗示をかけられる
それなりの若さで似合うベレー帽
カルチャーで踊り疲れたおばあちゃん
動乱のイラクの空もラムネ色　米子市　野坂なみ

神有月それぞれ訛り持ってくる
良い年でした家中の者みな達者

脚下照顧　今はだあれも教えない
中継ぎをした義姉さんの杖となる
大台へあと一年の正念場
幾つになっても嬉しいものは五重丸　松原市　小池しげお

気の強い夫とおもう毛糸玉
腹立てて帰っていったジャンプ傘
貸した金貰いに寄った低姿勢
モンブラン　インクが出ないこともある
できぬ子の勉強部屋を建てている
その中の効かない杭に荷がかかり　高槻市　川島諷云児

つまずいた石を大事に温める
親として時には被る鬼の面
古傷はいつか月日が埋めてゆく
働ける幸せを飲むコップ酒
尾を引いたしこりが残る喉ぼとけ
一歩退く勇気が敵をつくらない　豊中市　吉田あずき

ライバルの投げたロープをつい掴み
鳴りやまぬベルを心に一つ持ち
ポケットの深さまだまだ策のあり
無駄なことして来た人が面白い
中流に猫だけ上流指向なり
コスモスのあなた任せの処世術

岡山県　嘉数　兆代賀

裸木も礼儀正しく佇ちて新春
いたわりの言葉で老いがしばられる
さまざまな風をくぐって来た余生
過去語る人みな逝きて風や雲
大いなるものに引かれていく旅路
地球危機ロダンは何を考える

奈良県　長谷川　春蘭

振替休日　竿竹売りに天高し
心底は好き逆らってばかり居る
山里は刈田がえがく幾何模様
秋灯下つよくやさしき壺の肩
よせ鍋のくもる眼鏡を拭きもして
秋蝶の海を広しともどり来る

大阪市　西出　楓楽

赤を着て胸に湧くもの待つとする
首筋と手に隠せない齢がある
大ショック同じ服着た人に会う
見る阿呆よりも踊る阿呆を愛すべし
悪妻でいつも夫を甘やかす
注意報　孫台風がやってきた

下関市　石川　侃流洞

貧乏性で金の成る木の芽が出ない
食事ラッパへ一番乗りの粗大ゴミ
気に喰わぬ嫁が頼りになって老い
理想論ばかりで矢面には立たぬ
等身大の鏡に老いを見つめられ
炎える血を入れたら余命もちませぬ

堺市　高橋　千万子

乾杯の音頭　犬猿握手さす
食卓の調和がとれぬ左きき
赤い羽根十年前の貨幣価値
ここまでと切なく月は欠けてゆく
うらやまし末路蝶には羽がある
歌い終えマイク放した国なまり

和歌山市　西山　幸

春を待つ炬燵　無為なり無策なり
郵便の一つも来ない安息日
ばか正直に生きるほかなき小銭入れ
心さむくて牡蠣雑炊を食べにゆく
父の忌へ生きのびている木守柿
鏡にもすこうし嘘を教えよう

鳥取県　新家　完司

二十年前のあなたは薔薇だった
パチンコも競馬も負けた文化の日
交番の前で背すじをしゃんとする
水溜り覗いてパリはもう秋か
あなた文化人　わたし野蛮人
梨の芯すこし寂しい味がする

富山市　舟渡　杏花

男のロマン探しに行ってそれっ切り
歌声がぴったりと合ってきたシーソー

あの世行きの途中に待っていた奇跡
妻が怖くて道楽生半可
人さわがせが好き道楽のかくれんぼ
名人へ探りを入れてくる達人

熊本市　永田俊子

耳遠い母が少しおくれて笑う
新婦紹介聞いてる耳が痒くなる
夫に添う裏地の良さが忘れられ
さよならと伝言板にあるドラマ
がらくた屋で兵士のラッパが風に泣く
ああ余生つるべ落としに日が暮れる

八尾市　内海幸生

栞先生文化賞受賞（二句）

欣びがまた重なった文化賞
今東光　莫山に次ぐ文化賞
初日の出しばしは神と対峙する
羊歳　神から白い日記帳
酷寒は満開までのパスポート
命ある限り言うべし今年こそ

鳥取県　土橋螢

飄ひょうと風に移りし冬の景
真実は白だ白だと雪が舞う
少年と少女が抜けた輪の歪み
幸せに光って白い菊が咲く
夕暮れを急ぐ車の渦の中
悲劇から喜劇へ月はまるくなる

西宮市　林はつ絵

ご即位のお言葉居間で聞いている
お立場を継ぐ運命のやはり人
他人の箱　蓋を開けたくなってくる
ごめんねの一言聞いてみな流す
カレンダー重い一日しるしする
丸木橋渡って男作られる

竹原市　小島蘭幸

長生きをして笑い合う響き合う
いいものをたくさんもっていて負ける
しゃべりつかれて眠る泣きつかれて眠る
よく転ぶ鬼とともだちにはならぬ
号令に素直な羊たちだこと
紙のナイフで男を刺したことがある

米子市　林瑞枝

生きていて良かった今日の即位の儀
雪催いいつかは乾く衣干す
連凧のうなりに乗っている野心
流氷の鯨と日本語で話す
毬をつく音が旧家の回り縁
猫に芸教える猫になり切って

寝屋川市　江口度

お隣がもう気にならぬ上り坂
物忘れ傘買うように時計買う
ざくろ割れ妻の毒舌冴えてくる
あきらめか悟りかポックリ寺暮れる

飛鳥ゆく振り向くくせが抜けきれず
橋完成　島の絆がゆるみだす

西宮市　門谷たず子

自分史にたまには落ちる風の穴
ハードルをも一つ越えて父の冬
倒れてもすぐ起き上がる影法師
二人三脚夫と跳びたい川の幅
よう気の付く嫁に囲まれ疲れ気味
タイミングはずすとだんだん遠くなる

松原市　玉置重人

隣の奥さんとパチンコ屋で出合い
土壇場で入れてる鞭はなさけだろ
一本のペンが浴びせに来た火の粉
ひとすじの愚直が守り抜く灯り
それからは一緒に穴を掘ってます
足し算が好きで足元掬われる

松江市　恒松叮紅

旗日には旗出す連れのある近所
利己主義で地球の裏が笑えない
漬物も柿も山里冬仕度
農耕の血すじで好きな土いじり
ストレスを癒やす年金少し積む
他人様の金で役所の無駄使い

松江市　舟木与根一

長生きのコツは銭など溜めてみる
余生にもライバルという張りは持つ
忘れ傘うわさ話を聞きかじる
隣まで噂が着いたのはわかり
雄弁になり傷口を広げてる
中東へ進軍ラッパ小さくする

岡山市　川端柳子

口の端にのぼり御先祖ゆるぎなし
ベランダで明日の夢を敷くレール
秋深し人情噺拾う旅
こんこんと諭せば花咲く丘となり
一〇年はアッという間の手まり唄
エプロン姿の母泣き虫でたくましい

米子市　林荒介

リンゴ齧る風は秋から冬に
こめかみに貼り付いていた古切手
各停の町からいのち軽くする
人生訓がある火葬場の椅子
俑の眼は今も主役の外に居る
輪の中で一族の血は濁り出す

八尾市　宮西弥生

花活けて夜の寒さから逃げる
低い靴はいて女は脱皮する
義兄さんとお茶だけですむ帰り道
無表情になる自動ドア十二月
着てもらえぬセーター編んでいる少女
年長者に狂いはないからついてゆく

豊中市　田中正坊

新世紀生きる「十年日記」買う
古希の春まださがしてる青い鳥
古希を生き白い壁画を描きつづけ
陣地構築ライティングデスク買う
敵半分　味方はんぶん砂の城
因州路　日本海の波高し（鹿野みか月記念大会行）

米子市　小西雄々

結婚を控え目移りして困る
お互いに株で損した縁がある
カルチャーへ無駄より見栄が先走り
紅バラのロマンわすれず妻若し
保険では出来ぬ入れ歯がなじまない
相剋の過去わすれたい絵を外す

鳥取県　松下たつみ

愛だろか傘の雫をかばい合い
水澄んでしかけた罠が喋り出す
ビニールの便利に花も人も負け
猫を飼う隣がいつも憎まれる
新芽食う虫歳時記を持っている
言葉尻少し妥協を考える

伊丹市　樫谷寿馬

篆刻の刃先に若さ込めてみる
同権で夫婦揃ってドック入り
医療費がただで退院素っ気無し
せめてもの夫に叛く革新票
ただ祈る受験の孫へ送る絵馬
在りし日の何処かの国に似たイラク

堺市　中川滋雀

胸に手をあてても去年はもう去年
足のむくままに歩いたわけでない
キリン草だけがしぶとい冬景色
まだ燃えるものあり羲之の書を拾う
盗泉の水は汲めない小さい手よ
お爺ちゃんらしい笑顔をすぐ忘れ

今治市　矢野佳雲

転んだら自分で立てという情け
さよならを言う気で会うてまた崩れ
釣り橋がゆれて企みみな話し
夜汽車から見る古里は眠りこけ
賑やかにグループ千羽鶴を折り
母追うて走った道よ烏瓜

倉吉市　奥谷弘朗

欠点が宝にも成る人の運
勝目なぞ無いのに共産党が出る
世話好きをもの好きという目で見られ
チッポケな義理が気になる老夫婦
共白髪仲よしだけが自慢にて
ボケ防止程度の趣味で恙なし

島根県　堀江正朗

ボリュームを上げたラジオで吹き飛ばす
掌に触れて暮らしの知恵が疼きだす

ニュースさえ聞かねば闇路淡々と
雨だれの根気が話しかけるよう
異議ありと言いたい時に酌ぎにくる
嫌なこと忘れ上手になりました

島根県　堀江芳子

黒豆の湯気ふつふつと初春ひらく
こんな日もあって年齢忘れさす
なんとなく口紅かえてみたい朝
首すくめ桜呼ぶ風　雪の風
風くるりくるりと冬の演出家
見抜かれた心茶筅にお詫びして

美祢市　安平次弘道

だまし絵を信じ未婚の母となる
歳時記にも死語大正も遠くなり
善人面するから怖い夢を見る
因果応報　神はポックリ死なせない
パロディーの方に本音が伏せてある
そして冬ぐっすり眠る花時計

和歌山市　牛尾緑良

透析十五年妻の笑顔はまだ固い
同じ布団で妻の寝息を聞いている
坂道のつらさを和らげる会話
折り鶴のその日その日の顔かたち
天辺の手前で羽根を伸ばしてる
不自然な自然を育ててる文化

尼崎市　春城年代

強かな女も秋はものおもう
安定剤に今夜もわたし負けました
てんでばらばら家族の絵など描けませぬ
おっとりと金魚一匹生き残る
秋天を仰ぐ眼底叛き出す
磯の香に情け深さがからみつく

神戸市　中村ゆきを

目頭がすぐ熱くなる齢となり
境内をガレージにする梅を伐り
木枯しを聞いているだけ社会鍋
日経の読み過ぎチーママ喋りすぎ
サウナ風呂隣に小指の無い男
いも焼酎性善説が酔いつぶれ

岡山市　時末一灯

老人をどう読みかえてみたろかな
噛合わぬ二人へ風が動かない
元旦やわが庭の木々かしこまり
元旦やまた一年を綱渡り
悪運の強さ願って初日の出
同期会持病肴に酔うている

京都市　都倉求芽

土くれが竈の前で背を正す
旅ごころふつふつ山の湯の熱さ
そこらじゅうに駈込寺を持つ女
少しだけれどわたし銀行に貸してます
改憲派仮面つけたりはずしたり

科学先端の国が神事に溺れてる　寝屋川市　稲葉冬葉

秋の風少し気儘な空になる
瞑想の中に私でないわたし
良心のかけらが並ぶ善後策
百度石嫁は素直に付いてくる
似顔絵に犯人不服そうに言う
少年の眼が父に似る母子家庭　八尾市　鷲見章

ミディアムもレアにも遠く総入歯
冬銀河君と居て未だひと言も
受験子に一灯残し路地の闇
クラス会恩師は男性化粧水
縄のれん散歩の犬が繋がれて
若者の街へ六十路の皮ジャンパー　米子市　新正子

お天気は子が住む街も聞いておく
人間を恐れぬ鳩がいる町だ
頭では上手に煮える栗かぼちゃ
風船を飛ばして山が低くなる
地の声に引かれて月も陽も君も
山林に長持唄を教え込む　出雲市　竹治ちかし

明日の晴れ信じて明日の米を研ぐ
太陽に背を向け影と向かい合う
夢刻む時計が少し遅れだし

年輪のゆがみ大樹は語らない
子の夢の卵がかえる日まで待つ
肝心の犬は知らない血統書　奈良市　宮口笛生

十二月そういう俺も慌ててる
いい年であったとしとこ日記閉ず
のみ屋から明るい男になって出る
蟹食べに行く旅組んだ小正月
子育てが終り夫も邪魔になり　尼崎市　春城武庫坊

脱ぎすてた作務衣に野心残ってる
ハネムーン人生悲劇のプロローグ
弥陀の掌で夫婦喜劇を繰り返す
大嘗祭に疑問がからむ鰯雲
旅の膳妻ゆっくりと食べている　名古屋市　越村枯梢

誤算かな妻がだんだん偉くなる
本名で呼ばれてみたいいぬふぐり
他人から見れば確かに不倫かも
平均寿命超えても止まぬ医者通い
お迎えですハイハイハイと逝けますか　甘日市市　林野甦光

朝靄に新幹線も旗を立て
モーテルも日の丸揚げていらっしゃい
振り袖に電話のベルも爽やかで
年賀状が戻ってあの人逝きました

誤字だらけのノート職人肌に合う　藤井寺市　吉岡美房

御機嫌の悪い鏡と会う師走
貧乏を笑いとばした十二月
泣くとこで笑ってしまう十二月
四捨五入して新年を迎えよう
今年こそ力んで倒れないように　倉吉市　渡辺独歩

渓谷とダム枯れ果てて地に還る
補助席の妻は黙っていてほしい
気まぐれな劇は演じぬ女坂
友を知る旅にしぐれが降りかかる
イランには黒いチャドルの壁がある　京都市　山本規不風

修羅知ってから愛深し冬椿
兄弟となる養子届けをする親子
都市計画　私の家がすでに無い
八十の妻からやきもちの刑もらう
小さくとも炎える火種をくれるひと　今治市　越智一水

初旅や妻とのペアを羨まれ
雨だれの音に安らぎふとおぼえ
髭だけは剃るぞ孤独になるまいぞ
山頭火五十回忌、一草庵句碑除幕
好きだった酒鉄鉢でばさりかけ
まったく雲がないほろり酔う

仏壇へ妻が育てた花を挿し　柳井市　弘津柳慶

浮気して帰って来たのに酒を注ぎ
妻の好みのネクタイを締めさされ
サービス券もらって高価な御買物
孫達が来るので掃除させられる　加古川市　吐田公一

二十一世紀の夢が乗ってる三輪車
心の叫び知ってもらえぬ自閉症
赤信号点滅してる夫婦仲
Uターンへ村のカゴメの輪が温い
子育てに尽した母の車椅子　羽曳野市　田中透太

磨いても光らぬ石も数のうち
大器晩成やっぱりお前だったのか
亡母に似た人を選べと父は言う
鬼の数仏の数をかぞえてる
菊活けて妻は遠出の旅に出る　竹原市　森井菁居

今日は吉日明日も吉日夕焼ける
共稼ぎ少うし無駄を買うて来る
冒険の船出へ妻が添うてくれ
自叙伝に妻の内助が欠かせない
健康な身体に苦いどくだみ茶　松原市　佐藤奏月

友達を見舞う凩吹くまえに

水槽の魚に私見詰められ
木の根っ子磨くと鳥になっちゃった
ぬいぐるみ夜の私を知っている
母の手帳　旅のグルメが書いてある

西条市　片上明水

居酒屋を出て居酒屋の灯を探す
昼過ぎてからの陽が差す冬の路地
冬の旗りりしくさせる北の風
よく売れる店から宵の灯がともり
お祭りの酒は手足が先浮かれ

呉市　槇田英詩

十五夜の影踏みごっこ恋ごっこ
目覚しが十五時過ぎに鳴る夜勤
握手して指切りをするしつこいね
粗茶よりも御神酒が欲しいお客さん
待ちぼうけ惚れた弱身の晒し首

宇部市　平田実男

本音では喋ってませんコマーシャル
定年へますます重い妻の尻
確率は一対一で嫁不足
抱き癖は反対をした姑がつけ
ストレスが溜っています紙オムツ

七尾市　松高秀峰

ふる里へ錦飾った寄附の額
あなたにもつける薬がありません
椅子取りに負けて定年近くなる
定年のため息エラーが多くなり
裏方の苦労がわかる即位の礼

和泉市　西岡洛酔

モカの香に六帖一間無為無策
五百羅漢に探す親爺は善の顔
背もたれの六十路無欲と冬の部屋
薄味の妻も五十路の坂登る
窓際に冬を知らせて風の私語

東大阪市　森下愛論

福寿草咲かせてひとりで春を待ち
初夢の女昔のまま老いず
貯めるだけ貯めて冷たい眼を返し
翔んでいる老いに世間は粗大ゴミ
万歩計に運動不足とせめられる

東大阪市　崎山美子

名ばかりの夫婦となったかけ茶碗
紺のれん秘法の味が生きつづけ
回り椅子現場の声がとどかない
伝統の技に生きてる尺貫法
困った時だけ友達にしてくれる

西宮市　奥田みつ子

久し振り亡母の琴爪初さらえ
閉じこもる磨りガラスにも初光
羊から貰う素直さ温かさ
賞め言葉ときどき交じる小さい棘
趣味の良さ流行おくれでも素敵

一言を味方に決心つけて来る　西宮市　西口いわゑ
じんわりとハートにせまる花言葉
思い出の蓋を時どき開けてみる
宝くじ仮に当った何とする
白菊が凜凜しい武者に仕立て上げ　西宮市　秋元てる
友達が美人でわたしようもてる
祭りには帰って来いと言い聞かせ
男一人祭りの後の顔で呑み
病歴が力となって母達者
青い山脈　歌えば見える津軽の野　羽曳野市　榎本吐来
しがらみにおまけがついた失語症
説教を心得ている子の返辞
道化師もいいさと宵の靴の音
耳鼻科からコースを変えた神経科
小悪を宥してくれるおぼろ月　羽曳野市　吉川寿美
川底の石に驕りをさとされる
自動改札今朝も羊の群れの中
一部始終聞いてしまった猫の髭
秋風に揺れるわたしも芒穂も
住所録から友を消してゆく鴉　八尾市　宮崎シマ子
産土神が一番聞いてくれそうで
成人式写真屋で撮る写真
十月十日溜めた力で呱々の声
長電話そこらの椅子を引きよせて
やっかみも乾杯をする披露宴　八尾市　山下美津留
文化賞良き先輩に恵まれる
解放へ拝む気持でニュース聴く
お大師の歩いた後をバスで旅
信越に旅して
善光寺六文銭の鍋で飲む
柏崎佐渡は見えない船も出ず　奈良市　天正千梢
針の山越えた男の胸をかり
「ざまぁ見ろ」友であり敵であり
志明院の杉に再会を約し
黒豆おいしく煮えて嫁の座はたしか
花咲かす乾きし土も母なれば　奈良県　田中紀美代
頬にくる四季折々の風は母
あんまりに長い祈りで邪心抱く
六感がすぐれて不幸背負い込み
シナリオになかった母の痴呆症
広辞林あそびは死ぬまで続けます　奈良市　米田恭昌
折れた鼻繕う天狗の挫折感
青い目の浴衣姿も万灯籠

ムンクの絵はしゃぐ二人を黙らせる
ペアルックこれも夫婦の絆かも
忘却と格好をつけて痴呆症

倉敷市　稲田豊作

なつかしや八十五年の走馬灯
老い楽や日々好日のカレンダー
汚れなき色で描き終えたし余生
ガス風呂が祖母から火吹竹を取る
古狸同士が和議をやるそうな

倉敷市　田辺灸六

子の真意奈辺にあるや秋桜
絆とは子供を縛るものでなし
歯並びの綺麗な口で嘘をつく
氷から水に戻って素直です
球魂にバンザイ五十五年の血

松江市　柳楽鶴丸

覚えていますか僕の可愛い丸坊主
末期の水は口うつしでしてあげる
憎まれたら本当に長生き出来るかな
いくつになっても男と女です
クールと言うより理性的と言って欲しい

松江市　竹内すみこ

憤り晴れないままに虹が立つ
小銭入れ小銭同士で温め合う
竹とんぼ捨てた故郷を恋しがる
告白の声は聞えぬ月見草
横たわり戦の海からきた秋刀魚

寝屋川市　宮尾あいき

小走りの冬をせかせる枯すすき
夕風が何か言うてる障子越し
吠える犬鴉笑うて飛んでゆく
老斑の顔へ高級化粧品
お父さんいい子でいます糸電話

寝屋川市　柴田英壬子

祝賀パレード待ちでパチンコしています
弾む手紙書いて食卓片付ける
愛妻のごはんの味をファジィから
十二月松の緑のテープ聞く
シンデレラのその後を知っている羊

寝屋川市　岸野あやめ

受験の子抱えてますと年賀状
ふるさとを憶う羊のやさしい瞳
重箱も小さくまとめて老夫婦
老いらくの恋慎ましくしおらしく
雑兵として割箸で数えられ

寝屋川市　平松かすみ

巻き戻すビデオの若さ宝物
大き目の靴が待ってる春の音
回り出す噂もあってうれしいね
毒舌のファンも居てる評論家
道路地図持てば日本の裏表

ハイキング妻は野菜も見て歩き　大和高田市　岸本豊平次

山の辺の妻の歩幅に無人店

人麻呂が立った丘だが句が出来ず

マンションの窓に雨垂れの音がない

一度だけ買った店から賀状来る　箕面市　坪田紅葉

待ち合せおくれる人は同じ人

客なれた女将に煙い二人連れ

新人が新人と言う世の流れ

伝統の重みに耐えた舞おおぎ

病む友に一言葉書絵をそえて　高石市　浅野房子

腰据えて秋の夜長を飲む地酒

愛される事はもうない仮面脱ぐ

押入れは昔の話蒸し返す

終章のページを飾るものがない

身を被う何物もない冬木立　宝塚市　丸山よし津

束の間のこの世の旅の二人連れ

八百屋にもメロンの座る位置がある

山坂を越えた足には自信持つ

焦らずに次の言葉を待ってやる

遊ぶのに電話予約の要る子供　岡山県　小林妻子

仮の世の命預けて歳新た

いい事を一つ位は見つけよう

振り向いてくれる友達ばかりなり

本当に逢うたら話すことがない

だと言うて嫁さん変える訳でない　岡山市　井上柳五郎

馬鹿だとは言わず先生と言われてる

それぞれに持病老友の悩み聞き

生かされた秘訣などない長寿言う

仮免の車のあとは数珠つなぎ

稔らない種をたくさん蒔いた過去　岡山県　荻野鮫虎狼

年金がすこうし足らぬ旅プラン

長火鉢むかし昔を詰めて座し

崖際を一生歩く父の地図

輪の中にかがみ自分を取戻す

落日に母の足どりだけ確か　岡山県　山本玉恵

突き放す親にもなって知る絆

夜叉と菩薩許し合うてる胸の奥

積み残しの荷からこぼれて来る情け

どん底で夜明けの唄に生かされる

末裔の顔が通じぬ風当たり　岡山県　二宗吟平

雑草の手をとり合って耐えている

講演を茶を飲みながら聞くビデオ

だんじりの音をテープで子に送り

広報のサミットで聞く苦心談
三六五〇〇　毎日一ずつ消す運命

岡山県　矢内　寿恵子

舞扇要に少女の意地ためる
平成の平和へ老いも向きをかえ
三面鏡女神も夜叉もゆれている
浮き沈み沈むも神のおぼしめし
有形無形の善意に余生支えられ

岡山県　千原　理瑛

摩周湖にわたしの心ぬすまれる
絶景かな層雲峡の秋を吸う
牛乳だキビじゃがいもだ満杯だ
洗っては白く干してるいきどおり
幸せも夢も翼に乗せて旅

岡山県　池田　半仙

朱線引く箇所もあります日本史
給料の差で人格も無視される
秋水の澄みて魚影の鮮やかさ
食べ余し心苦しい戦中派
頑固さも減ると寂しい父となる

島根県　小砂　白汀

銀杏から黄金の雫したたるよ
つながってみましたトンボ誇らかに
どなたでもおいでおいでと月夜茸
人形に着られる菊のうめき声
ころされる人に羊の群なつき

島根県　榊原　秀子

平成三年又これからも明日さがし
菊づくりたのしいそうな菊花展
甘えん坊そんなあなたが持つ魅力
あの人にむける視線を妬いている
売り切れぬうちにと豆腐買う冬至

島根県　栂　みどり

晩秋の風よんでいる枯すすき
障子貼り馴れて一人で貼る日和
白菊で飾る亡夫の日肌寒し
夢しらせまさかと思う事にふれ
朝鏡きれいな姑であるように

島根県　石田　清泉

仏像を描きだんだん近くなり
リゾートの波押し寄せる過疎の町
ゴルフ場建設怒る山の神
透析の人の話が馴染めない
やることも悔いも貯めてる十二月

島根県　松本　文子

菊活けて遠くの人を想うなり
簡単に許してしまう正誤表
老母と別れて秋の陽はすぐ闇に
崩れないようにこぶしを握りしめ
童唄老母にははの節まわし

大阪市　江城　修史

一期一会切れぬ絆がひとつある

血の絆温め合うにも遠すぎる
いつの世も失くしたものは美しい
愛憎のはざまで人は老いてゆく
ちぎれ雲風の情けを糧とする

大阪市　黒田真砂

時々は牽制球を控え目に
小半日孫と遊んだ秋日和
十八の私と飛んだ夢の橋
癌と聞く友へ見舞いの重いペン
もう一人の私に出逢う森の道

大阪市　藤田頂留子

奉祝す十六花弁の高御座
昭和三年奉祝稚児でアルバムに
独り居だが生涯二度の御大典
ゴキブリよ今日だけ恩赦して上げる
仮にそうなればなったでつく度胸

大阪市　河井庸佑

ライバルに花を持たせるゆとり見せ
我を張ったばかりに逃げたタイミング
結論を急いだばかりに出た若さ
結局はひとりになった自己主張
押して引くコツ心得る話し合い

大阪市　本間満津子

自己採点八十点はほしいけど
胸の奥でささやいているのが本音
二度赦す三度は無いと信じよう
愚痴言わぬ母がいちばんむつかしい
美しい絵だけ残ったカレンダー

大阪市　神夏磯典子

心身ともに調整をして一歩
片腕となっていつでも舞台裏
友達のために心へ油注ぐ
暴風に倒れずほっとする添木
パーマ屋の腕で髪型ほめられる

大阪市　北勝美

カルチャーで読んでいるのは文語体
佗助の蕾ふくらむ陽の立冬
空と無の多い心経に惹かされる
法然院　散華の香りふくいくと
飛火野に柿の葉ずしで遅い昼

大阪市　大塚節子

ストーブを出して豆煮く夜の秋
淀川に鴨がきている秋日和
茶の咎に今更秋の夜の長き
夜の街を大言壮語の千鳥足
老父の供三歩あゆめば語りかけ

大阪府　坂口公子

方便はもう許されぬCTS
本気ゆえ渡っても見る丸木橋
女って時には骨のない鯰
愛と憎ドラマ鎮めて畳の間
人肌の温もりもいい冬の抄

大阪市　中西兼治郎

うそや見栄うず巻いている縄のれん
長生きの母残りものばかりたべ
昏睡へ内緒で探す顔写真
塗装屋と判る仕事着のペンキ
日の丸がはばかるように立つ旗日

大阪市　冨上光代

誕生日祝われ母の歳こえる
振り向いて一人芝居を苦笑する
胸底に聞けば矢っ張り愛します
変えた理由誰も知らない流れ雲
神様が知っていますと拭く涙

大阪市　北山悟郎

石段が浮ついた心戒める
古稀を過ぎ若さと老いが葛藤す
前向きを空回りさす重い義肢
視線が心に深くとげとなる
斜めからたやすく活路拾い出す

大阪市　井上白峰

B面の抵抗音も無く消える
何事も無かったように陽が沈む
他人ごと責任の無いアドバイス
わが腹を切らずに部下の首を斬る
逃げ道をあけて打ってる母の釘

大阪市　塩田新一郎

古来稀なんておかしな古希の群れ
リモコンで動く社長は居ないかなぁ
宝籤のように総理にする期待
別々のラベルで我が家のラーメン党
朝シャンに春のきざしか孫娘

大阪市　桝本蕗児

日時計のそばで仁丹かむ男
正月の苺はイチゴの味でない
男運薄い女の膝頭
単身赴任酒と麻雀強くなる
気がつけばふたりぼっちになっている

大阪市　町田達子

古疵を許せば記憶澄んでくる
金属音出して落葉が駆け抜ける

尾道の旅

芙美子の碑一息入れる放浪記
文豪の旧居を覗く坂の道
郷土めし温い話に酔うている

大阪市　寺井東雲

結構に生きてますます掌をあわす
花言葉覚えてバラが好きになり
湯煙が見えると心なごみだす
蹴り癖があるので尻尾赤い布
頑固でも浮世の潮に逆らえず

大阪市　山田妙子

年女まだまだ走るつもりです
私より上手に魚焼くレンジ

茶簞笥に漢方薬が増えはじめ
親離れ子離れ出来ぬ幸不幸
ままならぬゴルフボールと妻の口

守口市　羽原静歩

わがいのち預けし秋の名医かな（立沢先生へ）
大鳥居我執も闘志も消えている（元日風景）
一冊の絵本にアンデルセンを刻む（幼稚園）
ラーメンにチルチルミチル見えかくれ
走ること止めて墓碑銘を洗う

守口市　野呂右近

杖置いて走ってもみる癒えた足
ひと言の添え足りなくて生む誤解
種袋金釘流の亡母が住む
よく動く妻には時間給もない
木枯らしの風は妥協を許さない

守口市　森川まさお

耳の遠い人が裏道から帰り
秋晴を誉めて宅急便がくる
予備校生わざわざ渡る太鼓橋
鰯雲パンをこぼして食うベンチ
波に浮く芥も秋になっている

米子市　石垣花子

坂の道越えた頃から胃が痛む
植樹祭　山は一日気をつかい
紳士とや火宅の妻を泣かせてて
拍手せぬ紳士が一番前にいる
六尺の亡夫もこんなに軽い骨

米子市　政岡日枝子

本とじて一目散に逢いに行く
食べることから始まったいい出逢い
許そうか許すまいかと菜を洗う
ためらわず太鼓破りに行ってくる
準備完了　親のたち入る場所がない

米子市　青戸田鶴

落葉踏む音あり秋のきわまれり
しなやかな心コスモスからもらう
たくましいあわだち草の黄がせまる
海鳴りは私への鞭じっと聞く
無人駅旅の終りもこのあたり

米子市　田中亜弥

劇の中いつも笑わせ役でいる
本能か人はとっさに身を伏せる
花鉢が冬の部屋には似合いそう
十の指個性豊かな指ばかり
生きる手筈に恋の一つや二つする

米子市　寺沢みど里

いら立ちを鎮めて薔薇と語りたい
粒揃いの柿に争う事がない
ちぎれ雲つなぎ辻褄あわせてる
三女に生まれ姉のなさけを知り尽くす
店頭で蟹のつぶやき聞いてくる

米子市　菅井とも子

派手な帯ゆずる娘が居てくれる
チャルメラが止むお得意が居るらしい
本当の勲章貰う兄も老い
停車場が昔の儘で待っていた
帰るのは包丁研いであげてから

米子市　沢田千春

逆境に傘さしかける姉妹
女の野心白いお皿に盛りあげる
焼跡をそっと見ている昼の月
時々は野心を竿にほしておく
旅の終りにひょっこり名乗る異母姉妹

米子市　川上より子

空箱に次は遊びの夢詰める
お茶の間も敬語で見てる即位の儀
お言葉をおもいおもいの胸で聞く
逞しいおでこが寝言にははを呼ぶ
腕のいいセールスマンにある訛り

米子市　小村てい子

イベントへ老骨たよりにされて出る
花鳥風月若しもの思慕は伏せておく
一呼吸おいて梯子を高くする
春雪の試行錯誤のうす化粧
氏神さまの前でわたしを整える

米子市　光井玲子

平成の動き羊も瞳を見張る
母の海預けるものがたんとある
さんま焼く小さな幸を抱いている
この帯もやっとわたしに打ちとける
忍の字をいく度書いた事でしょう

出雲市　板垣夢酔

初詣でスリもご利益祈願に来
お雑煮で犬のご飯を忘れてる
泣きごとが時報を聞いて飛んで去に
負け将棋空の湯飲みを口にする
人形師喜怒哀楽の血を注ぐ

出雲市　吉岡きみえ

奉祝のパレードそこのけ救急車
団地の窓でも父権なさすぎる
夜叉となる女のこころ七変化
あまりにも瞳がきれいでだまされる
あかぎれの痛さこらえる亡母の年

出雲市　園山多賀子

倶会一処安住の聖地を確かめる
桐一葉懺悔の言葉聞き洩らす
正論を飽くまで通し茶が苦い
過去ばかり漁れば明日の花がない
ルビつけて漢字大事にしています

出雲市　金村青湖

残照へ母のショールが重た過ぎ
いま何か言わねば秋は逃げて行く
七五三孫が欲しいと思う日も

早暁の出船故郷のいい目覚め
鯛焼きの温みを妻へ持ち帰る

岸和田市　福浦勝晴

点滴の病室ひっそりシクラメン
要するに食べず嫌いのフグ料理
風吹いてるらしい真冬の無人駅
人生に敗れて無心で読むマンガ
旦さんにもらった当座のお小遣い

岸和田市　島崎冨志子

皇室も次男は呑気髭似合う
マツタケに合せた炊き込み二合です
それからの話にコーヒさめてくる
十二月音痴は手品けいこする
弁解の半分うそで包まれる

岸和田市　古野ひで

鳥取砂丘にて（三句）

砂山の囁き裸足で聞いてみる
啄木でないが白砂てのひらに
砂丘から眺める海に夢きらら
秋ひとり想いは雲の流れから
真心を素直にきいてくれる幸

岸和田市　原さよ子

風合も強さもあって手すき和紙
書道展寸時の意欲もろてくる
夕映えのもみじ疲れを忘れさせ
相談をされて秘密が一つ増え
即位の礼映像で見られる有難さ

岸和田市　清野こう

玉葱を植えよかぼつぼつ秋日和
腰しゃんと伸ばせと友が後ろから
留守の犬鳴くのは知らぬ共稼ぎ
一つしかないのに命捨てたがる
息子にビールすすめる父ととめる母

岸和田市　高須賀金太

賽銭を拾うズボンの折り返し
酷寒の中の春光読みとろう
いたわりが通じ合うてる皺の数
楷書体ばかりで女たぶらかす
奥さんに三拝九拝しています

岸和田市　岩佐ダン吉

椎間板ヘルニアの手術を前に

待合室が病状しっかり聞いてくれ
時報合わせ出社のあてはないベッド
激痛に耐える奥歯をほめている
看護学生分別くさいことを言う
知らすなと言うては友を待つベッド

姫路市　大原葉香

露キラリ歩けたらなと思う朝
青 黄 赤 謀反を知らぬ信号機
ショベルカー鬼の牙より尚こわい

寺の鐘忘れてたこと思い出し
ゴミ戦争手強い敵を背負いこみ

姫路市　丁　坪　サワ子

グルメはもう目で追うだけの血糖値
心配が写真に出ました胃の透視
気を病むな他人事だから言えること
健康が取得もいつか薬漬け
巻き過ぎたゼンマイ切れて痴呆症

姫路市　中　塚　遊　峰

征きし夫還らず父を知らぬ息子よ
生き甲斐の息子は嫁とらず古稀の坂
すねたとて所詮親子よ二人きり
毒舌を吐いて楽しむ水入らず
古稀峠姑にはなれず米洗う

弘前市　真　喜　内　實

弁慶の死を向日葵が真似て枯れ
お帰りと言う母さんの顔が好き
じっくりと臍を見せろと言う名医
お手伝い二人で一人分護り
娘の心今宵は赤いりんごのよう

弘前市　小　寺　花　峯

大木に寄添うている利己主義者
天才でなくて良かった俺の子だ
育児書を忘れてミルク作れない
雑念と自信過剰が同居する
娘の嘘を包んで妻は嘘になる

弘前市　村　田　善　保

子に托す夢は大きな虹となり
地球儀を回せば弾丸の音がする
湾岸の砂漠に欲しい虹の橋
美しい別れの朝地図を買う
歳月が過去の傷跡風化する

十和田市　斉　藤　劦

馬の背に僕をまかせて秋を行く
足踏みの脱穀　足が覚えてた
文化賞なるほど価値の裏話
ここをよくもんで下さいもみ出し茶
お隣もみそラーメンの初あられ

十和田市　阿　部　進

きて欲しい子の親こない参観日
大輪の菊が良く知る土の味
録音を聞いて意外な癖を知る
下積みの苦労が見せる人間味
師のさとす言葉にひそむ隠し味

黒石市　相　馬　一　花

先生になればお辞儀が下手になる
残念なことに女房酒を止め
産声で思わず鼻が天を向く
札束の魔力に散った赤いバラ
泥棒の家はがっちり施錠する

五所川原市　加藤彩人

肩書を名刺の裏まで刷った雑魚
まないたの鯉にも王者の意地がある
母逝った日から仏の弟子となる
昭和史の地獄　還らぬ兄ひとり
リハビリの朝の闘志へ火を点ける

鳥取県　林露杖

生り年の柿が無住の家覆う
文化の日句集開いたまま昏れる
相槌のよさに期待をかけ過ぎた
性教育ズバリ妊娠メカニズム
尊厳死その手もあった憶えとこ

鳥取県　両川洋々

挑戦状開けると女文字でした
酒でまぎらす父の涙を子よ知るか
酒おんな僕のアリバイ崩れそう
手を合わす時はプライド捨てなはれ
離農三日土が恋しい土踏まず

鳥取県　土橋はるお

父さんの背のシグナルを信じよう
民宿の五右衛門風呂で訛ったよ
妹と二人で折った千羽鶴
一言一句父はシメジの味がする
土壇場を抜けるサーブ権がある

鳥取市　小谷美っ千

笹鳴きに心満たして厨ごと
欲捨てて黒子のままに幕おろす
想い出をなぞると闇が攻めてくる
誤解とくようにはずんだ朝掃除
雪だるまエピソードだけ置き忘れ

鳥取県　江原とみお

真実と嘘がブレンドしてあった
よく食べてよく寝るうちのお嫁さん
何の準備か般若経読んでいる
呆けた顔して呆けてない古本屋
文化の日パチンコ玉がよくはねる

鳥取県　羽津川公乃

即位の礼に丹精の菊咲き誇る
ふるさとの自慢に山の高さなど
目の位置を下げて老後に妥協する
寝袋で星のささやき見てしまう
旅に出て大阪弁でミヤゲ買う

唐津市　田口虹汀

好きな人みんな行っちゃう自選集
おでん屋で値踏みしているお人柄
ビールスは医者を敵と教えられ
口数がふえて嬉しい奉賀帖
四代に仕え無様に散りそびれ

唐津市　久保正敏

先生も親もお国も皆無策

金銀の鞍を結んだ菊日和
宿直を代ってあげる倦怠期
胎教に葵まつりの笛を聞く
バイヤーも居る談合の酒の席

唐津市　仁部四部

悠然とやがてそわそわ妻の留守
坂の町夕陽が今日をコピーする
セールスはまず忠犬の名をおぼえ
コーヒーで別れ話が済んだとさ
字が下手で辞表はまたも途中まで

唐津市　浜本義美

いつまでのいのち初日の有難し
信号は黄のまま七十一になり
燦然と絢爛の曳山街を練る（からつ供日）
物見櫓登り弥生の国覗く（吉野ヶ里遺跡）
開発という名で沈む峡の里

唐津市　浜本ちよ

お世辞だと知りつつ耳がついて行く
悠久の庭石残し人亡ぶ
蛸壺に眠るたこにも似るこの世
ロックしてお喋り雀の話聞く
気力だけ奮い手足がついて来ず

唐津市　山口高明

三日月に吠えて野性がある小犬
アーケード潜ればジングルベルの街
退院をしてもいいよと見放され
大根が煮えるぞ燗をつけとくれ
別居した妻が遊びに来いと言う

和歌山市　若宮武雄

とばっちりこれも他生の縁だろう
余生なといい夢見たい羽布団
いい事が降って湧きそう日本晴れ
カナリアへ悼む一家の失語症
方便の白旗かざすタイミング

和歌山市　堀端三男

言われる程ケチでなかった奉加帳
惰性ではないぞと夫の靴みがく
初孫の報せ夜明けにベルが鳴る
後味が良くなるように終に褒め
木偶の坊演じ苦手を切り抜ける

和歌山市　内芝登志代

いい年でありますように福寿草
あの顔この顔みんな笑顔の年賀状
寒くても待ってる母居る星月夜
母さんの背中で習った数え唄
コスモスがゆれて哀しい話きく

和歌山市　桜井千秀

婿殿はロンドン娘通い妻
勿体がついた外車の乗り心地
突風にしこたま気合い入れられる

自叙伝をいつか書く気の大机
へらへらと笑い一先ず切りにする

和歌山市　木本朱夏

そばの花不毛の愛と言うけれど
埋み火の愛は静かになかまど
生き急ぐいのち愛しいこぼれ萩
しみじみと戸籍謄本読んで秋
生きている生かされている水うまし

和歌山市　福井桂香

愛された鼓動を聞いたから眠る
言い分はカモメにもある濁り川
フィーリングだけで暮らしていけますか
隈取で人を欺くつもりかも
幸せをあげたい天使のひとり言

和歌山県　寺田裕美

もらわれてアケビが町で口あける
豊作へ流した汗は忘れよう
欠席の仮病見舞いに来ると言う
笑う日を鏡のフタが待っている
ヤジロベエ重い未来がのっかかり

和歌山市　山川克子

平成に慣れてやさしいひつじの瞳
かまきりも一人暮しか庭のすみ
酒煙草止めた男の魅力度は
世渡りが下手でストレス溜めている

案内の女将の粋な裾さばき

和歌山市　内田結実

病院のベッドで充電しています
かえらねば犬がおなかを空かしてる
退院を待ちかねたのは庭の鉢
鉛筆の一本さえも操れぬ
茜色で朽ちたし夕陽追う紅葉

和歌山市　山田高夫

Vサイン目に焼き付いて敗者たる
波乱万丈父は火の章水の章
看板の誤字を朝晩見て通り
秋夜長問わず語りにする自伝
なだらかな起伏二人のマイペース

和歌山市　田中輝子

薬変えてみましょと次の手を打たれ
ポストにも数え切れない疵がある
善意についた嘘がだんだん重くなる
真直ぐに伸びて人間嫌いな木
信号は青で言うべき事を言う

高知市　北川竹萌

鍬立てて一息米寿陽を浴びる
長い旅越えた七山茶がうまい
伸び縮みする物差しで計られる
信号が青青青で怖くなる
二十年ズボンの線が狂わない

高知県　赤川菊野

二十一世紀写す鏡を買いにゆく
も一人の私が恐い事を言う
寒いので寒い話がすぐに出る
浄土への特急券が突如来る
シナリオの通りに恋は進まない

富田林市　松本今日子

新涼にどの約束も欠かせない
のし紙で縛りつけてるくされ縁
おくすりの中は小麦粉かも知れぬ
一人出た街で個展見ています
万札に疲れ出て来て十二月

富田林市　片岡智恵子

きっかけの摑めず肩の凝りつづく
並木道秋の音して走る風
この話のつづきは株を売ってから
全部ばれれば私の罪も裁かれる
許すならその先聞かぬ市場籠

静岡市　渥美弧秀

背の孫の歌にワルツの影法師
メルヘンを追って湯治に錆落とす
仕合わせの入口妻と五十年
オカリナの楽の音心の底の底
鍵盤にワルツ流れて躍る宵

静岡県　薗田獏沓

「また電話くれて」と女にかわされる
山に来れば何時も紅葉と思う客
悪女から深い情けを授けられ
一筋にこだわり続け大授章
年賀はがき誰かに幸運届くよう

広島県　藤解静風

雨の日の夕餉はやめに老夫婦
友達に置いてゆかれる日の寒さ
月謝まだ足りぬ俳画の墨の彩
敗者復活嘱託の名で出ています
水くさい子らで留守番電話など

広島県　田村新造

北満の夢でも見よう雪しきり
アムールは凍結捕虜が冬に泣き
サルビアが真赤に炎える亡母の墓
あやかって孫に貰った紀の一字
観劇で諭吉一枚飛んで消え

堺市　柿花紀美女

秋済んで国定忠治の村芝居
無花果の裂けた生家の庭に立ち
磨かれた石も父も孤独なり
ふかし芋戦時の話孫にする
渋柿も実りの秋へ彩を染め

町田市　竹内紫錆

引退の弁　眼の下のたるみかな

父上と書く手本など伝わらず
丹前で郵便局にならぶ齢
食券も自販機　縁のないグルメ
七宝の炉の前主婦のしゃべる会

神戸市　仲　どんたく

歩留りの稀少に列しながらえる
陶工の鞍下馬無し轆轤舞う
陶工の無口を轆轤知っている
紅葉の点景となり鹿二頭
鼻の差で花子は太郎の嫁になる

香川県　松村迷観子

親馬鹿と言われ五十の子を案じ
助けてる方は世論の隅でおり
唯生きるだけの点滴ならやめて
旨い汁過ぎると酢っぱい汁になる
初心なおベッドにゆさぶりかけてくる

有田市　松井かなめ

末吉のみくじあせらず待てとある
菊人形の西郷どんに会いに行く
ムードない妻も笑顔を持っている
向い合せに座ると横をむく夫
奮発した輸入松茸匂わない

茨木市　井上森生

無窮とか遙かを想う雲の上

米国の旅句日記

モネ・ミレー　レンガの街の絵の世界
握手また握手つきあいの上手い国
浜薫るサンタモニカの若い肌
ギャル踊る眩しや裸裸裸ロスの夜

吹田市　栗谷春子

コンサイス一冊ふえて秋せわし
風邪に臥す昼の畳のやさしさに
葉刈する鋏のひびき犬眠る
雲はしる秋だ秋だとつっぱしる
平成になれてすこぶるお健やか

海南市　三宅保州

逃げ腰になるから月も追ってくる
面白くないのに笑う芸がある
無学とは思えぬ母のお説教
顔のない電話へ油断してしまう
あんたには負けたと言わしたい土下座

伊丹市　山崎君子

十三夜亡父の日記も月見酒
いわし雲庭のはさみのリズム感
宅急便柿に本家の気品あり
忘年会鍋の向うの泣き上戸
ひつじ年静かな亡父がアルバムに

川西市　野村静雄

蹉いた痛さを知らぬ不仕合わせ
先生を弔う列に小さく居る

タラップをついそこまでの顔で降り
目が肥えてからの見合いがまとまらず
御馳走さまと言える喧嘩を泣きに来る
笠岡市　松本忠三

玉露より番茶であって愛される
団栗の一つとなって背比べ
お迎えはまだで院居士授けられ
秋冷へ蠅が我が物顔でいる
大田市　藤田軒太楼

酔いざめの水にまたまた妻の愚痴
表面は了解裏面は爪を磨ぎ
家計簿を中に気になる子の育ち
斜めから見詰められてるじれったさ
仙台市　川村映輝

体力の衰え気力でカバーする
自惚の鼻を折られたササニシキ
息子より娘の家庭くつろげる
間違いの電話またも女性から
諫早市　原田メイシュン

気はないが手を振って候補者喜ばせ
焚火囲んで陰口に花が咲き
天守から殿になった気で城下見る
鯛の値をきいて鰯を買うて去に
神戸市　山口美穂

風邪に臥し秋の予定を狂わされ
葦も水もわたしも言うことたんとある（水郷のスケッチで）
大晦日の日記　去年と同じ悔い
忘年会義理と本音を使いわけ
玉野市　小谷仙山

湯豆腐で寒さ夫婦でかばい合い
どちらにも言分が有り父が負け
疑心暗鬼　木馬は今日も走らされ
先ばかり読んで歯車くい違い
貝塚市　行天千代

老い一人酒も煙草も用はない
嫁姑ひと言おさえりゃ揉めず済み
年暮れる母の暦がうすくなり
亡き夫の二十三回忌も近づいて
羽咋市　三宅ろ亭

王朝の絵巻に浸る即位の儀
電線にずらり並んで渡り鳥
寄合いで知った村の政治秘話
珍しく博覧強記をのぞかせる
和歌山市　坂部紀久子

初心まで掘り下げてみる気の迷い
これっ切りと言えば男は慌て出す
薄化粧より濃い方がよく喋り
糸ピンと張って三味の音冬に入る
倉吉市　渡辺菩句

電話では足らず話にやって来る

夢が形になって宇宙観光船
壁に耳そのうえ盗聴器つけている
美食になれたか犬は歯を剝かず

倉吉市　野中御前

海鳴りが今日も鳴りだす耳の底
壁画のなかに男たり女たり
黒潮の流れに乗ってきた鰯
バラ展のバラが互いに薫りあう

倉吉市　淡路ゆり子

徹夜して書いた手紙の誤字脱字
踏台を高くして神棚を拭く
父母の眠るお山に手が届く
てんぷらが美味しく出来てママ偉い

岡山県　岩道博友

転がしてかんしゃく玉を押して去に
親睦の写真も指定席があり
汽車が来ぬ鉄道友人もう居ない
真ん中を書いて左右を次に定め

岡山県　花田たけ志

半分にできない欲が生む悲劇
大き目に孫は敏感半分こ
結論へ急がせている悪企み
幸いの目線下げれば軽い足

岡山県　松本元江

切り返す言葉を呑んで胃にためる
苦と楽のバランス取ってるヤジロベー
タイムマシンの中に身を置く明治村
坂道を登る荷を捨て欲を捨て

鳥取県　谷口次男

虎の威を借りて大声出す男
窓際でへのへのもへのを書いている
竹光を差して威張っている男
米作り忘れた農夫米を買い

鳥取県　さえきやえ

百姓の自由よ降る日休みなり
父さんが近頃マンガ読みだした
友の数ふえてたのしい押し絵する
痴呆とのたたかいツメが割れてゆく

鳥取県　津村八重子

籾種にまた来年の夢つつむ
筆太に賀状の絆つないでる
器にはすぎた七光の椅子か
トロ箱のカニは高値の泡を吹く

鳥取県　乾喜与志

念仏奉仕団に参加（二句）

奉仕する旅へ出てゆく般若湯
障子の桟の埃を払う愚痴はらう
育てた人の香り漂う菊花展
文化の日のパチンコ店が満員だ

鳥取県　田村きみ子

雪こんこ孫のセーター編み急ぐ
優等生だったあの娘は未亡人
花好きな姑です心きれいです
日帰りの旅でも嫁に見送られ

鳥取県　幸家單車

億もする土地でトマトは赤く熟れ
ダイエットわすれ味覚の旅に出る
瓢箪も金のベルトを締めたがる
どの辻を折れても貧乏神に合う

島根県　松本はるみ

口笛の誘いに乗ろう紅ひいて
古里の温もりがある山ぶどう
酒飲めぬなどと殊勝げなことを言う
病みつきになって慌てた袖の下

島根県　北川民子

先客が汚れた札入れ出して買い
弾む日の心電図私を裏切らぬ
記憶力まだまだ丈夫と言ったけど
やがて冬そろそろ充電しなくては

島根県　藤原鈴江

真実を曲げて生きるも歳の故
心臓の鼓動数える朝の霜
不自由な眼に愛着の針をもつ
寒さなど気にせず喋る寒すずめ

出雲市　小玉満江

先々で役立つ石を持っている
ジャンケンポン孫に勝ったら嫌われる
ブラウスに風はらませて島めぐり
スナップの日付が嘘を言わせない

出雲市　小白金房子

対岸の灯わたしを眠らせぬ
短日へ遊びざかりを塾通い
収穫の大豆弾ける秋の天
もみじ寺若き尼僧の落葉たき

出雲市　久谷まこと

ふくよかな笑顔が今日を倖せに
おしゃべりが昨日の噂ふくらます
四面楚歌もつれた糸も解けぬまま
慰めの言葉善人らしく聞く

和歌山市　細川稚代

選ばれたサムライ共の胸の内
頂点に立って淋しい木守柿
自画自賛そんなあなたにつかれきる
デメリット上手に捨ててい笑顔

和歌山県　西口忠雄

はしゃぐ声ミニスカートにあるらしい
あいりんの名前に恥じる睨み合い
保護色になりきるまでのいい辛抱
鼻の下長いとはっきり言うてほし

和歌山県　岩崎瑞穂

物忘れひどくなっても口達者
方便と言って本気で嘘をつく
赤旗で政治の裏も知りつくし
話し好き時々まじる作り事

吹田市　茂見よ志子

初咲きを仏と私も待った菊
順繰りになった立場よ姑偲ぶ
吹きだまり他所の落葉へ愚痴も掃く
友と行く旅へ夫の機嫌とる

吹田市　井上照子

花束は重荷も添えて胸に抱く
羽子板も凧もストレス溜めている
喪中欠礼亡母すまないね風の音
大地這う亀もプライドあるものを

米子市　茂理高代

死ぬ事も病むも出来ない罪を着る
お喋りが嫌になったらどうしよう
追いこせる位置で自信湧いてくる
月がやさしいから窓あけておく

唐津市　筒井朴竜

人生を拓く柳句の入門書
一朝には成らねど過疎へ杉を植ゆ
姿見へ映す老醜あぶら汗
柿衛もん窯煙の空あきつ翔ぶ

竹原市　信本博子

書き初めへ今年の夢をありったけ
じっくりと言葉を選って初日記
水平線命湧くよう初日の出
働き蜂居心地悪い三ヶ日

竹原市　岩本笑子

鏡なら本音言えそうルージュ引く
知らぬふり知らせぬふりの夫婦愛
秋に病み紅葉はいつも美しい
石を蹴る男を後ろから庇う

竹原市　岡本清水

善悪も明日という日の来ぬうちに
目覚し不用朝の四時には醒める齢
手相見が雲に乗る運持つと言う
五百羅漢欠けているのは私の座

河内長野市　井上喜酔

好きなだけ喋ってストレス持たぬ妻
マイカーの乗りかえ人生ぼけずいる
抵抗をするなら味方の多いうち
人情に弱い飲み屋のカウンター

河内長野市　植村喜代

何も彼もわかって黙っている辛さ
淋しいのに秋が好きで柿が成る
目が覚めて雨が降ってる暖かさ
聞き流すことを教えた母がいる

大阪市　渡部さと美

スーパーのはしご家計簿のいくさ
庭先の誰にもあいそのよい小菊
端整な九十歳にあこがれる
父の忌がめぐる睦月のあたたかさ

大阪市　板東倫子

錯覚と知らぬ女の白昼夢
下相談あったと知らず落ちた罠
ライバルもダークホースを自負してる
踏み絵踏む馬鹿正直は親ゆずり

大阪市　岡田ふみ

古い形の服だがとても暖かい
主夫と主婦ポットのお湯が涸れている
ばあちゃんの包みは軽くてぬくい物
世界地図ほしいと祖母が言い出した

大阪市　冨岡温子

許し合う情けを分けた四畳半
此の腕で掴んだ道だ迷わない
平和とは今更辞書を引いてみる
苦しさに負けぬ若さと恋がある

大阪市　清水利武

三段腹ジャズダンスには息が切れ
デパートへ主婦ストレスを捨てにゆく
恋破れ夢に破れて酒を追う
金の成る木たくさん欲しい年の暮

能登の旅（二句）

岸和田市　芳地狸村

荒海の渚を車で散歩する
二千年汚れを知らぬ気多の森
おしゃべりの舞台に顎が落ちている
間違いを取消す勇気ありますか

奈良県　中原比呂志

元旦は三食包む早出勤
本当の歳は書きたくない定期
虹色に輝くレールがのびて行く
ペン胼胝がいちばん喜ぶ刷り上り

藤井寺市　福元みのる

裏話聞いて喝采倍になり
落ち込んで来ると夕日を恋しがり
資格とり産休もとり転職す
風邪引けば寝るに限ると医者も言い

和泉市　岡井やすお

とし聞かれ一拍おいて傘寿です
楠一本残し町並一新す
相談に乗って責任取らされる
消去して行けば候補者居なくなり

箕面市　椎江清芳

間の抜けた顔にうっかり油断する
よそ行きの顔で仲人席につき
下駄箱の下駄の出番も松の内

影の無い姿気付かぬ深海魚

守口市　結城君子

晩秋の空ひたすらに旅を恋う
走り去る秋をとらえろファインダー
ニュース速報知らない雲が動かない
体調に秋の逃げ足早かった

静岡市　安本晃授

雪月花薫る暮らしにあるゆとり
半熟の卵が気負う自己主張
望郷の草鞋を捨てた土踏まず
どん底を這った身だから浮かばれる

豊中市　辻川慶子

出稼ぎが帰るリンゴも色づいて
友見舞う見舞うわたしも医者通い
夕焼けを背に教会の坂の道
初鏡ゆずりし帯を娘に結び

西宮市　瀬尾六郎太

おとこおんなあわやの均衡素敵だなぁ
おじいちゃんお月さんのお家ってどこお（ギョッ）
日の本は旬がなくなり四季残る
また不祥事しっかりしてよお役人

寝屋川市　堀江光子

名優はうしろ姿で泣いて見せ
裏町へ曲り出逢うた十三夜
菊一枝持つ絵姿の引きしまる

結局は前日になる旅支度

倉敷市　井上富子

ふところの奥はあなたの指定席
ミンクのコートにローンの裏がついている
認知という女遊びのつけが来る
安楽に逝くことばかり願う数珠

境港市　細木歳栄

あけぼのの光歳など忘れさせ
リラックスして遊びなさいと主治医言う
初嵐咲いて茶室をなごませる
一期一会老師に会った帰り道

福岡県　横地正好

守る程過疎にリゾート爪を研ぐ
右左車を縫って過疎の老い
物分けることは学ばず一人っ子
億の金男の度胆を抜くニュース

加賀市　細呂木魯木

子の怪我へ追加忘れた救急箱
成りゆきで本音吐いた後始末
心のとげが抵抗を刺激する
ライバルも作らず余生の閑を知る

米子市　金山夕子

新しい光を溜める羊の目
春の約束雪に耐えてる冬牡丹
初冠雪の姿直立不動なり

開店粗品意外な人が列の中　出雲市　石倉芙佐子

情念の海も静かに春となる
枯野今ちらちら雪の花盛り
山小屋が遠い私の絵の中に
善悪の定めもつかぬ冬苺　岸和田市　三輪通彦

大晦日神も露天も徹夜する
下心あるので馬鹿になりきれる
叱る前子の言い分も聞いてやる　川西市　松本ただし

人権のブランドバーゲンされる記事
右顧左眄吃水線が上下する
人不足誘いの来ないベレー帽　大阪市　松尾柳右子

冷蔵庫奥にあるのは見はなされ
天高く義歯が味覚の邪魔をする
母娘して煙草しめ出す兎小屋　大阪市　松永すすむ

灰皿がいつの間にかベランダへ
邯鄲の枕で一夜寝てみたい
勇気だせ男の意気地　寒椿　大阪市　神保拓生

先生も親も叱らぬ子の行方
油断してつい本音吐く酒の罠

まだまだともうと返事の七十路　京都市　渡辺圭坊

新世紀一歩近づく初日出
砂吹雪羊の歌は鳴り止まず
晩学に今年こそはより今こそは　茨木市　堀良江

木管の音まろやかに冬立つ日
即位の礼御心のごと秋は晴れ
ご大典と明治の母は言いました　堺市　荒川磯子

落葉焚くけむりの里の駅に佇ち
おみくじの幸報ありを信じます
文珠堂ねがいをむすぶ紙のはな　出雲市　河原恵美子

塩加減少し控えた娘です
冬木立別れたくないテープ巻く
妻がいて子がいて父のりきみ顔　島根県　高野律子

故郷を遠いと思う日の孤独
寡黙なる父の笑顔は嬉しいな
もう誰も甘えてくれぬ膝となり　岡山県　直原七面山

ジョークで誤魔化し
手を振って妻は逝き
悲恋を捨てに旅に発つ

自選集

辛未に寄す

群羊の陽は燦々として無色
牧羊の背伸びを訪うて初日の出
まぶしさの白く羊の春とする
朝夕を追われて羊安らぎぬ
花道の羊の夜明け影長く

水粉千翁

御無沙汰の詫びは元気な一行詩
思い切り悪い茶漬けに京の味
もうちょっと生きて居たいし煩わしいし
知らんまに年寄り染みた歩きらし
今更に朝めしうまい日が続き

児島与呂志

うなだれて刈り取りを待つ稲穂
拍手する要員として駆り出され
虎刈りのような男の拭き掃除
当分の間が三年目を迎え
剃刀の電池を抜いて旅終る

野田素身郎

お帰りなさいと言う宿の玄関
雨垂のように時計の音聞く寝られぬ夜
救急車の通ったあとの秋の道
がんばってるねと自分を上に置く
純一無雑　一日一日を大切に

正本水客

かたつむりおまえはどこで冬籠る
いい湯だと言ってるらしい手話二人
地の塩になれず木の水にもなれず
恥ずかしく老いたくもない日の歩幅
なんという雪だ予告もなくつもり

波多野五楽庵

春夏秋冬　粗食で済ませ医者知らず
要注意の個所はまだない達者です
もう十年生きるつもりの万歩計
手が出ないから溜息が出るのです
成り行きに任せストレス溜めぬ主義

金井文秋

喜寿・十二月八日

我武者羅に生きて七十七となる
有難い国で憲法第九条
海のようなでっかい欠伸して無職
由緒ある貧乏だからあきらめる
難しい本は読まない事にする

工藤甲吉

台所の椅子には太陽が坐る
丸腰で坐れる椅子がそこにある
少しいびつな椅子をわたしの定位置に
背もたれの椅子にしばらく抱かれよう
きっぱりと起つそれまでは掛けている

八木千代

嫁が来て家風の角が丸くなり
まだ生きていたかと思う賀状来る
元旦の計は立てないことに決め
大凶のくじへ賽銭惜しくなり
肩書をラベルの様に貼り変える

有働芳仙

古希のいま私に越せぬ私の樹
白い菊が胸を漂白してくれる
監視所の消防服も屠蘇機嫌
溜息を風船に詰め飛ばそうか
我が罪は我が人生の長さほど

久家代仕男

ゆらりゆらりと新しい旅始まりぬ
石橋も去年叩いてあるゆとり
作詞作曲　譜面はピアニシモにしよう
決めていたゆとりの旅だ模索せぬ
露天風呂疑う余地もない星だ

野村太茂津

車内から拝ませているバスツアー
照明がつくだけ点いたフィナーレ
部屋の鍵渡す相手が未だ居ない
手を抜いているのを気付かない相手
窓口で素人無茶な事を言う

辻白溪子

どうぞどうもとシルバーシートに書いてある
イヤリング嬉しい話聞いて来る
錦市場ててかむ鰯も売ってます
被せたらベレーも似合う地蔵さま
カスミ草となら仲良うできそうで

松川杜的

生き残る佗しさを見る残り菊
すんなりと輪になる同じ釜のめし
大輪を咲かせやさしい土になる
城のある町へ移って茶がうまい
ほどほどを許す夫婦の風が熟れ

遠山可住

健康な箸が揃ったとその膳
大山の紅葉　雪を待つ姿
八十路へ一歩　柳友心配してくれる
先着順で上席のおちつかず
新春の祈り両手に仕事と川柳

藤井明朗

困ったらみか月さんと対話する
廃線へ枕木きっと泣いている
聞くだけは聞こう眼鏡のくもり拭く
ライバルの金歯が今日はよく光る
大時化も覚悟船出の海が風ぐ

小林由多香

馳け足で傘寿そこまで来てる新春
鳩笛に誘われ走るひつじたち
除夜の鐘ひつじの春が明け初める
ほのぼのと祝いにひたる三ヶ日
健康がただありがたし初春の紅

藤村〆女

血の遠い人には貸さぬ糸電話
路地裏で朽ちてしまった父の旗
目が動く男に何も任されぬ
子を負うて粗品の列へまたはいる
芒穂の一本ずつにあった冬

月原宵明

あかぎれが痛むたんびに父思う
三十年威張った人の薄煙
女脱ぐ一瞬　男の眼を盗む
冗談へ巡査笑いをこらえてる
即位式ああ皇室は皆役者

大矢十郎

おふくろの心づかいに溺れてる
財無いが二男二女という宝
うす闇を怖がるほどの美女じゃない
ひとり飲む酒のうまさを知ってるか
都会には無いど母の煮ころがし

岩本雀躍子

風はもう春なり草木艶を増す
車捨て賀状届ける坂の町
肩書を捨てて新春の酒を酌む
精一杯働く汗が美しい
船着場　故郷へ戻る女と逢う

黒川紫香

黄道吉日　心と心結び合い
虹色の気炎がはずむクラス会
そっくりの横顔ママに貰い受け
老妻と欠伸を移し合うて無事
古着屋のように広げた形見分け

本田恵二朗

ひばりではない牧人さんの声
軸吟はいつも拙い摩天郎
串カツを食べに行きまひょ一三夫さん
駅前で美人の美代と飲む珈琲
美しく傍島静馬老いたりき

高杉鬼遊

ハッピーバースデーツーユー幾つ何十になろうとも
兎も角も無事に終ったご大典
物知りと言われ立読み止められぬ
虚勢かも吹いた煙草の輪が乱れ
自転車と一緒にモラル放置され

西田柳宏子

灯油値上げおしくらまんじゅうでもしよう
うまいこと表現出来ぬ私の鼻
前ばかり見ていたことになってくる
それはそれで愛着のある紙袋
何時までの家族でみかん剝いている

小出智子

ご主人のストレスを猫うつされる
あなたには悲劇わたくしには喜劇
蠅地獄　蠅にやさしい香を放つ
主婦　母　妻こなし運動足りてます
息子らの靴が大きな顔をする

河内天笑

元日や路郎の加護の断一字
初光りおみななりせばビーナス像
面白の宇宙船中　姫始め
書初めの文箱　茜の根来塗
好きなこと好きなだけして道遠し

橘高薫風

川柳大阪50周年川柳大会

とき　平成3年3月3日（日）
ところ　府立労働センター（エル・おおさか）
（地下鉄谷町線・京阪「天満橋」西200m）
祝辞　川柳塔社主幹　西尾栞氏
おはなし　東野大八氏
兼題と選者（各題2句投句拝辞）
「信号」　奥山晴生選
「テレビ」　河内天笑選
「満員」　海士天樹選
「情熱」　森中恵美子選
「のびる」　橘高薫風選
会費　1000円（大会誌呈）
賞　各題秀句に大阪市長賞・教育委員長賞ほか賞状および記念品贈呈
◎記念行事として「大阪を詠む」を2月末締切で募集。ハガキに2句を書いて左記へ
連絡先　〒636－01
奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2－4－23
中原比呂志

川柳太平記（152）

川柳の群像

吉川啞人

東野大八

麻生路郎主宰の『川柳雑誌』が創刊号を出したのは大正13年（1924）2月15日付であった。当時、路郎は37歳。菊判36頁（一部30銭）、裏表紙の創立同人は、岩崎柳路・吉川啞人ら24名で、支部は11。創刊号のトビラに路郎は

「現代人の思想にぴったりと触れた詩と言えば、川柳の外はない。我等は此の川柳によって人生を的確に批評して行きたいと思っている」

という書き出しで、卑俗視されている川柳を人間の真実をもって裏づけた人間詩であることを意気高らかに指摘し、この道に一路精進することを宣言している。

「ここで路郎が川雑創刊に踏み切った、いわば引金となった一つの事柄について述べておこう。当時、大阪に川柳以交吟社というのがあり、柳誌『みをつくし』を出していた。

路郎はその顧問格であった。川雑の出る前年、結成3周年を迎えた以交吟社の連中が

「柳詩みをつくしの在り方にあきたらず、その同人連がそろって私を迎え、私が主盟となって大改革をして貰いたい、と要請してきた。もし腰をあげて頂ければ、この柳誌を廃刊して、新柳誌を改めて刊行したいという。私はそれを受けることにした。同柳誌は直ちに廃刊が実行され、私の手によって『川柳雑誌』が生れた」（路郎談・山雨楼メモ）

この時、路郎は大阪毎日新聞社の経済主任の職にあったが、右の事件とともに直ちに辞職届を出している。かねて抱懐する新柳誌発刊の夢に、片手間仕事ではモノにならずと判断したとみる向きが強い。

このような事情から『みをつくし』同人であった吉川啞人、高橋古城山が宣伝担当。竹田蘆穂が編集、橋本二柳子（のち緑雨）が会計、太田一声が広告といった川雑発行のための部署がきめられ、他の同人は住居地域中心の川雑支部責任者となっている。

従って川雑のスタートは、既刊3年の柳誌『みをつくし』（四六版横綴20頁の実績をもつ）スタッフが主柱となっていたのである。

そのため路郎は、ひとり全力投球の筆陣を張り、作句の一方、純正川柳の社会普及の講演や指導に馳け回っている。活力に溢れた川雑のスタートであった（「麻生路郎物語No.13〝川柳雑誌の誕生〟筆者記述から）。

大阪市電気局というのは、俗に言う市電、すなわち公営路面電車の企業のことである。明治36年9月12日に開業した折は花園橋西詰から築港桟橋間の5キロであった。大正時代には路線網が拡大して一日八十万人からの大阪市民たちの足となって活躍した。その後大正12年10月大阪電燈株式会社を吸収し、大阪市電気局と改称し、創業時に電車につけられ

ていた大阪港の運航標識である澪標（みおつくし）に電気局の「電」を加えた局章が告示された。

この市電の従業員も創業時の約二倍にふくれ上がり、八千百名を越えた。この従業員の自負と意欲と活力をそのまま、局の文化活動の一翼としての川柳部門は、柳誌『みをつくし』を中心に、情熱的な活況を呈した。

この柳誌の母胎である以交会は、かくてこの柳誌から『川柳雑誌』を産み、昭和16年に『川柳大阪』へと受け継がれ、この柳誌は昭和59年8月にはなんと五百号を越え、平成3年の今年には『川柳大阪』50周年記念大会を迎えようとしている。

そのかみの以交会長兼『みをつくし』のリーダー格で活躍した吉川啞人は、本名菊助。明治25年12月30日山口県生れ。大阪市電気局運輸監督だった。川柳は大正3年ごろから古川柳にひかれ、柳号啞人で早くもこの年に岡本鳥石と柳誌『カラス』を出すという精進ぶりであった。しかし、この柳誌は五号で終刊し、関西川柳社の誕生で生れた『番傘』に投句。この素地から川柳以交会会長となり、『みおつくし』創刊主宰者へと結びつく。

この当時から岸本水府、小田夢路、内藤凡柳らとの風交も生れたが、結局、同じ親交ぶりにあった麻生路郎が、『みをつくし』の顧問格であった縁から『川柳雑誌』の出現へと結びついたのである。

「従来大阪から、川柳以交吟社の同人の方々が、日に日に『みをつくし』が隆盛になり、多数の会員を有する結社になったので、単に会員相互間の機関誌であるというだけで満足が出来なくなり、『みをつくし』創刊当時から同誌の顧問という関係にあった私のところへ、主幹になって雑誌を大きくしてくれぬかという交渉がありました。

けれども私としても、全く突然のことであり、お断りしようかと思ったが、余りに以交吟社の方々が白熱的なのに動かされて遂に起つことになったのです。

もともとこうした仕事は、物質的に恵まれていないでは、そう楽々とやっていけないことも百も承知なので、気永にやっていこうと思っております。それがため、以交吟社の人々に前述の方針の下ならば引き受けよう、そして、単に以交吟社にとどまらず、この際出来るだけ多くの吟社を併合して、雑誌を堅実なものにしようではないかと、謀って賛成を得た次第であります（大正13年2月15日発行『川柳雑誌』創刊号・編集室から路郎生）。

この件について福田山雨楼は

「以交吟社会会長としての啞人さんの意気込みは大変なもので、さすがの路郎先生もたじたじの態だった」

とその山雨楼メモに特記している。『みをつくし』はかくて27号で川雑に合流。この頃、亜人は昭和2年一身上の都合で郷里山口県に帰ることになり、大阪の地を離れる。

戦後、山口県大島郡大島町で、浪の音川柳社を創立、柳誌を出したり、程なく個人誌『有題無題』を手がけたりしたが、昭和49年4月百号で終刊。この前後から『ひろしま』誌の前身『さも』に、菅生沼畔の請いにより「酒と川柳」の随筆などを書き、昭和50年3月25日死去、83歳、文教徳瑞居士。

『川柳雑誌』創刊号に「句の境地」のエッセイのほか、川柳塔欄巻頭に10句掲載されている。その中からの句。

女房の仕度にハガキ二枚書き

一番の鶏に雑魚寝の一人ぬけ

珍客に電灯の玉替えるなり

＝参考資料『川柳大阪』中原比呂志提供

▼次号は「**橋本緑雨**」

柳籠裏三篇研究（六丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

93　**紅麻をふり〳〵申シ殿さんへ**

西原＝紅麻がわからない。管見の限りの辞書にはない語である。紅の麻の葉の染め物であろうか。

句の人物は、言葉から低級な印象が強く、浅黄など田舎侍や安私娼であろう。彼等の低級な色感で、流行の麻の鹿の子紋も赤みがかったものを好んだものであろう。従って、紅麻といえば、その趣味性の低さを軽蔑しているとも受け取れる。

句意は、私娼が、今でいうなら赤いタオルのようなものを振って「チョイト、そこのお殿さん、お寄りなさいな、遊んでいきなさいよ」と客を引いている図でもあろうか。

佐藤＝妾の媚態と考えていたが…。

岡田＝さてこの句も本書中での難句の一つ。「紅麻」は衣類にも用いたが、「紅麻の置手拭で麻黄しゃれ」（一一4）のように手ぬぐいにも用いた。句は「振る」とあるので、これは手ぬぐいの句と限定してよかろうと思う。また、「紅麻を振り来るのきやんらしさ」（安六宮1）ともあるが、これは踊り子であろう。主題句も踊り子が御留守居役に向かって……とも取れぬことはないが、「申し殿さんへ」とあるのだから、佐藤氏の説のようにお妾の媚態、これが一番ピッタリすると思います。

なお、紅麻については、もう少し研究してみたい。

94　**なる程夢ちがひの宝船也**

西原＝これは宝船そのものを詠んだものではなく、結局、宝船に乗ったようになった北条政子を詠んだものである。

『時代川柳大観』を引用すると、政子の異腹の妹が「高峰に登り、日月を左右の袂に入れ、橘の三つなった枝を髪にさす」夢を見たというので、政子はこれを買いとり、頼朝と契る機因を得たといわれる。「なる程」という語気から、政子の故事を聞いた人の納得さがよく出ている。

いい夢を政子御前は買ひあてる　四〇27

七久保＝「夢ちがいの宝船」は、大道芸人などの滑稽な言立を記したものの序文によくあるので、かなり広く使われたのでしょう。

紀内＝『守貞漫稿』には、「今年嘉永四亥買得る宝船の図、或は七福神と獏を描る宝船もあり」という記述があります。句意はよくわかりませんが、正月二日の晩、この宝船をしいて寝たところが、とんでもない夢を見て、三日朝、ナルホド…、と解しましたが。

岡田＝紀内君のように解していました。しかしこの句は、いわゆる動く句で、解者によって別説が出て来ましょう。

95　**呑ンだ事もなくって甘露のやふだ**

西原＝「うまい！まるで甘露のようだ」というが、その実、甘露を呑んだこともないくせに、というだけの句。

七久保＝酒のみがよく使う語を下戸がまねたのです。

紀内＝賛。「かんろハ古へ甘露降るなどいひて史籍にも書して、祥瑞とせり、これ物理にくらき代の誣言にてありまきといふ目にも見へぬ叢りたる小虫の樹上よりそそきたるいばりといふ本草啓蒙に詳記せり」（俚言集覧）

岡田＝甘露は、天から降る美味の水ぐらいに軽く解していいのではないかと思います。

96　**友達のはね出シものを親父ほめ**

西原＝友達の跳ねだしもの（ドラ息子の仲間では、その者だけがドラでない。即ち一般世間からみると普通なんだけど、ドラ息子に言わせれば、仲間の跳ねだしものである）を、親父がほめる。

「○○君をみろ。お前のように吉原通いはしないぞ！」と。

八木＝賛。吉原から独り帰ったケースかと思っていましたが、そこまできめることもなからん。

七久保＝賛。親父がほめた息子は、論語の素読などしている固い息子。

岡田＝同。

97　**久しい鳴リで女房ハ夜着をとき**

西原＝久しい鳴りは、数日前より雷鳴のすること。秋風がふく頃、雷鳴がある。稲光で稲の出来具合がいいともされた。

そろそろ涼しくなるからというので、夏のうち、しまっておいた夜着を女房がとり出したというもの。

天文をかんがみ女房夜着をとき　二五13

青木＝賛。「夜着をとき」は、布団皮は洗い張を、綿は打ち直すために解くことと解しますが…。

佐藤＝「久しい鳴り」は、しょっ中口に出して、騒ぐことであろう。「ぐずぐずしていると、もう寒さがそこまで来ているので、早く布団の綿を打ち直しに出しておかなくては」などと言っているが、外の仕事にかまけて、手のかかることはどうしても後回しになってしまう。今日もまた、それを言っている。大分前からそれを口に出して繰り返し言っているくせに、ぎりぎりのところまで来なくては夜着などの手入れはできないものらしい。亭主いわく「夜着をとくと言うのも久しいもんだ」。それでも、何とか遅れずに間に合わせるのもまた女房ではある。

岡田＝佐藤説、賛。

98　**大道で口舌しているけちな所**

西原＝口舌は「いさかい」のことだが、川柳ではたいてい男女間のことである。けちな所は吉原の切見世前、大道は、その路次のことで、道路上でというところを大袈裟に表現したもの。仲の町では、こんな景はみられないというのである。

切見世の口舌一人は腰を掛け　八18

青木＝大道で口舌―街娼―夜鷹、では。

佐藤＝吉原それ自体はけちなところ、とは言えぬが、礎稿でいうように西河岸や羅生門河岸ならたしかに「けちな所」である。したがって、礎稿の吉原の河岸という説に賛。

七久保＝私は山下あたりの「けころ見世」を指していると思う。

身じまいをけころでんどへ向いてする　一二11

岡田＝路地でなく〈大道〉である。七久保君ご引用の句のデンドはすなわち大道の訛り。ケコロ見世と思います。ケコロ見世は上野山下ですが、裏路地にもあったが、中には大道の町家のあいだにもあった。

同人特集　私の一句

白菊一本咄々語る老画伯　八尾市　西尾　栞

こんな世にこんなきれいな茄子の色　奈良県　長谷川春蘭

百歳になってまだまだ百かいな　岡山県　直原七面山

手綱緩めてゆらりゆらりと参らんか　和歌山市　野村太茂津

ブランコに明日の夢がゆれている　守口市　羽原静歩

かと言うてとは言うものの腕を組み　倉敷市　水粉千翁

輪の中に居て倖せに気がつかず　大阪市　井上白峰

保護色で雑踏うまく切りぬける　姫路市　大原葉香

ひとつしか持たぬ命を持て余す　尼崎市　奥山美智子

ベビーベッドの横の小さな陶酔よ　米子市　林　瑞枝

今一つ足りないとこがあって好き　伊丹市　樫谷寿馬

正解なし　わが人生をよしとする　美祢市　安平次弘道

生きている証　薬草干している　出雲市　園山多賀子

木々豊富朱黄緑嵐山　西宮市　瀬尾六郎太

人間がおめでたいので春が好き　大阪市　岡田ふみ

星の降る下にんげんは烏賊を釣る　鳥取県　新家完司

さみしさを隠すピエロの厚化粧　和歌山市　青枝鉄治

今日だけは無言オウムに拝みたい　堺市　高橋千万子

老人の過保護叩いた講演会　岡山県　二宗吟平

脳みそを入れかえたくて本を読み　呉市　槇田英詩

目の毒といわれる方へ向きたがり　米子市　小西雄々

ハーレムの夢へ孤老の逞しさ　東大阪市　森下愛論

春の風通して団地の和を広げ　和歌山県　西口忠雄

口笛を乗せるとペダル軽くなる　川西市　松本ただし

満ち足りて今日もバンザイして寝てる　寝屋川市　平松かすみ

絹糸の張音は母の意気である　寝屋川市　稲葉冬葉

恥多くかいて自分の顔となる　出雲市　竹治ちかし

化粧瓶の数だけおんな祈りもつ　大阪市　西出楓楽

雪女せめて逢う瀬は華になる　出雲市　石倉芙佐子

親と子の対話を真似る九官鳥　箕面市　椎江清芳

愛すこし微笑みかえす日日草　大阪市　津守柳伸

川のない橋は渇きを癒せない　海南市　三宅保州

ぬるま湯を出もせず一遍山頭火　八尾市　内海幸生

辞書をひくやっぱりふたりは夫婦　名古屋市　越村枯梢

百までは生きてられそう青い空　大阪府　坂口公子

シベリアの寒さ息子が聞き飽きる　広島県　田村新造

急ぐことないのに朝の五時に起き　和歌山県　児島与呂志

スイトピーときめいたのはもう昔　豊中市　辻川慶子

お訪ねいただいて嬉しいですという玄関　大阪市　正本水客

雲に来てひばりはやっと巣を想う　吹田市　栗谷春子

苦の道を抜けて明るい陽が覗く　鳥取県　津村八重子

ふるさともかわる校歌もまたかわり　岡山市　井上柳五郎

評判へ言うことがある山椒の実　松原市　小池しげお

ブランコが帰り一気に夕暮れる　鳥取県　松下たつみ

良心から何処へ逃げても逃げられぬ　堺市　中川滋雀

句のヒント拾いに寒い街に出る　倉吉市　野田素身郎

精いっぱい生きる証の草いきれ　和歌山市　福井桂香

オルゴール昔話がこぼれ落ち　弘前市　波多野五楽庵

毛皮ショー案内がくる蟬しぐれ　吹田市　茂見よ志子

昔から山を動かすのは女　大阪市　桝本蕗児

涅槃絵はむかしむかしのアニメかな　倉吉市　渡辺菩句

資格持つ妻のハンカチ洗ろてやり　奈良市　天正千梢

親切を誤解しているようですね
悪知恵が無いと政治家には向かず
お人好しの家系がつづく孫もまた
それなりの暮しの中で生んだ詩
明日へつづく道のぼり坂下り坂
夫婦茶碗欠けても替えぬ愚夫愚妻
老醜に胡坐をかいた爪の伸び
川柳をかじり日本語に魅せられる
聴診器　背中が痒いとは知らず
満月に送らせている酔うている
綺麗事スコップ一杯投げてみる
深爪へレモンがしみる外は雨
骨太なシナリオにする年初め
下心ないからバラの花を買う
苦労しに行く栄転と腹くくる
いつことされても椿は微笑仏になる
針の山越えた人なら任せよう
三姉妹揃って心温め合い
均等法　男遠くで吠えている

大阪市　**松尾柳右子**
倉吉市　**奥谷弘朗**
貝塚市　**行天千代**
和歌山県　**山川克子**
大阪市　**黒田真砂**
加古川市　**吐田公一**
唐津市　**浜本義美**
唐津市　**浜本ちよ**
岡山県　**荻野鮫虎狼**
廿日市市　**林野甦光**
岡山県　**岩道博友**
竹原市　**信本博子**
和歌山市　**桜井千秀**
黒石市　**相馬一花**
大阪市　**河井庸佑**
米子市　**八木千代**
西条市　**片上明水**
岸和田市　**清野こう**
奈良市　**米田恭昌**

そのうちに笑いが消えてゆく漫画　和歌山市　西山　幸

飛行雲かき立てるもの胸に抱く　岡山市　時末　一灯

よいことは日頃のつとめ死は確か　高知市　北川　竹萌

水落ちて来るから水車休めない　下関市　石川　侃流洞

美しい肌には虫が寄りたがり　大阪市　清水　利武

消えかけた残り火あおる彼岸花　寝屋川市　宮尾　あいき

ホコロビを縫って兵舎を思い出し　柳井市　弘津　柳慶

陽を吸った布団に安らかな寝息　守口市　野呂　右近

添え書で大きな歯車回り出す　奈良県　中原　比呂志

コーヒーを一気にのんでいる焦り　奈良市　宮口　笛生

強がりを言いつつ子には期待かけ　岸和田市　三輪　通彦

御座候の列に並んで御座候　高石市　浅野　房子

生きて来た傷を轍に埋め戻す　平田市　久家　代仕男

黙々と前を信じる蟻の列　河内長野市　井上　喜酔

山ひとつ越えると旅に別な風　寝屋川市　堀江　光子

飢え知ってからの食事は正座する　鳥取県　羽津川　公乃

そう言えば妻に頼まれて…おりました　京都市　都倉　求芽

笑ってる君も何時かは呆けて来る　大阪市　神保　拓生

カタツムリ空の広さをツノで撫で　今治市　矢野　佳雲

嘘のない男の顔は美しい　岸和田市　芳地狸村

ライバルを追い越す坂がまだ続く　吹田市　井上照子

昔　昔　子供育てたことが有る　米子市　石垣花子

見えた日を点滅させるのは軍歌　島根県　堀江正朗

ほろほろと心とけゆく春の酒　島根県　堀江芳子

女なら女の顔でいてほしい　香川県　松村迷観子

鳥が言い張るので赤い実をゆずる　米子市　田中亜弥

日本人が手抜きしている日本語　大阪市　町田達子

明日も又普通の朝が来るように　大阪市　本間満津子

初もうで地球を憂う絵馬がない　守口市　結城君子

未だ少し惚けに間のある好奇心　大阪市　北勝美

佳いことがあるよう好きな紬着る　大阪市　大塚節子

風はフルート春まだ遠き野を走る　八尾市　鷲見章

いたわりを今は妹から貰う　米子市　寺沢みどり

断腸の想いみかんを切り倒す　和歌山市　内芝登志代

ブランコへ二人乗りして夕焼小やけ　和歌山市　福本英子

師の翳を忘れはしない今日の地位　弘前市　村田善保

千一夜　春爛漫の花の下　和歌山市　山田高夫

道の証の年金を受けている　西宮市　林はつ絵

二人居て同じ芝居を繰りかえす　米子市　菅井とも子
七十五歳喜寿の章への句読点　鳥取県　林露杖
欲のない笑顔が妻にある平和　静岡市　安本晃授
菊ひらく話をこじらせないで　寝屋川市　柴田英壬子
陸橋でいっぺんしたいことがある　松原市　玉置重人
花を置くただそれだけで春の部屋　岸和田市　原さよ子
日の丸の映えて畝傍の松の風　大和高田市　岸本豊平次
縄文の蓮のいのちが今開く　五所川原市　加藤彩人
生きている人の命も花なのね　弘前市　真喜内實
ジャンケンポ最初出す手が本音です　藤井寺市　福元みのる
味噌汁を炊いて黙って許しとく　高槻市　辻白渓子
冗談のようにポックリ友が逝き　岸和田市　古野ひで
老い二人　夫が句になる余生です　岸和田市　島崎冨志子
輪廻とはかくの如きか観覧車　松原市　谷垣史好
友の書く便りに花が咲いている　米子市　沢田千春
子の希望聞けば新幹線の運転士　京都市　松川杜的
分け合うて重荷にならぬように生き　京都市　松川芳子
本棚に私を叱る本がある　大阪市　神夏磯典子
森の出口で何を握ったかが勝負　米子市　政岡日枝子

たくましい足でどこまで歩けるか
貧乏な家だがみんなよく笑う
少年は風を迎えに走りだす
天秤にかけスケジュールこなしてる
許す気になるまで自問自答する
汚すなと着せる前からやかましい
人間の悲しさ同じ血がもつれ
リハーサルなき人生の舞台裏
銀杏から黄金の雫したたるよ
無為無策　秒針の音胸をうつ
目はかかぬ紙人形に嫉妬して
無為の日は針の穴でも覗こうか
いじわるな鏡シワなど見せるなよ
まんさくの花　古里の神話呼ぶ
うそのない青空見ているえりぼくろ
人間に忘却があり救われる
探し下手せまい吾が家で苦労する
地獄極楽来た途を尋ねなば
大波を越えて小波に蹴躓き

米子市　**青戸田鶴**
今治市　**月原宵明**
和歌山市　**寺田裕美**
和歌山市　**坂部紀久子**
大阪市　**冨上光代**
大阪市　**小林トメ子**
宇部市　**平田実男**
七尾市　**松高秀峰**
島根県　**小砂白汀**
島根県　**石田清泉**
島根県　**松本はるみ**
島根県　**藤原鈴江**
島根県　**細木歳栄**
島根県　**北川民子**
島根県　**河原恵美子**
島根県　**小田川智重子**
加賀市　**細呂木魯木**
新宮市　**大矢十郎**
寝屋川市　**近藤一途**

地球異変ベルリンの壁破れたり　仙台市　川村映輝

やさしさごっこ元気なうちにしておこう　岡山県　千原理瑛

初恋の師の手をひいて京の町　伊丹市　山崎君子

道草をした人間で幅がある　尼崎市　春城武庫坊

わが恋は褪せずあかねの炎ゆる中　尼崎市　春城年代

今ここにある幸せと向い合う　岡山県　松本元江

なにごともなかったように桜散る　和歌山市　木本朱夏

木の実独楽一粒ずつの癖で舞い　八尾市　宮崎シマ子

胸にまだ師が生きている遺作展　静岡市　渥美弧秀

仲秋の月にならんと満ちて行く　茨木市　堀良江

黙々と登る信じた道だから　東大阪市　崎山美子

行き暮れて山の高さを知らされる　宝塚市　丸山よし津

土地売れて雑兵きのうの顔でなし　倉吉市　渡辺独歩

鳩時計の捻子はいつでも手の中に　米子市　野坂なみ

耳老いてまだセレナーデには酔える　町田市　竹内紫錆

花言葉あげて誤解されたらし　出雲市　吉岡きみえ

萩のみち学びわたしも行く道だ　米子市　金山夕子

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む　西宮市　奥田みつ子

さっさと歩かんと老化が追ってくる　大阪市　金井文秋

わずらって友の情けが胸をうつ　宝塚市　吉田笑女

梅匂う馬頭観音おわす庭　出雲市　小白金房子

浪々のくらしに日々が早過ぎる　豊中市　上田登志実

好きな絵を描けと自然が美しい　和歌山市　田中輝子

支え合う手の温もりも夫婦です　大阪市　江城修史

笛は太鼓を太鼓は笛を思うてる　堺市　河内天笑

大根も菜っ葉もすこし見なおされ　堺市　河内月子

S席に意外な人の顔を見る　堺市　荒川磯子

啓蟄に出て来た虫に椅子が無い　神戸市　仲どんたく

泥酔が星のしずくで醒めてくる　岸和田市　福浦勝晴

辞令手に親も教師になったよう　竹原市　森井菁居

七転びまでは神様手を貸さぬ　鳥取市　小林由多香

傷口を自分で舐めて風に向く　唐津市　久保正敏

湖を親しく抱いて逆さ富士　唐津市　田口虹汀

僕の舌二流で閻魔目もくれず　唐津市　仁部四郎

拝む時だけ人間をとりもどし　堺市　藤井一二三

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる　和歌山市　内田結実

逆ネジはじいわり肚に巻いて出る　寝屋川市　里小路

野の菊で飾る心の駅がある　桜井市　岩本雀踊子

無人駅ほんとに列車来るのかな　出雲市　小玉満江

王様を倒す力歩は見せぬ　八尾市　宮西弥生

一本のネジになります入社式　寝屋川市　北田綾子

さよならがきれいに言えた松並木　米子市　小村てい子

父に似たところを母に叱られる　高知市　川竹松風

笑うたび命だんだん伸びて行く　大阪市　寺井東雲

職退いて人間らしい夢を見る　高槻市　川島諷云児

名水がどこかで湧いている螢　竹原市　小島蘭幸

女今恋をしている周波数　豊中市　吉田あずき

自衛隊スコップ持っていて平和　大阪市　中西兼治郎

花博の花よ地球よいつまでも　茨木市　井上森生

子知らずの池なぐさめる友がくる　鳥取県　中原諷人

シャボンぶくぶく泣き顔みせてなるものか　鳥取県　中原みさ子

緑の中にひたってみどり選びけり　鳥取県　中原汲香

催眠術かかったままで生きている　島根県　松本文子

逝きしものみな美しき雪となる　鳥取県　さえきやえ

有難うと言う目で皆から愛される　京都市　山本規不風

鈴の紐握って神をややゆすり　吹田市　藤村〆女

見送りの女のテープ切れたまま　和歌山市　堀端三男

大根の白さに勝るものはない
来年もまた来るのよと燕の巣
寝室にホオズキほどの灯をともす
冬の月わたし詩人になれそうで
賞罰がなくて湯加減またよろし
川柳と俳画たのしい老後です
首までの深さで泳ぐことにする
それなりに言い分があり嫁姑
良い事がありそう淡い花選ぶ
白魚のちいさい黒の目が悲し
いさぎよく鍵を渡して野にくだる
目を開けて朝がくるのを待っている
こみあげるものあり真直ぐに歩く
冬仕度葉っぱのついた荷が届く
腹割った話が好きなコップ酒
主婦の座を守る布きんを白く干す
このように忘れなさいと花が散り
屈辱の中で初心の灯は消さず
人間がにんげんらしく生きられず

米子市 光井玲子
大阪市 坂本仙吉郎
鳥取県 土橋はるお
鳥取県 田村きみ子
和泉市 岡井やすお
箕面市 坪田紅葉
兵庫県 遠山可住
倉吉市 野中御前
米子市 茂理高代
大阪市 松永すすむ
岡山県 山本玉恵
鳥取県 土橋螢
和歌山市 後藤正子
有田市 松井かなめ
姫路市 植村客遊子
西宮市 門谷たず子
大阪市 渡部さと美
大阪市 西田柳宏子
八尾市 高杉鬼遊

完璧をのぞむと狂う夫婦独楽　羽曳野市　田中透太

逢うて来た影絵を妻が踏んでいる　出雲市　金村青湖

八十は八十の夢天高し　藤井寺市　笠原吸江

雨宿り肩ふれ合ったまま他人　富田林市　片岡智恵子

春夏秋冬　心に留めてほほえもう　岡山県　川端柳子

母の日にうでたてふせを五回ほど　松原市　佐藤奏月

画用紙にチューリップ咲く新学期　十和田市　斉藤劦

萩の道問わず語りを敷きつめる　岡山県　矢内寿恵子

写真は正直で憂いをそのままに　松原市　北野久子

よろこんでまだ踏台になれるなら　大阪市　鈴木節子

押し入れの隅のすみまで五月晴れ　大阪市　小出智子

生かされて生きて笑顔でお正月　松山市　谷真風

桔梗とや内気な乙女陰に咲き　竹原市　岡本清水

腹巻に財布確かな父の旅　大阪市　桑原喜風

風を手繰れば父の椅子が届く　米子市　林荒介

いい知恵が浮かんだらしい指が鳴る　倉敷市　井上富子

年寄りの天狗の鼻は折るでない　倉敷市　稲田豊作

中東が真ん中にある世界地図　豊中市　田中正坊

近寄れば近よって来る島の牛　尼崎市　黒川紫香

倖せは百歳の翁看るわれ八十　姫路市　人見翠記

仙人の気持がわかるふくらはぎ　羽曳野市　塩満敏

殺し文句妻には言わぬことにする　羽曳野市　榎本吐来

ひらかなのような男が多すぎる　藤井寺市　吉岡美房

飛んでまた蜂も酔ってる春の宵　河内長野市　植村喜代

愛されているとは知らぬ冬の華　堺市　板尾岳人

面変りしても私の町はここ　豊中市　安藤寿美子

別れの日良い事ばかり湧いてくる　大阪市　山田妙子

卒業のない包丁をとぎつづけ　大阪市　藤田頂留子

花の下過去も未来も白になる　西宮市　西口いわゑ

悪妻かゴールを少しずつのばす　寝屋川市　江口度

芽が吹いているので助かる樹のさだめ　堺市　楊井二南

羅漢群像気紛れ詩人の顔である　泉佐野市　阿萬萬的

一生を潔白で通す父の背な　大阪市　北山悟郎

ときどきは主役を食って生きてます　岸和田市　高須賀金太

坊ちゃんを百度読んで漱石忌　京都市　渡辺圭坊

虫すかぬ男に一つある魅力　豊中市　一瀬福一

名人と呼ばれ手酌の席である　岸和田市　岩佐ダン吉

神様の遊びごころの雪月花　豊中市　橘高薫風

五湖抄

黒川紫香選

摂津市　木下道子

素うどんの葱が大きな顔をする
シャンソンの音符のように枯葉舞う
ボディラインがどうのと新車の話です
天からの声に待ったを掛けておく
招待を受けると靴が浮かれ出す

鳥取県　石谷美恵子

熱冷まし効いておんなが巣へ戻る
ほおずきの赤童心へかえらせる
堪え忍ぶおんな心が風化する
望郷へまつり太鼓が夢で鳴る
邪魔しても水の行方は変らない

尼崎市　的場十四郎

あれこれと注文満たし娘は嫁ぐ
電話口身ぶり手ぶりに嘘がない
電話口声の若さに言い直し
ひかえめな男で高い山が好き

愚痴一つ言わずに磨く朝の靴

名古屋市　藤井高子

佳い夢が続いて獏はうろたえる
仮の世の仮の情けにほだされる
消しゴムを許してしまうから解けぬ
返事には少し胡椒もふっておく
ああしんど絵馬吊された日のまんま

広島市　流奈美子

渓谷まだ神の摂理の中で映え
街灯のない町に来て息吹きぬ
筆太に父の主張がこめてある
真ん中に座ると背筋伸びてくる
留守番電話は素顔の声を溜めている

熊本市　宇野昭代

白壁が旅情をそそる城下町
同情が嫌いで過去を語らない
置き去りの犬が主人を待ち焦れ

橋掛ける噂を乗せて渡し舟
冷戦の無口がつづく寒い朝　尼崎市　児玉歌子

打ち水を器用に撒いて孤立する
照れ臭い注文耳が痒くなる
根の深い所で鬼と妥協する
プライドを投げ捨てている庭の下駄
素直には登れぬ峠だってある　佐賀県　寺中三枝子

衣食住　住が遠のく土地価格
雪模様亡母の手欲しいことばかり
山があるから登る気軽は許すまい
転勤族子も落ち着かぬ春はそこ
この蕾咲く頃嫁がくる予定　八尾市　高杉千歩

平成三年満一歳と祝う膳
人間が好きで丸い風と住む
老いをふと思う日のあり身繕い
お野菜の好き嫌いまで気を配り
目刺しが美味しいひとり暮しが十日たち　堺市　楊井二南

耳打ちをすると耳打ちする返事
見られても当り障りの無い日記

鹿野を訪ねて（三句）

りんご狩り氷雨の中で艶を選り
荒れ狂う浪は流石に日本海
銀杏の香う墓標のたたずまい　佐賀市　古川一徳

古稀越して野心は持たぬ日向ぼこ
Vサイン苦労を知らぬ子の育ち
人間不信猫さえ死場所決めている
火を消した積りが底にあるしこり
二幕目は楽しく生きる夫婦絵図　熊本県　大川幸子

故郷は地元日帰りしてしまう
役割が変り嫁の味になる
うっかりな言葉矢面に立たされる
時効になる頃恋しくなってくる
昔取った杵柄姑のカルタ取り　今治市　野村京子

かごめの輪抜けて酸性雨にぬれる
漁火の中のひとつに父がいる
髪を梳く手に罪多く罪深く
永雨降る枕ひとつが淋しすぎ
ホホホホホダイヤの指と二重あご　静岡市　沢田きん

いつからかポケットにある飴一つ
団らんの膳を囲んだ冬の部屋
欲張った仕事へ匂うサロンパス
早すぎて時間をかせぐ回り道

心して仏に尽くす花の水　藤井寺市　高田　美代子

金欲しや欲しやとジャンボ宝くじ
神様も楽しみにするお賽銭
腕くらべしようじゃないか向い風
箱膳のはげた塗りにも商家の絵
たそがれてビルは冷たい貌をする　静岡市　大村　正雄

赤い橋渡れば浄土あるごとく
指切りで約束したね君と僕
弁舌はうまいが筋が通らない
一言の舌禍世界をかきまわす
どの橋も涙の秘話を隠してる　大阪市　上田　柳影

息のあるうちはお金に手きびしい
強烈に燃えて淋しい鬼あざみ
惰性かな住めば都のうさぎ小屋
自分史に白い頁が多すぎる
顔が効くからと村営林のきのこ狩り　千葉県　上鈴木　春枝

母と娘で秘密を交わす台所
言い訳へかり出されてる愛想者
ひと言を足して逆転企てる
遠回りしました充電してました
置炬燵みかんばかりをすすめられ　尼崎市　森　安夢之助

所詮は銭の魅力に勝てません
編棒がまめに働く秋の暮れ
一言の許すが言えず煙草吸う
どう見ても判こを押した方が負け
此処だけの話へマイク寄って来る　尼崎市　尾宮　弘治

用心の雨戸を月が閉めさせぬ
亡母に似た羅漢に逢うて旅終る
恨むこともう超えました白い杖
待て待たぬ声が大きい父子の碁
松茸の話キャディも一休み　尼崎市　住谷　石舟

ゴミ出しをたのまれ朝の靴すべり
守衛暇ひねもす雨とにらめっこ
外車乗りつけお好み焼を二枚買い
孫の守り夫婦相和し疲れ果て
昔から妻には頭あがらない　久留米市　鶴久　百万両

キューピッドに逢うまで父の樹を降りぬ
離婚十年子に真相を語る日も
恋をした数だけ赤いバラを買おう
外濠をやんわり魔女が埋めにくる
不倫発覚とぼける顔がピエロめく　旭川市　朝倉　大柏

自分から逃れたい日の酒の量
雑音も聞こえ補聴器面白い

一番に来てしんがりで出る粘り
雑草も咲いた花から見直され
淡色の街で詩人になりました

尼崎市　野瀬昌子

頼るのはお前だけだと調子よい
無為無策素手で出掛ける仲裁人
あれ以後は風の便りを待つばかり
みな我が子ハカリになんぞかけられぬ

鳥取市　大坪天涯

太陽がひとりでふさぎ込んでいる
薔薇開花もうすぐ父は泣くだろう
負け犬の位置はひくしかないだろう
薔薇一本買って悪役ひきうける

島根県　佐々木芳正

気がつくと叱らぬ父になっていた
子に聞かす父の童話を一つ持つ
手話でしか言えぬさよならだってある
保母さんがくぐると切れる通りゃんせ

酒田市　永澤裕子

木守柿鳥も子どもも来ずに雪
年賀状ひそかな愛がまだ続き
置き炬燵いつも言訳書く手紙
本当を話すと決めたコンパクト

鳥取市　西村黙光

夜討ちかけ一升ビンを空にする
熟燗へあたり散らしてうつ払う
商魂をむき出しにする消費税
嘘ついて己の心テストする

米子市　足立由美子

納得のいくまで話続けよう
旅先で夫に絵ハガキ書いている
辻褄を合わせる靴も時に履く
たっぷりの湯舟で今日を洗いすて

鳥取県　大角正道

ごきげんな時は口笛吹いている
新しい朝に過去などもういらぬ
百枚の札がおもちゃのように見え
時計外してふたりっきりの旅さ中

尼崎市　山田保蔵

パチンコ屋を憤然と出るヒマな人
器用貧乏隣の嫁に使われる
渋うちわ炭火で焼いてる初秋刀魚
雨やどり犬に吠えられとんでる

鳥取県　今本早苗

再会の胸に踊ってくるハート
おかあさん一言呼んでみて眠る
雪積る里から会話あたたまり
木枯しの寒さキムチを漬けておき

枚方市　中山おさむ

親馬鹿に成りきっているVサイン
真剣な恋は本屋で待ち合わせ
模範的亭主がゴミを提げて出る

噴水をバックにホームドラマの譜　吹田市　山本希久子

海外へ移植手術の旅もある
指先に目ありたしかな母の針
似た人を隠す人ごみ暮れの街
落葉はらはら旅の終りに音もなく　鳥取県　鈴木公弘

何時かいつかの夢で外様を生きている
耳底のでんでん太鼓鳴り止まず
夫婦は所詮儀式の飾りかもしれぬ
賀状書く指から春がやってくる　東予市　小山悠泉

方向音痴今来た道へ舞い戻り
不況脱出造船クレーン動き出し
買うて来た松茸妻に叱られる
五分五分の勝負を運に裁かれる　大阪市　亀井円女

いい夢は三日黙って我慢する
正直な鏡で融通してくれぬ
出来過ぎた嫁でないから馬が合う
切札は出さず仕舞いで死ねそうだ　岐阜市　渡辺杏村

小学校以来の賀状胸つまる
お年玉の五十銭玉なつかしい
愛犬家ポチの小屋にも注連飾り
お嬢様をめぐりしのぎを削る初春　和歌山市　森茜

合掌の姿で伸びていく木立
おとなりに座ってからの言い易さ
よいことがあるらし笑顔すれ違う
ふり返り思いなおして雨の町　広島市　森田文

いい夢を見せてもらった里の膳
回り道迷い道して子を育て
ふと過去をたぐり寄せる沈丁花
散歩道犬の家来にされて行く　和歌山市　堀畑靖子

同病の話に心はれてくる
偶然の符合かあなたとの出会い
先ずはまあ朝食取ってから始動
点検に出そう疲労の取れぬ肩　東大阪市　松山隆

丸木橋落ちて梯子が登れない
母ァさんが間違い電話にしてしまう
どうにもならぬことに爪かんでいる
異性みなピンボケにする古カメラ　静岡市　永倉柳華

振り袖が似合う成人式の顔
冬枯れのベンチ恋とは温いもの
短日を日向ぼこして日が暮れる
カラオケが好き五線譜にない音譜

墓参りすれば護ってくれそうで　熊本県　岩切康子

大根の高値に急ぎ種をまく
車間距離気にして夫に届かない
偽善者の邪心が互いににらみ合い　姫路市　松本一郎

狭量を海の広さが窘める
なつかしく脛かじられた子等のこと
迷路から抜けきれないで古い地図
愚痴を聞いてくれる友あり長電話　堺市　山本半銭

羊の絵百枚描いて初春にする
やきいもを半分わけるふきだまり
片方のちぶさ子離れしたがらず
頬紅の刷毛が優しくしてくれる　西宮市　菊池トミエ

ふる里で思い出を掘る芋を掘る
御堂筋秋の絵にして銀杏散る
枯葉舞い残り少ない日記帳
吊し柿乾かぬ前に食べ終る　岡山県　森下正子

ある時は勝手つんぼで恙無く
ビルの谷歩いて里の温さ知る
登りつめどうもどろうか蝸牛
不足など言えないみんな陽を受ける

坂登る方便必死で考える
棚ぼたの夢ばかり追う鬼が住む
歌碑からの声なき声が胸にしむ
平安の絵巻のような即位礼　和歌山市　谷口信子

可愛さがどこかあるから許される
ブレーキを効かせるうちに愉しもう
散紅葉階段の影暖かき
正倉院展めぐる溜息秋ふたり　貝塚市　池田寿美子

あの声が忘れられない遠い過去
女一人静かに飲んでる梅焼酎
過去はみなアルバムだけが知っている
雑草の花を眺めて散歩する　尼崎市　木下義嗣

坊さんの演歌の声に聞きほれる
バーゲンの妻を本屋で待っている
もう子等は戻らぬだろう過疎の家
大臣の本音外遊先で落ち　出雲市　伊藤寿美

おふくろの手打ちをうどん屋で語り
ケチでない証にはずむお賽銭
ストレスは捨てなとウィンクしてる星
赤ん坊抱いて市場のお父さん　熊本県　高野宵草

鳥取県　西浦小鹿

わたしより早くあなたになつく猫
自分史を涙のなかでよみ返す
自らを励ましている向い風
窓ぎわに鳩が止まっている平和

堺市　神原文

誕生日覚えてくれる人といる
嵯峨菊が咲いて急いで水をやる
初孫の結婚までは生きたいね
麻雀の向いの窓は受験の子

尼崎市　明壁敏之

古井戸へ小石落して深さ見る
峠茶屋昔のままの椅子がある
民宿で昔むかしの話聞く
トンボ取る子供も居ない過疎の村

和歌山県　森三枝子

旅先の夕日に我が家思い出す
寝てからもいびきで勝負する夫婦
百歳も不可能でない食文化
お守りに有効期間が書いてない

兵庫県　酒井靖子

ありがとう素直に言える齢となる
楽しさがはち切れそうな旅鞄
がんばれと亡父のラッパが鳴り止まぬ
気が付けば火の粉の中にいた私

岡山県　土居ひでの

楢山の愚痴を喋りに来たすずめ
ふり返り振り返りテープ切る一年生
親ばかの毬が弾んで七五三
隣からインターホンの声弾む

十和田市　阿部喜久江

孫の顔見ればファイト湧いてくる
隙間から我が家の暮らしのぞかれる
空ビンが二度の出番を待ちこがれ
暇ばかりたっぷりあって金はない

熊本市　遠山夏生

石に刻んでも川柳は温かい
余剰米と知ってか稲穂首垂れる
逢える日の午後の時計は進まない
子の家を転々北海道まで行ける

香川県　木村明人

風の吹いて大和の柿揺れる
ママの留守家に灯りが消えた様
肩の荷がおりるとドッと老けてくる
娘が嫁ぎ着物のローン置いて行き

尼崎市　中澤向西

感情に走る女のもつれ糸
途中から話題を変える過疎の駅
鏡にも言いたい事を言ってやる
嘘のようなほんとの話地価は億

八尾市　籾山　隆

チャップリンの靴を善人だと思う
眉つばと判っていても乗る話
引っ越しの度に想い出塵にする
眼鏡拭く父は確かに泣いている

河内長野市　大西文次

胃カメラで切腹の刑まぬがれる
税務署へ流行おくれ着て出かけ
夜逃げする用意はちゃんと出来ている
糸口を作る煙草の火を借りる

寝屋川市　井上すみれ

秋祭酢漬をまぜる午前二時
地価高騰頭にきてる葱畑
廃校のポプラに三日月ひっかかり
シルバーシート新人類の長い足

尼崎市　鈴木良征

消費税お前は猫ばばされている
妥協してエリートコースに乗りました
国栄えて平和の理念がまた消える
父の背をいつか越すのが僕の夢

尼崎市　吉永伊三郎

シーソーの端で上下の円とドル
ぜんまいの柱時計に冬がくる
マンションのどこにいるのか孫の声
マンションの窓の数だけ秋の月

高槻市　芦田静江

正座して誓った手前戻れない
敗けいくさ女一人を強くする
煮え切らぬ話雷鳴ききながら
旅の窓私を変える一ページ

京都市　小林英子

俯瞰写真墓石のようにビルが建つ
羅漢さまあっけらかんと冬の中
冬の蝶恋の迷路を出ぬままに
お茶の間を厳粛にする即位の礼

京都市　本荘福子

学習塾行かぬ我が子の黒い肌
不良だが虫歯一本無いらしい
点滴がポツンポツンと語りかけ
飽食を支えきれないハイヒール

吹田市　西岡豊

手続きが厄介すぎる法務局
熱燗にほぐれた広間無礼講
凍結をして反省を促せる
釣書を山ほど書いて安く売る

岡山県　後安ふさえ

感激の涙で見いる即位の礼
封をして心にかかる書きのこし
赤信号逢いたい人を見失い
喜びと友情惜しむ退院日

枚方市　山崎彩子

目かくしをしてもふる里の山描ける
巻いた菰虫には終の棲処なり
倖せと声に出してから眠る

尼崎市　佐野六浦

ライバルがあって希望が湧いてくる
庭雀一羽割り込み餌を拾う
ぐい呑みへ注がれ九谷の朱がゆらぐ

鳥取市　加藤二代

憎まれてもうんと長生きしてやるぞ
むし暑い夜は亭主がじゃまになり
あなた信じて白い下着のままいます

砂川市　大橋政良

腰低くしなさい虹が見えるから
強情の伝わってくる髪を梳く
遺書らしきものを脳裏に書いている

鳥取県　西川和子

ふる里の辻追憶の中にある
孫が来て二人の劇に和が戻る
あわてればお国訛りになっている

鳥取県　中村幸代

歩幅のあったひとが隣にいてくれる
陽のあたる道ゆっくりと歩き出す
あすも逢えるからさよならが言えました

和歌山市　田中みね

出直しの明日へ群れる赤とんぼ
「ごめんなさい」とても苦手なその勝気
取り澄ました仮面が剝げる酒の席

鳥取県　上田俊路

コンピューターが選んだ嫁で隙がない
雑兵はポケットベルで泳がされ
僕だけでなかった友の悩み聞く

鳥取市　美田旋風

金メダル取った日の丸目にしみる
横道にそれた話が飽きさせぬ
本心を見抜く眼鏡に度を合わす

鳥取県　石尾かつ乃

なわ電車終着駅に祖母が居る
人間を基礎から磨く本を買う
十字路で別れた記憶お下げ髪

兵庫県　森脇和子

広告の裏が役立つ走り書き
返し針昨日の痛みは秘めておく
手の届くところにお茶と辞書とペン

寝屋川市　宮崎菜月

過不足を言うて女に艶もなし
あの人の肩のかたちに名残月
動かせぬ予定のひとつに死があるよ

八尾市　向井しづ子

虫の音にしばし迷った神社裏
ランドセルガタガタ朝の歩よたしか
ガレージのかび取り磯の香のような

年末年始　乾杯ばかりしています　八尾市　片上英一

そのうちに別れてくれと言われそう
太極拳はいいナと思うなまけもの　羽曳野市　芦田絢子

バツが悪いから笑い話にしておこう
句読点打って私を取り戻す
嘘ひとつ隠す鏡が美しい　岡山県　福原辰江

また一歩悔いあらためて登る坂
傷心の僕にやさしい里の雲
しっかりと野心抱いている無口　川西市　田中喜俊

もうちょっとお話したい秋の月
疲れると仲たがいする老夫婦
手紙書くひまはありますけど電話　静岡市　宇佐美寿美

朝シャンの髪そよがせて弾む駅
物干しの白さが臥せる眼にまぶし
紀子さまの手のハンカチが優しくて　島根県　松本聖子

日曜日プラン異なる夫婦です
スーパーへ安売り広告ふところに
忘れ物赤信号で思い出し　大阪狭山市　桜井荘次

厄介な事に突っ込みたがる首
聞き耳を立てると揺れるイヤリング
こだわっているのは三面鏡の皺　熊本市　北川一進

平和論出せば選挙にかつがれる
裏金に何か邪心のありそうな
欲しいもの並ぶ定価の五割引　静岡市　小木久子

目が糸になって小母さん笑ってる
手作りの朝市老婆のおおらかさ
口コミでグルメ集まる美味い店　鳥取県　太田幸枝

姑さんはヤミ米に手を染めず来た
旅に出て浮気心を抱いて寝る
露天風呂に旅の話が浮かびおり　富田林市　浦田トシエ

羽織干す女心に秋の風
白き蝶二匹たわむる秋日和
菊の花　主役で姑の三回忌　泉佐野市　真崎浪速子

寡婦の意地見せてはならぬ甘い顔
山の湯が私を忘れさせる旅
医者通い他人の尾鰭つく噂　大阪市　森崎忠禄

相合傘愛染堂は雨上り
駆け落ちのように手を引く口縄坂
どやどやの焚き火待ってる鏡もち

掌中の玉も時々謀叛する　出雲市　森山健歩

悔い少しひきずったまま生きている
揉み手した後の虚しさ抱いている　宇部市　野口豊子

嬉しさを鞄に詰めてフルムーン
子も巣立ちおしゃれの火種掘りおこす
目標へ苦労が続くがまん坂　茨木市　藤井正雄

表書き達筆が来るバーのママ
寺のあるコースにしたい母と旅
マンションは私一人と嘘を言う　豊中市　三宅つえ子

胸に住む母の笑顔で目がさめる
火加減を愉しんでいる豆の顔
開かない窓をまじめに拭いている　羽曳野市　麻野幽玄

何の得にも成らぬのに揉めている
一人する食事は過食には成らず
いろいろな夢から醒めて熱も引き　吹田市　廣屋利通

十円貨焦る電話にまた落ちる
悔しいが上げた拳が震えてる
取敢えず白紙に戻す派兵論　枚方市　森本節子

今になり時間足りぬと受験の子
住宅の迫る稲田も穂をたれる
お勝手で大根切りつつ句が浮かぶ　大阪市　家村高雄

禁酒してつけ効く店から年賀状
ブランドの化粧品です自己満足
ファンではないけどセイブへ買物に　寝屋川市　河合時弘

体内時計妻との時差が埋められず
また風呂を沸かせすぎてる長電話
可愛い娘に着せてやりたい黄八丈　大阪市　藤森小雅子

ブーメラン投げた男の円い風
窓際へ内示の肩を叩かれる
天平の土に埴輪の挽歌きく　羽曳野市　山本たけし

御堂筋愛惜しみなく銀杏散る
万歩計川の向うに喫茶店
すれ違う女が匂う秋の朝　鳥取県　山内芳江

石橋をたたいてチャンスみな逃す
やさしさが取り得で少し物足りぬ
冗談に本音を少しちらつかせ　鳥取県　伊吹富恵

余命とやケセラセラでは済まされぬ
多年草はいいな来年又ひらく
雑草に憧れている昼の月

月が出てふと亡母のこと想い出す　姫路市　谷　清柳
肉を切らせて骨を切ったと言い張ろう
終点にたどり着いたら鬼が居た　鳥取県　乾　隆風
古傷が疼きほとけの杖借りる
足腰が痛くても晩酌している
宇宙から地球の劇を見てきます　島根県　加本義良
ワンカップ紅葉呑み乾す汽車の窓
マイカーを買替えたいと五年経つ
再会へ中尉殿の声も老い　新潟県　高野不二
妻よりも娘の言う叱言の方が効き
割り箸も入れて海外旅行の荷
儲け話聞けばやっぱり金が要る　鳥取県　黒田くに子
妻の機嫌取りへあんみつ買ってくる
因習の壁破る嫁かも知れぬ
壁の痕ごまかすモナリザの微笑　八尾市　吉村一風
いい便り光も風もあたたかい
一すじの涙本音が解らない
絵日記は何時も母しか載ってない　島根県　児玉幸子
秋の山リンドウ一本摘んで来る
寺の鐘つるべ落としに日が暮れる
丹精を込めて作った菊香る　鳴門市　八木芳水
しきたりをとことん守り笑われる
突然の運に力を貸した汗
趣味に暮れ老いの一日短過ぎ　大阪市　今西静子
鍵かけて不安の夜をひとり寝る
出不精を誘ってくれたいい便り
コーヒ半分ひとりぼっちの本をとじ　竹原市　古田比呂子
ポケットに幸せのかけらつめこんで
目をつむるとこはしっかり目をつむる
すき間風夫婦の愛を問うように　青森県　福士トキ
振り出しにもどるサイコロ欲しくなる
出稼ぎがか弱いわたしを強くする
また一つ薬が多くなりました　三木市　岡本蛮拙
使い捨て一転省エネややこしい
脳細胞貯金とともに減りつづけ
バリ島で圭三さんに出会うとは　姫路市　福本好花
貧乏性いくつになっても走り書き
山茶花のつぼみと話す冬の庭
縄のれんそうかそうかと聞いてくれ

熊本県　増田一乗

週一度老人ホームから里帰り
転居した友懐旧の長手紙
出張した孫の土産の宅急便

岡山県　伏見すみれ

報酬は言うまい好きな道だから
無報酬黙々草をとりつづけ
金棒の錆を磨いて鬼も暇

大阪市　川原章久

柿の色冴えて野面に赤トンボ
地蔵尊どうぞとばかり茄子の馬
背を流す思いで洗う父の墓

河内長野市　岡崎実

プライドを捨てたくましく生きている
行く雲に捨てた人生託してる
お隣が捨てたレンジを拾う人

唐津市　山口ふさ子

カムフラージュ玄関に置く男靴
おとなりと久々に逢う通夜の席
花子さんと言う可愛いお婆ちゃん

鳥取県　中藤俊子

靴下の親指のぞくはずかしさ
雑煮餅　具の山盛りを持てあまし
自動車の通る度鳴る古障子

十和田市　小笠原敏夫

九割引き先着順のうらおもて
秋の宵祭り囃子に血が騒ぎ
手のマメに吸い込まれゆく太鼓の音

鳥取市　森山豊子

あの顔は大きな野心抱いている
窓開けて朝の鏡がはずんでる
辻褄を合わせ心にしみがつき

宇部市　中村三良

一病息災素直に生きる他はない
一寸許り本音を見せるイヤリング
座り直した妻にたまげて猫は逃げ

静岡市　三浦つね

消ゴムで嫌な言葉は消しておく
老いの部屋尋ねる孫の温い声
世話をする世話になる人うまが合い

豊中市　滝北博史

優勝のカップにふれてまた涙
株なんか持っていません母のウソ
ぜんざいの割り箸割ってくれた母

今治市　渡辺南奉

妻へ好きいつ言おうかなバラが咲く
壁に耳だから上手にほめておく
組み直すプラン平均寿命のぶ

岡山県　江口有一朗

箸箱の表に曰く自愛せよ
擦れ違う人の鼓動を感じる日
眠れぬ夜しばし詩人の時を持つ

正月は妻も大目に見るお酒　藤井寺市　中島志洋

目くばせで他人行儀になる二人

道一筋頑固に生きた白い髪　静岡市　青柳金吾

仏教の番組を見る老いの坂

御詠歌のリズムに合わせバスがゆれ

満たされて秩父の旅を無事終る　鳥取県　橋谷静江

歯科の椅子器具の音にも緊張し

私のすべて知ってる古人形

冬木立きびしい顔で立っている　広島市　名和喜一郎

スランプを自覚してないので不振

つり橋を揺する勇気はもう持たぬ

スペアキー束ねたままでまだ一人　八戸市　島田昭治

お迎えをひたすら仏に願う母

物欲のたくましいのが金儲け

よく笑う一歳の孫の丸い顔　兵庫県　奥野テル

ライバルが大きく見えた日のゆとり

娘の来る日心の鈴が鳴り止まず

羽根ふとん貧乏性でねつかれず　芦屋市　根来敬

ひたすらな仕事の虫の背が丸い

てきぱきと丸くおさめて年の功

今日も来る手漉きの里にみせられて　香川県　工藤吟笑

女助手来てから鏡に用が出来

輪を組んで気合いを入れた逆転打

目の回る位動いて共白髪　大阪市　清水絹子

定退の夫にとどいた社の招き

祝い箸親の名もかく新所帯

元旦にハワイで泳ぐゆめの夢　鳥取市　萩原美雪

ブレーキを踏ませてくれぬ憎い人

人恋しくて誰彼となく電話する

鬼と組んであっさり同志売りとばす　岡山県　牧野秀香

孫の顔瞼に柿の皮をむく

愛情の嘘は方便許される

湾岸の緊張解ける日を祈る　大阪市　尾崎黄紅

順がくるまでに切れそう縄梯子

郷愁は隣が里の物くれる

アメリカを見たい案山子の独り言　静岡市　浅子まつゑ

歩き初めじゃま物みんなどけてやり

手料理で心尽しの美味いこと

電気料下がれば灯油すぐ上がり

冬空へ音も聞こえず飛行雲　米子市　小西五十鈴

足音で誰の帰宅かわかる妻
茶をすすり長寿の秘訣など語る　唐津市　野崎ハル

久々の客を待つ時別の客
我が町は海と川との中に浮く
石蕗の黄はお城の石の間より　相生市　中塚礎石

納得がいかぬ杯もてあそぶ
賽銭の一円玉を思案する
母のぼけ歌を真面目に歌いだす　岡山県　平田たけよ

ストレスを流してくると忘年会
又財布置き忘れる十二月
北風に帽子あげよう石仏　米子市　中井ゆき

鳶が舞う平和な空がありがたい
年金で松の手入れを思案する
不細工な生きざまだったかも知れぬ　南国市　窪田和広

落し蓋コトコトと母の味
逃げ道がぎょうさんあって痩せてくる
誘惑にのってみようか冬のバラ　広島県　森川抜智

布団の中とトイレの中で句を作る
真っ白い顔して真っ赤な嘘をつき
明治生れがまだ残ってる戦友会　富田林市　山原昭水

目標は日本縦断味の旅
叩いては叩いて名刀できあがり
一人娘が五つ子生んで話題です　島根県　今川三津江

朝茶ですそのひと言に座り込み
ショッピング助手席の犬待ちぼうけ
木枯しが吹いて木守柿の恐怖　岡山県　清水悠貴女

どの夢も中途半端のまま暮れる
ここまでの茨を悔いと思うまい
じゃんけんに負けると空が暗くなる　唐津市　入江喜久亭

住職が自ら打ちし除夜の鐘
躓いた石が俺らを睨みつけ
娘の便り哀しい文字が眼にとまり　宝塚市　末次真

ふる里は思い出の中城と堀
花火師が火の筆振るう夜の空に
自家菜園地価の割には出来悪し　大阪市　武田昌三

手術医の成功ですへ背を拝む
紀子さまのスマイルカメラへ疲れ気味
味オンチ妻の苦心を鵜呑みする

奈良市　井上　大

フセインへもぐさの量がまだ足りぬ
野茂で明け野茂で暮るるプロ野球
ノーベルの火薬をつけたゴルバチョフ

唐津市　山下剛司

子育ても終って淋しPTA
たきたてのおいしさ味わう白御飯
披露宴花をもらってただ涙

静岡市　中西雅

母逝く（二句）

黄泉の母まよわず亡父に会えるかな
百三歳自ら覚悟の手を合わす
新品のよだれかけして地蔵笑み

鳥取県　野口重富

目玉焼だけは出来るぞ母の日に
カメラから覗けば並ぶすまし顔

岡山県　福原悦子

末席の椅子が嵐を呼ぶ意見
手紙には里の訛りはみあたらず

島根県　岩田三和

歩こうか月が丸あるい夜だから
賞品は村の特産米俵

松江市　佐野木みえ

チューリップの球根今年も植えました
京都への旅いそいそと鞄につめ

奈良市　米田芳子

観光のセットのように倉屋敷
公民館干支彫るノミのにぎやかさ

唐津市　野田旭恒

子育てに理屈は要らぬ愛注ぐ
豪邸を目印にした案内図

兵庫県　西井つや子

どんぐりが落ちて見上げた秋の天
鬼ごっこやっぱり好きな人を追う

出雲市　原章峰

さらさらと主治医のペンに嘘がない
去年より漬物石が重くなり

橿原市　西本保夫

平成へまだまだ昭和の指を折る
妻の手の駒は一段ずつ進む

兵庫県　倉垣恵美

いつもより生き生きとして旅に出る
鳴いて鳴いて鳴きやんでしもた虫

松江市　原長三

八十七歳まだ自転車で駆けている
よく叱る女房でした七周忌

和歌山市　北山好笑

宝石箱を開けると亡妻喋りだす
手を振ってバスすれちがう運転手

東大阪市　大平太一郎

おめでとう笑顔で交わす年忘れ
ハチ公も首を傾げる深夜族

詫び事をやっと申して腑が抜ける　鳥取県　山本正光
使うこと知らずに今日も金貯める　鳥取市　武田帆雀
独り者焼き飯うまく裏返す
肩書を武器にするから争わぬ　堺市　井上たかし
条件の歳だけ合わぬ求人欄
向い風かわす背中に聞く挽歌　静岡市　柳沢たま
左遷地へ妻が気遣う料理本
食うだけはあるさ婆やのひとり言　池田市　林すて
人が減り子供も減って静か過ぎ
誰か来て欲しい気持の淋しい日　今治市　渡邊伊津志
かいつぶりかぶった水が凹むなり
存在を感じさせない老いの艶　岡山県　後安江山
鯖寿司は矢張り祭のものですね
うるさいと思う事あり娘の愛を　藤井寺市　武部敦子
意志よわい自分を写す三面鏡
嫁姑鏡ながめて笑顔する　静岡市　片平静代
傘寿まで生きたら万才しておこう

茜雲明日を信じて米をとぐ　今治市　和田宏
最終で握る切り札取って置く
もつれ糸とけると星がきれいだな　東京都　山口新子
給料を払い終えるとよく眠る
母逝きし秋桜の頃だったとは　神戸市　岩田信義
喜怒哀楽詰めた枕が固過ぎる
消し壺の余熱に触れて火傷する　青森県　波ただお
一番に息子の嫁を祈願する
音痴だが唄える一つ軍歌あり　羽曳野市　徳山みつこ
週刊誌買って車窓の人となる
清濁を呑んで大河は悠々と　島根県　菅田かつ子
青い空わたしと孫とぶらんこと
唯一の味方と背中を流し合い　寝屋川市　北岡波留吉
煮え切らぬ男が刀砥いでいる
昔の女と相宿をした一人旅　岡山県　富坂志重
小さなロマンス出て来た古書の山
秋風に答えるように重ねて着

唐津市　浜本治幸
ＯＢ会昔のまんま元上司
秋祭り人に揉まれて只疲れ

大阪市　岡田一枝
ほうじ茶と田舎饅頭のよい話
ほどほどの長生き頼む寺参り

鳥取県　西原艶子
歯ごたえのある一言に逆らえず
もう一度歯磨きをして逢いにいく

鳥取市　岩原喬水
衣食住足りて石油が気にかかり
二日酔虎が羊になって寝る

鳥取市　前田一枝
枕木も朽ちて小さな花が咲き
テストした後に出て来る良い答え

岡山市　中嶋千恵子
目線下げ幸せ願う母子草
一呼吸おいて話の棘を抜く

摂津市　もちづき遊美
不自由な老い家族がせめてピンク着せ
堤防で少年と犬いい日和

鳥取市　西尾呼風
危険でない戦地なんてどこにある
良い嫁を選びたいけど豊かでない

鳥取県　浜田民子
人払いして聞く程の事もない

辻に立ち心の迷いたしかめる

大阪市　山北三三三
結論は酒が出てから任される
夫婦ぜんざい別になんでもない二人

大阪市　乾哲静
鬼の上司に苦手の一人妻がいる
孫だけが生きがいですと老いの愚痴

藤井寺市　菊地繁男
不眠症は妻の鼾と言い出せず
ライバルが道をはさんで店を出し

静岡市　増田扶美
御詠歌に合わせて遠い道辿る
子の脱皮もうそろそろと母慌て

唐津市　池田遊女
恐い夢ガバとはねおきもう寝ない
つまるとこ死ぬため生きる命かな

今治市　藤本のぶ夫
離婚できぬので複線に敷くレール
民宿のいろりの語りつぐ血筋

鳥取県　美浦美代子
定年で皆んなが惜しむ生字引き
おふくろのやさしい笑みも味のうち

鳥取県　久野野草
耳かきがふたりの愛を知っている
妹の八重歯が笑う秋日和

座布団に人柄丸く客は去り
濡れ落葉箒に拗ねて土となり
鳥取市　松本伊都子

亡父が好きも一度会いたい今日も夢
お隣に年金通知誤配され
米子市　小塩智加恵

土地ブーム億の数字も驚かず
七五三写真屋さんも飴を置き
大阪市　平井露芳

古稀の坂恋の相手が先に逝き
本当を嘘らしく言うてはぐらかす
広島市　中村要

小さな倖曽孫二人と歌留多とり
郷里の訛り温め合って飯場の灯
藤井寺市　田中孝子

敵潜にやられし夢を今だ見る
定年でボーナス記事は目ざわりに
池田市　岡本吉太郎

献茶して生前の父を想い出す
丁寧な訛りが老いを慰める
米子市　服部朗子

焦点を合わしてくれる人が居る
訥弁に乗って今日の幸を見る
寝屋川市　坂上高栄

地下道は嫌い迷路が多いから
聞き役にまわると祖母はいい機嫌
静岡市　大石たき

外れ馬券破れば風が舞い上げる
ライバルは仕事の鬼で薬好き
豊中市　田中道胤

タナボタを信じて宝くじを買う
菜園で鍬握る汗湧く希望
和歌山県　吉田武治

釣りだけに根気よく波と戯れる
しおらしい言葉選んだ夫婦箸
鳥取市　中澤正恵

身の程を知って隔り置くときめ
赦すこと少し覚えて古稀の春
和歌山県　三原三究

おもいきり流した涙で悔いも去り
足並の揃う余生を幸とする
岡山県　杉本伊久栄

主婦の意地　赤ペンで書く消費税
ラストダンスが私の運命かえた
松江市　松浦登志子

覗き穴孤独な風が浮いている
理屈などいらぬ真赤なバラを選る
兵庫県　北川とみ子

火災ベル秋刀魚の煙に目を覚まし
トラファンにいたわられてる巨人ファン
箕面市　岩津ようじ

まびき菜の多さにカラスあきれ果て　島根県　渡部好栄

秋風にさそわれ大根太りだし　大阪市　喜多佐津乃

海遊館人間の数に動く魚

手荷物の中からメロディー出す人形　鳥取県　木下芙葉

孫自慢天狗の鼻がすぐ折れる

老い哀し大事な講演居眠りし　鳥取市　中居武士

糖尿はグルメのツケと反省し

胸騒ぎ医師は平気で切ると言う　鳥取県　中西智恵子

ネギ刻む包丁の音妻の朝

三味線の糸ぷっつりとバラは散る　泉南市　坂根流水

育て方一つで大輪菊咲かせ

故郷は銘水だけの過疎の村　姫路市　福島姫女

小旅行　子供のようにはしゃぐ老い

賞もらう楯に刻まる名がうれし　香川県　辻上よしみ

義理固く毎週台風やって来る

皮肉にも一寸の留守に珍客来　鳥取市　谷口侑里

楽屋裏客の知らない汗をかく

嬉しい日熟い鯛焼買ってくる　広島県　岸田武

見抜いてか妻はしずかに笑みており

先輩があと一言を足してくれ　島根県　児玉幸子

運動会老いも若きも皆走り

庭石をふんでカタコトげたの音　島根県　福間博利

順番に逝けぬこの世と思えども

鉛筆を握って下車を忘れかけ　姫路市　山崎おさむ

ボケ始めと相手を笑う老夫婦

旨い酒呑めた日は良く働いた　羽曳野市　福田悦子

足萎えて口に元気を残す老い

冬空に散らすダイヤの星がある　富田林市　加藤みつえ

夏終り通院がらくになりました

秋の日差しを背に老婆こっくりこっくり

◆ジュニアーの部

正倉院タイムスリップしてきたよ　大阪市　新井晶子

ささの葉で笛を作って鳴らせたよ

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

西田　柳宏子

輝かしい平成三年の新春を迎え、同人皆様方のご健勝とご健吟をお祈りいたします。

本年最初の同人吟鑑賞を仰せつかり、責任を感じております。私は川柳には人間の生きざまが描かれ、そこに川柳の大きな要素である批判（私に手ほどきをして下さった清水白柳師は、これを川柳のバックボーンと言われた）が窺えるドラマのある句に惹かれる。

二十一世紀までは待てない離婚劇

板尾　岳人

前月号同人吟巻頭第一句である。華やかな挙式から日ならずして離婚、世間も亦それを日常茶飯事と見馴れているようだ。何でもメモリアルタイムを嬉しがる風潮だが、あと数年で二十一世紀突入の記念すべき年が来る。離婚劇はそれまで待てないようだ。痛烈な皮肉と揶揄が小気味よい響きをもっている。

一つや二つはゲリラもいそうな千羽鶴

都倉　求芽

昨年末の即位大礼に関する一連の国家行事と皇室行事。なぜ日本人として素直に悦び、共に祝えないのか。反対集会やゲリラ……淋しい気がする。平和の祈りを込めた千羽鶴、真心の結集のような中にも、一つや二つのゲリラ鶴が居そうな気がする……鋭い批判が投げかけられている。

連休も定時に泣いた赤ん坊

仁部　四郎

思わず苦笑させられたユーモラスな句。働き過ぎ日本人も、週休二日とか、祝日と日曜が重なれば繰延べ休日と、連休も増えてきたが、育児に連休はなさそうですネ。本能のままに泣く赤ちゃんの勝ちというところ。

とんぼより算数　国語　理科を追い

中村　ゆきを

学歴尊重社会に歪められた進学制度の下で可哀そうなのは子どもたち。我々が鞄を放り出してトンボを追い、魚を捕った遊びが消え、塾通い、それも二つ三つとかけもちで……考えさせられますネ。自然との遊びを知らない子どもたち。

私を縛る我が家の灯が温い

玉置　重人

わが家の灯の温もり、その温もりの中で縛られている自分だが、幸せがうかがえる。

三病息災　神様にお灯明

羽原　静歩

昔は一病息災といったものが、いつからか現代病が増えて、二つや三つの持病はザラのようだ。作者自身を詠んだと思えるだけに余計に胸を打たれる。

孤り居てありったけの灯をともす

細川　稚代

前の句に比して同じわが家の灯にも、縋るような独居の心細さが胸を打つ。

続いてユーモアたっぷりの二句。

頂上で富士より五尺高くいる

小砂　白汀

いか焼きの匂い雅楽の風に乗り

米田　恭昌

前者は、富士山頂の優越感が嬉しく伝えられ、後者は、春日大社の雅楽の場へ参道のいか焼きの醤油のこげた匂いが風に流された取組みの軽妙さに川柳の面目躍如というところ。

生き抜いた我慢のにじむいい笑顔

奥谷　弘朗

逆らわぬ妻に手綱を握られる

山田　高夫

この二句に人生の生きざまが巧みに詠まれており、心打つ句と言えよう。

そして最後に、心寒くなるほど胸をしめつける鋭い叫び。

魂が外へ出たいと涕くのなり

谷垣　史好

多言は不要。ひしひしと闘病のせつなさを身をもって体験している作者の声が聞えてくる。この句で締めくくることにする。

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

宮西弥生

よそ見する思いやりならしてやれる

大橋政良

気くばり、心くばり、目くばりのなくなったこの頃です。せめて見て見ぬふりをして相手を許してあげる。そんなやさしさがほしいですね。自分を大切にするならば、他人をもっと大切にしてあげたいものです。

注意して聞けば小骨のある言葉

流奈美子

誰もが経験ずみの小憎らしいこと。うっかり、通りいっぺんと安易に思ってるといやはや、胸中がぐらぐらと沸きかえる怒り。相手の中年女性の可愛さを忘れた小骨のささる言葉。よく分かります。よく分かります。こんな女にはなりたくない。

生きざまをとんび舞い舞い考える

清水悠貴女

生き難い世の中になりました。現代の社会通念を通したきびしいものを感じさせられます。

事なかれ主義を通したカタツムリ

岸桂子

主義・主張のない淋しい人生は、なんと暗黒でありましょう。見て見ぬふりをして避けるということは、あんまりにも後退的な生き方です。思い切り戦って、傷ついて、人間らしくありたいですね。

別れがあるたび賢くなって行く

池田寿美子

肉身との別れ、友だちとの別れ、男女の別れ。避けては通れないこの世の掟に直面してこそ、人間は大きく成長して行きます。そして時と忘却が助けてくれます。この世で起きたことは、この世で解決できるのです。頑張りましょう。

本当を言うから溝が埋まらない

渡辺南奉

生きてゆくということは、骨の折れることですね。私は正直な人間が大好きです。でもそのために怒らせたり、傷つけたりすることもあり、なかなか上手く行きません。人生ってこんなものなんですね。

孤独感捨てた女が虹を織る

酒井靖子

適齢期も早く過ぎ、気付けば中堅社員として職場のリーダーを務めている一女性。現代を生きる女性としてのパターンです。泣きごとどころか、仕事に燃えるパワーを十分に発揮し、海外旅行から、世界のファッションのブランドを器用に着つくしている前向きの女性である。

カメラでは写らぬ夢をもっている

鈴木公弘

神さま、どうかままならぬこの世の夢を抱くことをお許しください。そして何時までも消えることのない大切な夢をこわさないでください。作者は、どんな素敵な夢を抱いてるのでしょうか。

次に鑑賞文は省略して、感銘を受けた句を挙げさせていただきます。

背中まで鏡で見ようなどは無理

黒田緑

てのひらにひとり芝居の絵を描こう

今西静子

お知らせ

同人費・誌代を郵便振替で送金された場合、いままでは領収書を発送してまいりましたが、会計事務簡素化のため、平成3年4月からこれを廃止したいと存じますので、ご諒承をお願いいたします。

なお、現金または郵便為替で送金された場合は、従来どおり領収書を送らせていただきます。

川柳塔社会計部

■ずいそう

あたらぬはっけ

西尾　栞

この度、十一月三日の文化の日に、八尾市民文化賞をもらって、朝日、毎日、読売、サンケイの各新聞に写真入りで報道されたので、各地から祝辞や祝電をいただいて恐縮している。

省みると六十年の昔、川柳の第一歩を踏み出した時、恩師路郎の人格と温情に抱かれ、俳句は花鳥諷詠の詩であるが、川柳は人間諷詠の詩であると教えられ、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

俺に似よ俺に似るなと子を思い

人類は悲しからずや左派と右派

という句を示して導かれた。私が阪大川柳会（大阪帝国大学医学部）に入会したのは、昭和六年七月二十五日の天神祭の晩であったが、私が結婚したのは昭和十年の一月だった。当時、今でもそうであるが、川柳会は夕方六時半頃から始まり、十時過ぎに終って、酒房で一杯やり、句を批評したり議論したりして、家に帰るのは十二時を回ることがしばしばであった。女房の機嫌の悪いことは申すまでもないが、私は川柳と結婚したのは昭和六年で、おまえと結婚したのは昭和十年だ。だから四年も前に川柳と結婚しているのだから『やかましく言うな』

ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする

という状態が何年か続いた。長女の縁談が起って、相性を見てもらいに、平野に良く見る易者がいるというので女房が出かけたついでに、僕の易も見てもらってきて、「この人は今はよいが、晩年の運勢はとても気の毒な運命です」と聞かされて帰ってきてしょげていた。

ところが七十歳の時に、句碑を建立してもらい、七十七歳の時に喜寿金婚というアドバルーンを川柳塔社の同人の方々によってあげて下さって五百人程の柳人が集まってくれたし、翌年、NHKのテレビに、「共白髪」というタイトルで夫婦して半時間放映してもらったし、その翌年十一月三日に、木盃一揃いを戴いて豊明殿へ伺候した。そして平成二年十一月、またもや、八尾市文化賞という立派な賞をもらった。私の晩年は正に花盛りである。

三十年前の易は、一体どうなったのであろう。世にかつぎやというのが沢山いる。茶柱一本にも一喜一憂する。人生はそんな甘いものではない。十本余りの箒竹に左右せられてはたまらない。特に女性の方に、方角がどうの、吉日がこうのと言う人が多いように見受ける。要するに長生きすることが先決問題だ。快食・快眠・快便は身体の健康だが、それに心の健康、快談・快笑をお勧めする。川柳会に出て、皆さんと快い話をして快い笑いをすることで、老いの坂を越して行こう。十一月三日は、私にとって最高の日であった。

五七五のリズム輝く文化の日　栞

一路賞・各地柳壇賞選考委員決まる

本誌課題吟（一路集）の年間最優秀句の作者を表彰する「一路賞」第二年度選考委員は小林由多香（鳥取市）・久保正敏（唐津市）西出楓楽（大阪市）の三氏に委嘱しました。

また、「各地柳壇賞」も一年交替で選考委員を委嘱することとし、今年度は藤井一二三（堺市）・久家代仕男（平田市）・小島蘭幸（竹原市）の三氏に決定しました。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ (1)

橘高薫風

畏友寺尾俊平が言った。

「六大家の中でも、事作品に関する限りは、麻生路郎が第一等であると思う」と。

それでは、路郎作品の中でどの句が一番佳いと思うかと聞くと、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

だと答えた。

川上三太郎の句もすばらしいのに、その門下生が第一等だと言う路郎の、そのまた一番の作品は、昭和二十八年十一月三十日発行の麻生路郎川柳句集『旅人』の巻頭句である。

路郎自身何万句と創った中で、一生に唯一冊の句集の巻頭に据えた理由は、路郎の川柳生活もまたこの一句のように始められたからに外ならぬ。二階の書斎は、路郎の拠点であり、あらゆる可能性を追及する出発点でもあり、青春性ともいえる詩人の孤独な魂の帰り着く処であった。私は昭和三十一年、掌にすっぽりと乗るほどの、小型ながらずっしりと重い『旅人』を開いてこの句に接したとき、石川啄木の次の一首を想起したのであった。

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

路郎は、「どこへ行く身ぞ」と詠んだ同じ大正十五年に、

僕だけをおろして汽車は消えにけり

とも詠み、ずっと下った昭和二十八年には、

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

の句が見える。路郎は夭逝の天才詩人啄木に大きく共鳴するものがあったのだろう。昭和四十年の喜寿金婚の華やかなるべき年に、

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ
死の影が紋十郎の背後から

と、一転して暗い影に覆われた悲劇的な最期は、今も私の脳裏に鮮やかで、それも、啄木の短い生涯のある部分に酷似している。

路郎の川柳作句活動、川柳社会化運動は、反骨精神で一貫していた。一般の川柳人には理解の域にない理想を持って行動し、自分自身や家族までをもさいなんだ。詩や短歌や俳句の後塵に甘んずることを潔しとせず、川柳界の微温的傾向に刃向い続けた。

雲の峯という手もありさらばさらばです

七月七日の夜にこの世を去った路郎の辞世の句は、まるで雲の天辺から手を振って別れを楽しんでいるような爽やかささえ感じられる。嶮しい道を歩き続けた人生行路の果てなればの満足感であろうか。

啄木に一首歌あり。

（つづく）

▼お願い　「川柳塔」「水煙抄」への投句は、川柳塔用箋をご使用ください。

つつしんで新年の
およろこびを申しあげます

川柳大阪

市電川柳より創刊50周年を迎えました
記念句会へどうぞお越しください。
（平成３年３月３日　府立労働センター）

大阪市交通局互助組合文化部 川柳部

部　長　中田善三
責任者　中原比呂志
編集者　髙須賀金太
事務局　森松虎酔吟

井上喜酔　岩井本蔭棒　岡本天平
児島与呂志　斉藤三十四　塩満　敏
田中笑風　玉置重人　西岡洛酔
狭間希久志　橋本雅巣　長谷川司
坊農柳弘　山下美津留　芳鉄心
他部員一同

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

明けましておめでとうございます

本年は創立35周年並びに学生句集「竹の子」第二集
発刊記念川柳大会を９月８日に開催致します。
ご支援よろしくお願い致します。

会長　山内静水
副会長　小島蘭幸
　　岩本笑子
　　時広一路
会計　森井菁居
　　三宅不朽
　　岡本清水
　　岩本文晴
　　古田太虚
　　古田比呂子
　　藤村新造
　　田解静風
　　原淑子子
　　石房子
　　山内
ほか一同

謹賀新年

うみなり川柳会

会員一同

〒680 鳥取市相生町3－204　森田熊生
電話　0857－23－4672

南大阪川柳会

毎月句会は19日です

お気軽にお越し下さい

参会者一同

頌　　春

	武部敦子	三崎伴子	楠昭子	高田治子	吉田つや子	高田美代子	赤木和子	高津三郎	菊地繁男	福元稔	中島志洋	児島与呂志	中原比呂志	吉岡美房	笠原吸江
他一同															

川柳　藤井寺

ＹＦＣ文化センター
川柳セミナー

西尾栞　岸野あやめ　浅野房子　大塚節子　坪田紅葉　人見翠記　海老池洋

新年おめでとうございます

岸和田川柳会　一同

事務所　〒596 岸和田市上町７－36
植山武助
電話（0724）39－0836

八尾市民川柳会

高槻川柳サークル卯の花　一同

おめでとう
ございます

京都塔の会

渡辺圭坊
高沢栄
小林子
山田子
本荘福子
都倉求芽子
松川芳子
松川杜的

明けましておめでとうございます
本年もよろしくお願い申しあげます

正本水客
黒川紫香
阿萬萬的
松川杜的
辻白渓子
川島飄云児
小池しげお
渡辺圭坊
藤村〆女
竹内花代子
松川芳子
奥山美智子
茂見よ志子
笠嶋恵美子

新春お慶び申し上げます

川柳ささやま社一同

代表　遠　山　可　住

姫路　**川柳化粧櫓の会**

平成三年　頌春

丁坪サワ子　山崎おさむ
松浦輝月　内海美代
松浦大鷹　菅原朱玉
北山越山　本多茂章
大原葉香　美原　嘉
保西岳詩　福島姫女
植村客遊子　福本好花
駒井はる女　丸尾はる子
川島春蘭　中塚遊峰

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

米子　川柳塔きゃらぼく

石垣花子
青戸田鶴
足立由美子
新　正子
池尾保子
石中時子
大田みさと
大塚恵子
鹿島松子
門脇晶子
神崎あい子
金山夕子
川上より子
木村冨美子

木村春枝
桑原伊都
小塩智加恵
小西登栄
小村てい子
沢田千春
坂口一江
さえきやえ
塩谷八重子
白根ふみ
菅井とも子
田中亜弥
寺沢みど里
中井ゆき

野中御前
野坂なみ
林　荒介
林　瑞枝
服部朗子
広江富枝
堀江純子
増田竹馬
政岡日枝子
光井玲子
三好寿々子
茂理高代
矢野満子
八木千代

銀河系

河内天笑選

秋日昏れ過疎の村には音が無い　倉吉市　渡辺　菩句
教えなくとも初恋はやって来る
花見れば花が教えてくれるコトバ　西宮市　奥田　みつ子
また一つ若くなります初鏡
すきやきに一人になった日を思う
昨日の悔いきっぱり捨てる深呼吸　鳥取県　新家　完司
木枯らしの生まれる谷を見に行こう
家に着くまでにエッチな本捨てる
図書館へ行くふりをして逢いに行く　和歌山市　田中　輝子
満開の菊へ溢れてくることば
首筋をきれいに洗う初対面
迷いふっ切るレモン齧ってみるもよし　米子市　石垣　花子
思い出し笑いかくしている扇子
丸文字を書いて男にまだなれぬ

小さい嘘通して貰ろてから孤独　寝屋川市　岸野　あやめ
羊の瞳　我慢をせよと言う如し
小さくとも二人で住める家がほしい　鳥取県　さえき　やえ
あと百年ゆっくり生きることにする
焚火の輪神は身近に在します　米子市　八木　千代
喝采に溺れいちにち棒に振る
車窓からはのんびり見える野良仕事　西条市　片上　明水
椅子の向き変えず言訳聴いている
目下にも時にはゴマをすっておく　青森市　工藤　甲吉
よっぽどの事で体も泣いている
大阪がまだまだ変わる死ねまへん　八尾市　籾山　隆
てっちりの湯気に溶かした蟠り
かたくなに素材を選ぶ味の店　宝塚市　丸山　よし津
人質の父帰らないクリスマス
うまい水の湧く洞窟を知っている　鳥取県　江原　とみお
一本橋だお手てつないじゃ渡れない
モナリザに似てると妻をよろこばせ　弘前市　波多野　五楽庵
公私共多忙で酒の香が抜けず
うるさいと言わんばかりの二度返事　橋本市　岸本　木魚

ドック入りお勧めしたい地球です　鳥取市　西浦　小鹿
哀しみを隠した芸に雪が降る
妥協癖ついてわたしが弱くなる　名古屋市　藤井　高子
賀状百枚　百の笑顔と対話する
叱るにはどうにも子の背高すぎる　寝屋川市　江口　度
井戸を出た蛙の鼻は折れやすい
フィナーレの余韻拍手に打ち消され　岸和田市　三輪　通彦
無理するな言うて残業させられる
うかつには返事の出来ぬおもちゃの値　米子市　新　正子
はた目にはのどかに見える鍋の中
沈黙は力静かな母の背な　唐津市　浜本　ちよ
威儀正すほどではないが新春の生花
箱を出て抱かれる夢を和紙人形　岸和田市　島崎　冨志子
髪染めて二三ヶ月を若づくり
内助の功　遺産半分だけの価値　唐津市　久保　正敏
美顔術私わたしを諦めぬ
ずたずたに絆が切れる遺産分け　高槻市　川島　諷云児
正直なだけが取り柄の葱坊主
切り札を使い果たして妥協癖　尼崎市　春城　武庫坊

方言の温み刺身のうまい浜
結局は親が折れると知ってる子　和歌山市　坂部　紀久子
落ちのない漫才夫と続けてる
ぎくしゃくと真実ばかり絡み合い　吹田市　山本　希久子
陽の恵みあり年金の旅続く
あの恩もこの恩もまだ返せない　大阪市　板東　倫子
心病んで黒人霊歌聞いている
艶聞の絶えぬ男でお人好し　吹田市　栗谷　春子
充ち足りたちょっと危ない瞬間だ　鳥取県　土橋　螢
寝返りの技がだんだんうまくなる　豊中市　安藤　寿美子
本当の事はだまっていましょうよ　黒石市　相馬　一花
豚汁の残りを豚が食わされる　米子市　小西　雄々
人形が身籠り茶の間やかましい　和泉市　中川　楓
生きている限り脱皮をくり返す　藤井寺市　高田　美代子
今何を月に祈ればいいのだろう　堺市　桜沢　あか里
ガム噛んで無視をするのも策のうち　大阪市　神夏磯　典子
にんにくの移り香ならば許せよう　堺市　高橋　千万子
十八階　居留守使うた窓を見る　鳥取県　上田　俊路
足弟の意見それぞれ嫁のもの　西宮市　西口　いわる
ジーパンが似合う流行語も似合う　堺市　神原　文
嫁が来てまた精が出る節料理　和歌山市　古久保　和子
喉仏みせて野心のない笑い　鳥取市　大坪　天涯
機に触れて色とりどりの生に逢う　米子市　林　荒介
新刊の帯は自分を主張する　米子市　林　瑞枝
足裏を洗って詫びる事多し　鳥取市　小谷　美っ千
家族みな元気　味噌汁熱くする　羽曳野市　徳山　みつこ
母逝って銀杏の実は落ちたまま　箕面市　椎江　清芳
祝酒飲んで味方の顔をする　岡山県　富坂　志重
紅葉に乳房を浮かす露天風呂　枚方市　森本　節子
大根の白に献立思いつく　河内長野市　植村　喜代
煽てられ男が居場所間違える　和歌山市　森　茜
待つことに自信があったなんて嘘　大阪市　松尾　柳右子
ジーンズをレザーに変えて翔んでます　唐津市　山口　ふさ子
ライバルが居て世の中が面白い　岡山県　江口　有一朗
老いたとも思いまだまだとも思い　有田市　松井　かなめ
いびられて枕濡らした日をバネに　岡山県　松本　元江
酔いしれていては私が盗まれる　富田林市　松本　今日子
ストレスが溜ってますの指先　和泉市　西岡　洛酔
やじろべえの妻と私に日が落ちる　弘前市　真喜内　實
ほろにがさ男らしさと思っとる　広島市　中村　要
事後承諾とは言うもののこの寝顔　鳥取県　田村　きみ子
この頃は一円玉が落ちてない　川西市　野村　静雄
病院へ行かねば暇があり過ぎる　大阪市　町田　達子
ハプニング以来ピエロになっていた　唐津市　野崎　ハル
すれ違いざまにヒントを貰う服　米子市　政岡　日枝子
辻々の噂が寒い風になる

和歌山市　青枝鉄治
薬漬けどれかが効いているのだろ

弘前市　村田善保
耐え抜いた根性笑顔絶やさない

和歌山市　山田高夫
学歴差埋めて経験ものをいう

和歌山市　後藤正子
初雪を聴くときふっと華やいで

岡山県　清水悠貴女
足るを知る眼鏡にそよぐ芒の穂

岐阜市　渡辺杏村
黙々と二十一世紀を目指す

鳥取県　岩原喬水
洗髪で流す抜け毛がいとおしい

和歌山市　山川克子
煮えたぎる腹で平気な顔をする

砂川市　大橋政良
黒枠の中で勲章だけ光る

伊丹市　樫谷寿馬
いか飯を上手に食っている入歯

今治市　矢野佳雲
本音いう人が怖くてつき合えぬ

米子市　金山夕子
目を閉じて触れると仏像温かい

堺市　近藤豊子
放心のすがた秋の蚊飛んでくる

姫路市　大原葉香
背のびして蝸牛もゆめを追っている

岡山県　山本玉恵

墓石と月は無限を語り合い

鳥取県　石谷美恵子
火傷せぬ位置で野心を膨らます

唐津市　浜本義美
もう七十まだ七十の髪を染め

寝屋川市　稲葉冬葉
減量の途中で野菜高くなり

宝塚市　末次真
街路樹の落葉に帰る土もなし

熊本県　増田一乗
月の石盗んで早くも二十年

鳥取県　谷口次男
一億二千万分の一の力

佐賀県　寺中三枝子
とぼけ顔して大物は生きのびる

豊中市　田中正坊
均等法ボディブローがきいてくる

今治市　越智一水
海外派兵　女が先にノーと言う

東京都　山口新子
ふる里の海褐色の愚痴を飲む

大阪市　尾崎黄紅
車がいっぱい地球が凹むぞよ

京都市　渡辺圭坊
お鏡は省き秤で小餅買う

尾崎市　住谷石舟
定年後とんとお暇な靴すべり

大阪市　藤田頂留子
占ってほしい地球の運命線

米子市　中井ゆき
赤信号とばして行ったオバタリアン

岡山県　土居ひでの
過労死の夫に聴きたい事ばかり

十和田市　阿部進
返り血をゆるりと洗う縄のれん

大阪市　渡部さと美
よい嫁になろうと個性ねむらせる

姫路市　福本好花
柔らかなことばの端が骨を刺し

奈良市　米田恭昌
勝負師は遊び心も少し持つ

広島市　名和喜一郎
新曲を覚えたらしい風呂の妻

羽曳野市　芦田絢子
頼られるうちが花です多事多忙

出雲市　森山健歩
手鏡の奥に潜んだ自尊心

倉吉市　奥谷弘朗
浮き沈みみんな知ってる庭の松

鳥取市　前田一枝
顔隠す黒い眼鏡も芸のうち

大阪市　今西静子
終えんまで赤い彩ある女です

大阪市　津守柳伸
着膨れた羊せっせと草を食む

和歌山県　西口忠雄
あっさりと謝る夫に負けました

大阪市　亀井円女

満点の嫁でないから救われる　静岡市　渥美弧秀

乾杯のコップで絆つなぎ合い　鳥取県　武田帆雀

菊咲かせあなたの本業はと問われ　堺市　小西小雪

歪だがわたしの焼いた皿が好き　米子市　光井玲子

手品師の専用ですか白い鳩　十和田市　斉藤劦

白鳥も見に来るラガー新人戦　西宮市　瀬尾六郎太

お粗末だ日本外交しっかりせい　門真市　藤田翔

メードイン・ホンコンとあるパリ土産　岡山県　荻野鮫虎狼

小春日に窓際族は馬鹿になる　岸和田市　古野ひで

結構な家に生まれて何故ぐれる　守口市　結城君子

弁解は聞かぬあの子はもう居ない　今治市　月原宵明

黒い髭生やし戦い好きな国　唐津市　池田遊女

まつたけの味半分は優越感　貝塚市　行天千代

週刊誌買う紀子さまを読みたさに　和歌山市　福本英子

新しいマンガを読みに医者通い　羽曳野市　田中透太

首根っこやんわり妻に押えられ　鳥取市　西尾呼風

生きすぎて世話やく妻が困るだろう　岡山県　池田半仙

髪染めて余計にめだつ顔の皺　出雲市　竹治ちかし

故郷の山脈(やまなみ)母の胸に似る　笠岡市　松本忠三

戦友が東北弁で会いに来る　香川県　辻上よしみ

広い空小さな悩み飛んで行き　香川県　木村明人

親しさを増幅します国訛り　竹原市　信本博子

古日記はたちを偲ぶペンの跡　藤井寺市　中島志洋

先生にまさかと思う粋な過去　静岡市　沢田きん

うつむいたミスへ冗句の助け船　海南市　三宅保州

足跡をわざと残してある家出　大阪市　塩田新一郎

密会は枯木林のコーヒ店　藤井寺市　武部敦子

還暦でガールフレンド募集中　箕面市　岩津ようじ

言い馴れぬお世辞皮肉と間違われ　出雲市　園山かおる

ナツメロが聞えて来ます老父の風呂　和歌山市　田中みね

打ち所よくて記憶を取り戻す　岸和田市　清野こう

息子にビールすすめて相手ほしい父　唐津市　野田旭恒

青バナナ色づく迄は供えとく　羽曳野市　麻野幽玄

女だてら何て言わせぬ大ジョッキ　唐津市　中村広

ガンでない判定が下り祝膳　唐津市　浜本治幸

雰囲気に負けた財布が軽くなり　和歌山市　粉川道子

庭掃除肩にもみじのアップリケ　寝屋川市　坂上高栄

間歇泉　地球の溜息かも知れぬ　鳴門市　八木芳水

働ける腕へ太陽味方する　唐津市　筒井朴竜

老いてなお森の植樹へ流す汗　七尾市　松高秀峰

定年へ貝になる日が多くなり　和歌山県　三原三究

糖尿病せめてたまには暴食日　唐津市　田口虹汀

苦笑いしながら結ぶ初みくじ　尼崎市　春城年代

垢抜けぬことば飛び交うクラス会

女性コーナー

黄香の忠

小出智子選

薄らいでゆく鈴の音を確かめに　和歌山市　後藤　正子
背負わねばならぬ荷物がそこにある　和歌山市　木本　朱夏
秋のフェンスに激しい思慕がひっかかる　富田林市　池　森子
いちにのさん　子供は潔く越える　河内長野市　植村　喜代

身のうちの獅子が眠ったまま起きぬ　大阪市　西出　楓楽
香水の蓋を開けるとあなたが居る　西宮市　西口いわゑ
端役は端役なりに矜持にこだわって　和歌山市　西山　幸
水たまりたまには肩を貸してあげ　西宮市　門谷たず子
人恋えば小さき痛み持つ乳房　羽曳野市　芦田　絢子
船底で帆綱の修理しています　米子市　新　正子
方円の水と余生を重ね合う　岡山県　矢内寿恵子
つま先が乱れはじめた女舞　岡山県　松本　元江
畳替え旅の終りもこのように　松原市　佐藤　奏月
さみしくて手の鳴る旅についてゆく　兵庫県　北川とみ子
貰い手がある玉ねぎの苗を植え　堺　市　山本　半銭
三升米研いだ此の手で二合研ぐ　米子市　石垣　花子
ネズミを見かけませんね　恐くなる　佐賀県　寺中三枝子
気を変えて千枚漬けを買うています　堺　市　小西　小雪
若水を汲むにつけても孫のこと　寝屋川市　岸野あやめ

子離れの糸が絡んでばかりいる　米子市　光井　玲子
湯豆腐の角が崩れた理想論　羽曳野市　吉川　寿美
弾む力を静かにためている毬よ　大阪市　倉本　朝世
想い出につながる品で片付かず　大阪市　堀　いくの
迷い道　少し休んで花を見る　米子市　金山　夕子
方言で話す笑顔の暖かさ　香川県　辻上よしみ
夫にも自立のテストしておこう　大阪市　鈴木　節子
エゴイズム鏡の中を出入りする　有田市　生馬芙美子
全快の宴なみなみと注ぐジュース　和歌山市　内田　結実
曇る日も照る日もあると諦める　宝塚市　丸山よし津
走れないことはないとは思うけど　吹田市　栗谷　春子
反論がきっちり出来て日本晴れ　和歌山市　細川　稚代
旅帰り慣れた枕に労わられ　大阪市　本間満津子
お茶の間のドラマを変えにきたハガキ　和歌山市　山川　克子
持ち慣れた袋とかるい旅に出る　米子市　寺沢みど里
リフォームを続ける秋のプロローグ　大阪市　津守　柳伸
きっと咲く種子播いている昨日今日　大阪市　田中　弘子
花よりは団子グルメの旅を行く　鳥取市　前田　一枝
蟋蟀も私も隅が性に合う　松江市　竹内寿美子
こしひかりお故郷訛りの味がする　米子市　政岡日枝子
太陽とはなしがあって畑に出る　鳥取県　さえきやえ
大阪で育ち大阪城知らず　大阪市　稲本　凡子
何彩を着せても似合う老母になり　島根県　松本　文子
足跡の余韻にこころ縛られる　和歌山市　桜井　千秀
そしてそしてとまだ続いてるシンデレラ　名古屋市　藤井　高子

フィナーレの薔薇に期待が注がれる　米子市　林　瑞枝
復讐かも知れぬ対話がまだ続く　富山市　舟渡　杏花
封切れば灯がうるむ母の文　岡山県　富坂　志重
温かいポーズでポスト待っている　大阪市　神夏磯典子
恋一つ紅葉のように散ってゆく　西宮市　林　はつ絵
ストレスを貯めてお鍋が煮こぼれる　大阪市　松尾柳右子
波打ち際の話ばかりでまとまらず　和歌山市　坂部紀久子
愛のムチでも怖いものは恐い　和歌山市　福本　英子
老母を抱く腕の力が余ります　堺　市　宮本かりん
そこまでを案じることは越権よ　尼崎市　春城　年代
夫唱婦随　隙間風など寄せ付けず　和歌山市　田中　みね
二冊目の三年日記ペン下ろす　西宮市　奥田みつ子
妹の空にはいつも虹がある　米子市　青戸　田鶴
市民課のやさしい人へ列が出来　守口市　結城　君子
あなたには聞こえてほしい独り言　千葉県　上鈴木春枝
来る来ない来る来ない　と雨に佇つ　八尾市　宮西　弥生
野ボタンの紫少し　病む母に　有田市　松井かなめ
またしても自分ばかりを労わって　和泉市　中川　楓
割り算が上手で何も残らない　岡山県　山本　玉恵
どの部屋もとり散らかせて冬仕度　豊中市　辻川　慶子
これ以上書くと悲しくなる手紙　富田林市　松本今日子
法縁に逢う一刻はまるくなる　出雲市　園山多賀子
過去形になればどれもが美しい　和歌山市　古久保和子
鉄線は張らぬ　私がひっかかる　米子市　中井　ゆき
気兼ねない暮らしの中にある祈り　堺　市　桜沢あかり

寂しさを自由の中に消す夜長　貝塚市　池田寿美子
薄持つ人に出会ったよい笑顔　寝屋川市　坂上　高栄
三面鏡私の弱味つかんでる　大阪市　町田　達子
お亡母さん今日はいい嘘つきました　大阪市　亀井　円女
病んでから気ままの取れた父の箸　大阪市　渡部さと美
株の値を上げてくださる神詣で　寝屋川市　宮崎　菜月
頬杖に迷いをのせた白昼夢　鳥取市　小谷美っ千
遅れずにわたしも渡る朝の橋　寝屋川市　堀江　光子
忘れよう白菊霜に耐えている　三笠市　山田すみ子
子の病気知らなかったで済まぬ悔い　堺　市　鈴木　可愛
善人になったつもりで出る山門　姫路市　中塚　遊峰
子宝の朝の嵐に巻き込まれ　姫路市　福本　好花

ゴシックの一句目、歳月と共に身の周りはどんどん変化してゆく。そんな中で少しずつ薄らいでゆく鈴の音をもう一度取り戻したいとする。透き通るまでの美しい感性で一句にされました。二句目、単刀直入に作者のきびしい立場を、これ以上の省略はないまでに表現されています。女の強さでありましょう。三句目、女としてのぎりぎりの感情が率直に現わされて、どのことばにも無駄がない。秋のフェンスは心象につながって適切な。四句目、大人の思惑とは別に、子供たちはけろっと割り切って行動しようとする。その潔さには抵抗を感じながらも、これでよいと納得してしまう。
今年も素晴らしい作句との出合いを楽しみにしています。

◇

ハガキに雑詠3句。毎月**10日**締切

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10

小　出　智　子

平成二年度　銀河系賞

受賞作品

新家完司

きのうより重いバットを振ってみる
連敗の力士の顔を見ておこう
なつかしい人なつかしい歩きかた
子供らよ虹にふりかえりもせずに
ある時は鯨になって群を出る

準賞作品

八木千代

たましいの疵にふれてはくださるな
こだわって舌に季節をおぼえさす
雪降れば雪ひといろになるわたし
旅を重ねて無宿のおもいしてならぬ

評　完司さんの句は、単純化されて、かえってひろがりのある作品になっています。
自分の彩で燃えている太いローソクのような千代さんの作品は、おんなを感じさせてくれます。
たましいの叫びを一年間、ほんとにありがとうございました。
（河内　天笑）

万緑のしたたる中の白い首　工藤甲吉
人間を　鳥　一日中囀う　江原とみお
花を見ながら計算をしておった
あっけらかんと終る日照りのお葬式　政岡日枝子
ライバルにうっかり見せた足の裏
妥協せぬ時計　柱で鳴っている　田中輝子
本当の淋しさ風が止んでから
大きいヤマひとつ越えたら鳥になり　堀畑靖子
ふん切りをつける助走をしています
畳には箒わたしを押し通す　大橋政良
目玉焼きお前孤独な目をしてる
十指みな違う答を持っている　西原艶子
老眼鏡まだ恋文を書いてます
好きだから横へなかなか座れない　中川楓
喧嘩するほどの人ではなさそうだ
割り切って六法を読む淋しい日

平成二年度　茴香の花賞

受賞作品

佐藤奏月

蝶になるまでのプロセスたのしもう
トマトを切るとなまくらなのがよくわかる
雨の日のポストは頼りがいがある
鞦韆の漕げない友と乗るシーソー
寂しくてもいちど声を掛けたくなる

評　こころを打つ作品があるとそこで立ち止まり、離れては眺め行き過ぎては引き返して立ちつくす。画廊を出たあともつづく余韻。

茴香の花の群れに囲まれて、あまりのかぐわしさに冥利に尽きる時間をいただきました。何と二十名にも及ぶ女性作家の実力にたじろぎながら、決めかねて決めかねてやっと絞ったのですが、有難いことでした。

佐藤奏月さんからは、句に表現されるまでの心の過程をいっしょに苦しんだり、楽しませていただき、西出楓楽さんの水一杯には胸を詰まらせました。池森子さんのあでやかに揺れうごく花のかたまりもみごとでした。

それに板野美子、川上より子、後藤正子、藤井高子、政岡日枝子、田中弘子、堀畑靖子、奥田みつ子さんたちが紙一重というせり合い、何ともつらい選択でしたが、手繰られるようにこの安定した作品群におちつきました。

（八木　千代）

準賞

西出楓楽

水一杯あれば涙は飲みこめる
忠告だろう　くずれた朝の目玉焼
父は父の位置で咲かせる花を持つ
身の程はわたしの影が知っている
いい友でずっと居れそうポストとは

池森子

冬が降り立つ　少し方向間違えて
バラ散らすようにわかれて来たばかり
境界線を作ると僕が枯れてくる
とても静かに妻は離陸を考える
落ちこぼれのわたしあつめている旅路

受賞のことば

平成二年度 銀河系賞

新家完司

思いがけない受賞におどろいています。賞を受けると肩に力が入りますので、できるだけ意識しないように、がんばりたいと思います。

机上でこねくり回して構築した句よりも、自然に心に浮かんで来た句がいちばん良いと思っているのですが、簡単には浮かんで参りません。

これからも実感に即した句を、と思っています。ありがとうございました。

略歴

昭和十七年十一月十八日生
昭和五十九年　「川柳塔社」同人
昭和六十年　「川柳展望社」会員

平成二年度 茴香の花賞

佐藤奏月

毎年、賞をいただく方々を熱い思いで、眺めてまいりました。

その熱い思いを今、私自身のこととして、受け止めることが出来まして、ほんとうに幸せでございます。

この感激を大切に、「茴香の花賞」に、恥じないよう、一層の精進をしなければならないと思っております。

ありがとうございました。

柳歴

昭和五十五年九月　「双葉句会」に出席する
昭和五十八年八月　「川柳塔社」同人となる

ひみこさろん

新年に思う

竹内　寿美子

幸せとはどんな彩をして、どんな形をしているのだろうか。人によってそれは異なっていると思う。ある人には幸せであっても、ある人にはそれが幸せとは感じられないこともある。

何年か前に句集を作ったとき、長島愛生園の人とお友だちになることができた。年に二回、春の観桜句会と秋の観菊句会には、私たちも参加して一緒に勉強することができる。昨年十一月三日にも参加した。夜、電話があって毎日待ちつづけていたのに終ってしまうと嘘みたいな気がすると言われ、私もそう思った。

奥出雲の峯寺で、千年以上も生きている椎の古木を見た。木は神様から与えられた場所で懸命に枝を張り、天に向って伸びていた。私たちの知らない処で、一所懸命生きて居られる人たちがあることを知った時、自分が健康である限り、春と秋の句会に必ず参加することを約束した。

幸せとは何だろうかと思う。一人一人の思いは異なっていても、誰かの心に喜びをあげることができたら、それが一番の幸せだと思う。新しい年、まず健康、そしていい川柳を作る。喜びも悲しみも誰かと共にありたいと願う。

春眠やこの世のことも夢の中　すみこ

神社の参拝

林　はつ絵

私の生家は富山市郊外の神社の隣にあります。子どもの頃から元旦には必ず神社へお参りさせられ、小学校もその前を通って往き来するので神社の前では頭を下げ何かを祈るようになっていました（今日の運動会、三等とれますように）など。

ところが神社参拝について疑問を持つことがおこりました。それは私が小学校に勤めていた戦時中のこと、ある日校長会から帰った校長先生の伝達が「神社の前へ出れば有難くて涙が自ずと出るようにさせねばならぬ」とのことです。「涙を出さなかったら？」と問うと「撲ってでも何が何でもその気持にさせねばならぬと言うことだった」と校長先生の声も覚束無い響きです。全く宗教の領域。今にして思えば、そのような教育指導を示さねばならなかった事情もわかるが、私はその時初めて神社に祭ってある神様とは何だろうと考えました。そして、おくびにも出せないがアラヒトガミ（現人神）ということが解らなくなったものでした。

その後、私なりに私の神に逢うことができました。神社ででも寺ででも、外国ででも。ギリシャを旅行した時でも、飛行機はクウェートで給油して行きましたが、ペルシャ湾の辺りからここはアラーの神が守ってくださるのだと思い、また、ギリシャの山道の至る所にある箱教会では、キリストの神と思いながら私の神に祈っているのでした。

私は今でも初詣は殆ど欠かしません。

「ひみこさろん」は、女性のページです。ご投稿も歓迎いたします。　（編集部）

開く

大矢十郎選

夢のある絵本でゆっくりと開く　比呂志
留守の間にそっと開いた子の日記　大柏
日記帖開くと軽い嘘がある　諷云児
重い口開き亡母を語る父　たかし
胸襟を開いて友と夜もすがら　旭恒
開戦の大蓋はいつも妻が切り　鉄治
胸襟を開く貴様と俺で良し　忠三
口開けた女に歯科医語りかけ　志洋
新聞を開く日課はありがたし　きみ子
どの部屋を開けても恋の名残りだけ　てる
宅急便開く周りに八つの目　智加恵
正直に心を開けている花火　天涯
開き直るすべを悟ると生きやすい　さと美
開封の手もどかしい娘の便り　辰江
横車　閉会間際に口開く　悟郎
花開くように大人になる娘　倫子
口開く己を守ることばかり　規不風
戻らない猫に障子を開けておく　螢
五指みんな開いて愛を受けとめる　希久子
窓開けて朝の精気をとり入れる　典子
初春の幕は平和の彩で開く　寿恵子
遺言状開けば遺産寄付をせよ　右近
口開けて何をつぶやく鍋の貝　伊津志
愛の矢を放てば開く花の芯　テル
努力した甲斐あり急に運開け　瑞穂
一ページ開いたままで寝てしまい　明水
里帰り娘の口はよう開く　一花
宅配の荷物は孫が開く役　一進
遺言状開いてからは他人めき　鮫虎狼
臍繰りの隠しを開く夫の留守　喜久亭
こっそりと辞書を開いた知らぬ文字　保夫
子の帰省門を大きく開けて待ち　弘朗
開運の兆しか急な配置換え　温子
同病が心開いて助け舟　武治
青春に戻してくれる本開く　ちかし
胸衿を開く男に炎えるもの　白光子
胸襟を開き刃を向けられる　正坊

佳

何してる我が子の部屋が開けられぬ　佳雲
ドアチェーンひとりの城は開けさせぬ　重人
遺言状開くとみんなワルになる　雀踊子
開けゆく世は人情の薄くなり　ハル
まごころへ女の窓が開いている　忠雄

人

やき芋に走る開いたままの本　石舟

地

愛情の門は何時でも開けてある　白峰

天

すぐ心開き味方にだまされる　旋風

軸

開戦へ悲しき終戦あるばかり

鏡

秋元てる選

しみじみと健康のよさ初鏡　秀峰
お鏡も小さくなって老夫婦　道胤
いい笑顔　雲も笑ろてる水鏡　和子
せめてもの笑顔見せたく鏡ふく　幸子
鏡掛け私も齢をとりました　重人
三面鏡　十年前を恋しがり　清水
百円で展望鏡が目を覚ます　新造
ついポーズしたくなるよな三面鏡　智加恵
鏡見てどこのじいさんかと思う　三究
正直な鏡ときどき憎くなる　いわる
鏡には仕合せそうな顔をする　渓声
夢を盛る鏡だきれいに拭いておく　早苗
うっすらと野心が映っている鏡　妻子
鏡からきょう一日が走り出す　よし津
鏡見る心軽い日重たい日　弘朗
言い勝って鏡に寒い影が浮く　諷云児
鏡さんそんなにむきにならないで　ちよ
そこまでは責任もてぬ三面鏡　枯梢
姫鏡　彼氏のことは言うてない　しげお
三面鏡どれか一つに救われる　佳雲
退屈な指で鏡の顔をなで　愛論
名優の鏡は客を向いている　保州

鏡向け悪戯をする好天気　圭　坊
本当の顔は鏡にだけ見せる　たかし
鏡の中で女時間を食べている　雀踊子
整形をしろと鏡がいいたそう　石　舟
子育てが済んで鏡を買い替える　正　敏
稽古場の鏡へバレーシューズ跳ね　朴　竜
適齢期　鏡の前が長くなる　通　彦
踏絵踏むと歪んで見えてくる鏡　雄　々
合せ鏡見知らぬ老いを写し出す　あずき
鏡見て漫画の構想練っている　やすお
長生きの筋で鏡と無沙汰がち　可　住
万華鏡　男も変り身が早い　南　奉
首振ると鏡の顔も真似をする　次　男
試しているように鏡が置いてある　文　子
父を鏡に育って父の背を越えず　緑　良

片思い三面鏡は半開き　寿恵子
水鏡に砕けた亡夫が拾えない　サワ子
わたしの丈に合う姿見にまだ逢えぬ　寿　美
手鏡が笑って亡母と瓜二つ　ひでの
銭湯の鏡に開放感がある　度　人

水鏡スイセンと化す美少年　正　坊
地
よろしくと言えば頷く初鏡　みつ子
天
出稼ぎへ母の鏡を父が借る　明　水
軸
多病息災これが子等への鏡かも

未　来

相馬一花選

子の未来案じ釘打つ第九条　たかし
未来永劫あってはならぬきのこ雲　兼治郎
口下手の語る未来を信じよう　しげお
覗き見る未来へ舌打ちばかりする　雄　々
柿の種蒔いて未来の夢を見る　白　峰
澄んだ目の孫に未来を賭けてみる　鉄　治
雑草のような子が持つ未来像　志　重
過疎の地の未来案じる辻地蔵　博　子
交配交配未来夢見る茄子カボチャ　忠　雄
核のない未来待ってる白い鳩　清　芳
子の未来へ親は嬉しい投資する　サワ子
人間の未来耳打ちした河童　雀踊子
まだ若い未来があるさ二度の職　愛　論
未来図に君のOK入れておく　佳　雲
ジョギングおしんの道へ未来かけ　どんたく
大吉と卦が出て未来花ざかり　道　子
老いらくの恋が未来を明るくし　夢　酔
六道の辻で未来を考える　弘　朗
磨かれた腕に確かな未来あり　進
熟年が未来を憂いて読むマンガ　恭　昌
婿殿はでかい未来像背負わされ　一　乗
此の人と暮らせるだけでいい未来　幸　子

炎の帯をしめて女にある未来　テル
フロンガス来世紀へはあと九年　あやめ
上り窯　未来を染める壺に賭け　和　子
子の未来託して父が敷くレール　高　夫
過去未来　中で煩悩耐えている　敏　夫
白鳥の未来は白いままである　文　子
俺が死ぬ一番近い未来とは　螢
未来図を描き少年脱皮する　正　坊
長い目で見よう未来のある男　秀　峰
精いっぱい生きて未来は考えず　杜　的
桐を植え嫁入り箪笥夢を買う　旭　恒
骨のある奴で未来が楽しみだ　石　舟
初孫の彼氏見届け得るまでは　文
未来への道を駆け出すベビー靴　みつ子
少年の未来に澄んだ空がある　諷云児

一面の画布をはみ出る未来像　結　実
傘寿まで来ると未来は夢の夢　虹　汀
未来でも妻はやっぱり水仕事　蕗　児
来世も添うと言わねば恐ろしい　弘
口笛を吹いたら未来開けそう　彩　子
人

「右向け右」を未来永劫忘れない　義　美
地
八十のまだまだ森の樹を植える　可　住
天
哺育器のこぶしが握っている未来　正　敏
軸
こっそりと二人で作る未来像

初歩教室

題―番組

辻　白渓子

今月の題「番組」は、テレビ番組、運動会プログラムなどがあり、楽しく拝見しましたが、中には意味が難解なものもあって苦労しました。発想の展開は、秀句を生み出すのには必要ですが、ひとりよがりの句にならぬよう注意したいものです。

番組の穴埋め急ぐ楽屋裏　芳水
（番組の穴埋めスターに歌わせる）

欠席の友へ贈ったプログラム　(糊)隆
（欠席の友へも送るプログラム）

番組を握り我が娘の初舞台　章久
（番組に孫が載ってる初舞台）

童心で動画番組孫と見る　金吾
（番組の漫画へ孫と並ばされ）

ペンと紙持ってテレビの料理番　志重
（料理番組のとおり材料仕入れて来）

番組が進み横綱取りこぼす　おさむ
（横綱が負け番組が全部済み）

新聞の先ず番組に目を通し　秀香
（番組を先に新聞目を通し）

番組が一致したのは大相撲　静子
（番組へ意見が合うのは相撲だけ）

番組変更予約録画のばからしさ　洋
（予約した録画が変っていて慌て）

ミステリー見たく番組選っている　美代子
（ミステリーの番組へ夫婦意見合う）

浮き沈み此れも人世の番組か　高栄
（番組に似て人生の浮き沈み）

番組に乗らぬとび入りそれも良い　一枝
（飛入りの競技が沸かすプログラム）

懐メロの歌手は皆さん正統派　円女
（ナツメロを綴って番組喜ばせ）

裏番組ときどき覗くふたごころ　時弘
（裏番組へときどき替えているドラマ）

温暖化地球番組狂わせる　和枝
（番組が狂い球場雨になる）

番組にまったく無かった馬鹿騒ぎ　すみれ
（筋書にない番組へ笑わされ）

番組の合間へコーヒ妻が入れ　春風
（コーヒーを入れ番組の余韻追う）

プログラム通り進まぬ責めをとる　敬
（番組の変更タレント狩り出され）

生放送番組地震でいま揺れる　保夫
（番組のニュース地震の事にふれ）

蟹江さんどの番組も底光り　しづ子
（番組の脇役光る蟹江さん）

テレビ番組ドラマで貰い泣きします　志華子
（番組が涙を誘うているドラマ）

番組に合わせ仕事も精を出し　富恵
（番組に合わせて風呂を済ませとく）

番組にないドラマ織りつつ老の坂　ふさ子
（番組のドラマに似ている老いの坂）

初舞台の番組みなに見せ歩き　絢子
（プログラムみんなに配る初舞台）

番組も時代劇だけ馬が合い　タミ
（番組へ意見がそろう時代劇）

番組を調べ仕事の順序決め　侑里
（番組に合わせ仕事の手順決め）

京ふたりの番組悔やし見落す日　姫女
（京ふたりの番組楽しい朝にする）

主将の引くくじ番組の運不運　一乗
（くじ番組悪い相手を引き当てる）

番組の違うチャンネル奪い合い　幟
（チャンネルを奪い合いして双児揉め）

朝刊のマンガ番組みて走る　(松)隆
（マンガ番組から朝刊は目を通し）

馬鹿騒ぎの番組好きな大学者　ようじ
（馬鹿騒ぎの番組とても好きな父）

英才教育めざしテレビもＮＨＫ　みね
（教育テレビへそっぽ向く子が居て困る）

一目見て番組丸舌む孫が居る　好花
（筋書が分かる番組だと思う）
番組に組れた様うな日が終り　民子
（番組に似て平凡な日を過す）
番組は面白くないもの先に出し　呼風
（番組の初めは興味ない競技）
売れっ子は各番組に顔を見せ　ますみ
（番組へひっぱりだこというスター）
番組へひと花添える女性アナ　はる子
（番組の人気を攫う女性アナ）
番組をニュースに変えて締まる顔　ちず子
（番組のニュースへ眼鏡掛け直す）
クイズ番組老化予防にしています　和子
（番組のクイズ老化の役に立ち）
日の暮れを待って番組落着かず　静江
（ナイターの番組待っているファン）
番組に合わせて決めるスケジュール　義
（番組に合わせ出掛ける市場籠）
日曜の番組子等が予約する　㈥美恵子
（日曜の番組いつも子が決める）
深夜番組夢の枕で聞いている　彩子
（深夜番組いつも終りは見ていない）
番組のどんじりにあるわたしの名　友子
（番組の最後になっている出番）
チャンバラの番組あって酒うまし　繁男
（時代劇の番組うまい酒になり）

番組ならＮＨＫと母は賞め　高雄
（ＮＨＫしか番組を母は見ず）
番組の主役も最後まで死なぬ　芙美子
（番組の主役最後へ生き残り）
蟹ニュース夢かきたてる山陰路　君江
（番組の蟹山陰に実家持ち）
血圧の異状で番組ままならず　軒太楼
（血圧に悪い番組だど思う）
番組のドラマの嘘に泣かされる　幸枝
（番組のドラマへ涙もろい母）
番組は先ず大相撲の時間見る　昭治
（番組の相撲に間に合うように去に）
番組で今日の予定がきまります　喜子
（番組に合わせ予定を決める午後）
番組の見せ場が好きなコマーシャル　忠禄
（番組の見せ場へ邪魔なコマーシャル）
運動会孫プログラム持って帰って来る　みつえ
（孫の出る番組がある運動会）
延々と番組続く視聴率　清柳
（視聴率あがり黄門続けられ）
番組は中止かスイッチ入れる雨　春子
（ナイターが中止でスイッチ切っておく）
妻ぼける番組ですか放っとけず　隆雄
（呆け防止出来る番組だと思う）
番組に合わせやんちゃも帰宅する　方子
（漫画番組きっちり子供戻って来）

番組を校歌で締める同窓会　太一郎
（番組の最後は校歌になった式）
ローカルの番組にあるあたたかさ　杏村
（秘湯めぐる番組茶の間なごませる）
人生の番組なぜか狂い出し　伊都子
（人生の番組離婚をして狂い）
お父さんの見る番組を観ています　富喜子
（父さんが叱る番組だと思う）
ＣＭへ番組パッと変えられる　春枝
（ＣＭへ番組変って腹が立ち）
番組で覚えた料理膳にのせ　㈢美恵子
（料理番組の味とは知らずほめてくれ）
嫁と見る番組ドラマの中に溶け　スミエ
（嫁と見る番組ドラマへ意見合う）
特集の番組足を釘づけし　伽名子
（特集の番組テレビに齧りつく）
着想と表現が巧みな句
番組に合わせて家事が動き出す　和枝
同じ番組見てる二階も一階も　ようじ
私の句
深夜番組までまだ早い仕舞風呂　白渓子

◇

題「**栄転**」**1月15日締切**（3月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻　白渓子

本社 十二月句会

十二月七日(金)午後五時半
メンズファッションセンター

朝からイラクの人質全員解放というホットニュースが流れ、日本中が安堵の胸をなでおろした。

暖冬で師走ムードに遠い中、八十三名出席の本年最後の句会になった。司会が一月からの川柳塔の行事を順にあげ、今年のしめくくりとした。新年から司会は奏月さんになる。

おはなしは板尾岳人氏、最近興味を持ったことや、感じたことでおもしろく聞いた。

年末の句会のせいか初出席はなし。

月間賞は林はつ絵さんが獲得。　(ふ)

(司会—天笑・岳人)(記録—天笑・いわる)
(受付—寿美子・冬葉)

出席者—諷云児・笛生・白渓子・萬的・杜的・芳子・〆女・二南・太茂津・小林英子・温子・たず子・結実・利武・柳影・紫香・英一・幸・寿美・雅文・千秀・しげお・章久・金太・光代・寿美子・冬葉・はつ絵・いわる・みつ子・武庫坊・年代・悟郎・ただし・公一・勝晴・狸村・凡九郎・眉水・勝美・シマ子・トメ子・達子・満津子・典子・三男・敏・福本英子・喜風・弥生・智子・洋敏・重人・恭昌・規不風・友熙・憲太郎・房子・文・白洋岳人・東雲・奏月・美房・吸江・文秋・頂留子・愛論・半蔵門・透太・八斗酥・小路・鬼遊・栞・楓楽・柳宏子・庸佑・度・天笑・月子・磯子・薫風・寿子

席題「ばたばた」　山本 憲太郎 選

ばたばたと人質解放決り出し　公一
風ヒュルヒュル戸はばたばたと我が家の譜　章久
ばたばたとするから余計疑われ　庸佑
みな帰りもうばたばたを止めた妻　月子
売出しののぼりばたばた冬木立　千秀
儲からん仕事にばたばたするばかり　利武
ばたばたと来ては喋ってすぐ帰り　光代
ばたばたと逃げた後から来た巡査　紫香
ばたばたと儚く暑い年でした　英一
吉報がばたばた廊下駆けてくる　寿美
ばたばたと鏡を拭いて出るパート　〆女
ばたばたと動くと齢より若く見え　武庫坊
ばたばたとしてはるわりに小金ため　房子
ばたばたとせねば出て来ぬ良い思案　二南
父さんの仕事ばたばた空まわり　文
酸性雨ばたばたしてもはじまらぬ　杜的
ばたばたと倒れて主役汗も出ず　美房
ばたばたと貧乏神が追いかける　達子
ばたばたと計画だけが先走り　温子
現役がばたばたと逝く寒い風　金太
ばたばたとしてる割には貯まらない　透太
ばたばたと飯時に来て上げぬ腰　八斗酥
また一つばたばたしては齢をとる　磯子
ばたばたとエプロン外す時がない　智子
ばたばたと暮し心がひからびる　楓楽
ばたばたとジングルベルに追われだす　三男
ばたばたと格好だけは一人前　年代
ばたばたとジングルベルが背なを押す(小)　英子
どたん場でばたばたしてもはじまらぬ　勝晴
ばたばたと娘　婚家へすぐ帰り　シマ子
安心はばたばたしてる隠居部屋　典子
ばたばたと程よくこなすパート主婦　利武
ばたばたと師走の文字に追われだす　磯子
年の瀬のばたばたわらう膝の猫　結実
ばたばたとするから妻に叱られる　月子
ばたばたと動ける内が花らしい　二南
ばたばたとトイレ混んでるボーナス日　吸江
ばたばたとよい娘は早く嫁ぎます　鬼遊
秀
神様もばたばたしてる歳の暮れ　しげお
軸
定年にばたばた引継ぐ年の暮れ　憲太郎

兼題「無　理」　河内 月子 選

ビーナスと妻を比べるのは無理だ　正坊
子の花を咲かす無理なら聞きましょう　ちかし
無理だとは頼む私も知っている　(新)正子
無理やりにこっちを向かせようとする　(松)文子

天高く妻がスリムになると言う　美房
嬉しいことがあるので少し無理をする　智子
無理でしょと言われてからの励みよう　頂留子
無理するなむりをするなと亡父の声　度
無理は承知やっぱり此れもそうだっか　凡九郎
神さまも無理な願いと知っている　鬼遊
美しく写せと妻は言うけれど　紫香
コスモスが無理や無理やとゆれている　杜的
胃袋が無理はやめろと言っている　奏月
男一匹無理は承知で引き受ける　度
年金へどう力んでも無理な金　〆女
無理のない花の素顔が美しい　元江
有刺鉄線無理を承知で逢いに行く　白洋
無理言うてもろて孝行しています　結実
無理強いをチャランポランにしておこう　太茂津
ふりかかる火の粉をじっと被れるか　はつ絵
子供だけ欲しいと未婚無理を言う　文
たなぼたの旨い話に無理がある　狸村
コメ買えと無理強いをする国がある　敏
神様にどうでも無理を頼まねば　寿美子
雑兵は無理な戦と知っている　保州
無理言って愛の深さを模索する　雀踊子
あの人の無理が私の胃に溜る　芳子
のっけから無理を承知で借りに行く　勝晴
憎めない顔して無理を言いに来る　三男
親心無理と知りつつ百度石　芳子
無理しいなあんた来年還暦や　敏
無理せずに上手に手抜きしています　多賀子
佳

忘れ上手になれと無理なことを言う　幸
無理言える絆大事にしています　寿美
無理のないように空気を入れている　智子
無理してる訳は財布が知っている　重人
もう父は無理も言わずに小さく老い　たず子
人
無理はせずこの道だけは続けます　杜的
地
その中に無理な願いが一つある　いわゑ
天
円満の秘訣は無理のない歩幅　八斗酥
軸
もう無理を言うてくれない息子達　月子

兼題「からっぽ」　塩満　敏選

からっぽの財布も温い新世界　仙吉
からっぽにしたのに溜る涙壺　(松)文子
太郎が捨てたからっぽの玉手箱　雀踊子
炊飯器からっぽにする子の育ち　正坊
からっぽの財布と昼寝からさめる　雀踊子
からっぽになったら空を飛べるかな　元江
預金帳　空っぽにして娘が嫁ぐ　寿美
スプレー缶からっぽの始末出る苦情　勝美
ふところはからっぽ父のつけで飲む　あいき
からっぽの財布へ連休やってくる　諷云児
からっぽの胃に注ぐから美味い酒　金太
からっぽの銚子幹事をよびすてる　しげお
頭からっぽにして今日は飲んでやる　小路
からっぽのボトル振ったりのぞいたり　月子
とっときのボトルからっぽに友帰る　庸佑
戎橋もまれるだけの空財布　〆女
からっぽの財布は妻に持たさない　重人
忘年会　腹空っぽにして行こう　恭昌
からっぽ同士恐いもの無く手を結ぶ　光代
いづもやの前で空腹目を外らす　吸江
からっぽになりたくなって森へ行く　智子
女湯をからっぽにした「君の名は」　ただし
からっぽで埃も出ない知恵袋　諷云児
からっぽの魚籠のぞかれる春の川　紫香
てんのじ村からっぽでっせ直木賞　憲太郎
何時からか香水瓶もからっぽに　みつ子
からっぽの瓶潮騒を恋しがる　奏月
からっぽの詩嚢に乾くインク壺　たず子
あと一押し空のコーヒーが焦れている　章久
水ガメをからっぽにして待っています　(福)英子

平成二年度本社句会皆出席者

阿萬萬的・川島諷云児・松川杜的・川原章久・辻白渓子・小林英子・西口いわゑ
清水利武・野村太茂津・町田達子・本間満津子・神夏磯典子・春城武庫坊・奥田
みつ子・上田柳影・山添眉水・北山悟郎
西田柳宏子・玉置重人・芳地狸村・河内
月子・稲葉冬葉・松原寿子・山本規不風
福本英子・板尾岳人・山本憲太郎・田中
透太・藤田頂留子・河井庸佑・金井文秋
（31名）

からっぽの容器大きい方がよい　透太
学歴もおまへん脳もからっぽです　半蔵門

佳

空っぽの頭で蟻の列にいる　八斗酥
からっぽのコップを満たす愛そそぐ　たず子
からっぽの心で童謡口ずさむ　楓楽
からっぽの乳房で孫をあやす祖母　愛論
からっぽの胃腸へカメラ飲まされる　千秀

人

病室はからっぽ昨日退院されました　眉水

地

逆立ちをしてもからっぽはからっぽ　度

天

からっぽの網も明日へ巻き上げる　美房

軸

その内に日本からっぽにされますぞ　敏

兼題「うるさい」　玉置重人選

人の目はうるさすぎますお月さま　結実
九官鳥少し黙っていておくれ　(福)英子
うるさいと時どき猫の耳動く　紫香
博識がちょっとうるさい蔵書印　正坊
うるさいと思うと小犬離れない　(小)英子
小うるさい妻に病まれてから慌て　雅文
サングラス掛けた男が礼に来る　鬼遊
住めば都うるさい街が落ち着ける　年代
うるさいことあとにまわしたツケが来る　白洋
ウォークマン美人の耳がうるそおす　仙吉
親よりもうるさい伯母がひとりいる　庸佑
夫婦箸からんでうるさいこともある　多賀子
雑兵がうるさい事を言うてくる　柳影
うるさいと思った意見かみしめる　元江
キャッシュカードはうるさくミスを指摘する　保州
しみじみといびきうるさい倦怠期　愛論
仕来たりにちょっとうるさい母である　諷云児
子育ての妻のうるさい声がする　雀踊子
紅白のテレビを消して本を読み　鬼遊
前列にうるさい客が居て困る　狸村
米買えとうるさい国がございます　敏
うるさくて出刃包丁を研いでいる　岳人
くつべらがうるさい朝を聞きながし　度
うるさいが来ないと気になる午後のお茶　光代
堂々と軍歌流してゆく右翼　利武
字余りの言葉うるさいバスガイド　シマ子
小うるさい人を味方につけておく　奏月
通の舌　味にうるさいことを言う　勝美
何遍も同んなじことを言いにくる　透太
長い愚痴さんまがすこし焦げくさい　柳影
あれこれとうるさい妻を頼り切り　千秀
門限は少しうるさいほうがよい　智子

佳

ネクタイを妻がうるさいので替える　典子
まだ母がこうるさいのでほっとする　天笑
自信ある腕がうるさい人にする　庸佑
牽制球がすこしうるさくなってくる　幸
うるさくは言わない父の背が丸い　たず子

人

息抜きをするとポケットベルが鳴る　美房

恩人へ犬がうるさく吠えたてる　洋敏

天

ほんとうの味方うるさいアドバイス　太茂津

軸

すぐ横にウォークマンがいるラッシュ　重人

兼題「疲れる」　金井文秋選

こころよい疲れ心経書き上げる　典子
茶をたてて心の疲れとっている　狸村
ロボットも金属疲労で休暇とる　半蔵門
バーゲンで疲れて食事は手抜きです　たず子
好きなことさすと疲れが治るらし　月子
手話会話疲れを知らぬ目が光る　萬的
女王蜂に優しく疲れほぐされる　友熙

平成二年月間賞杯永久保持者

西出楓楽さんに決まる

平成二年本社句会における月間賞は
1月＝度　2月＝楓楽　3月＝楓楽
4月＝薫風　5月＝憲太郎　6月＝柳影
7月＝智子　8月＝白洋　9月＝いわる、
10月＝達子　11月＝文　12月＝はつ絵
2月と3月の2回獲得の楓楽さんが、平成二年月間賞杯永久保持者に決定。
賞杯授与は1月句会で行います。

海に入るまでに疲れた川の水　(福)英子
芸能人疲れが売れてるバロメーター　悟郎
暖かい師走地球も疲れてる　金太
冷戦に疲れて妻に妥協する　諷云児
ハネムーン発たせ疲れと佗びしさと　寿美
年寄りの守りに疲れるスベリ台　鬼遊
適当に捌き疲れる社長秘書　(小)英子
気疲れをどっさり置いて姑が去ぬ　寿美
口紅を濃い目に疲れかくしとく　弥生
夜遊びに疲れて帰る寒い部屋　諷云児
バスツアー疲れているのは運転手　利武
ヒコウキが疲れてきたと言っている　英一
つくり笑いへ少し疲れた姫鏡　幸
ビール一本あれば飛んでく疲れです　三男
献盃に疲れの溜る金屏風　憲太郎
快い疲れにしとく孫の守り　敏
行く前から疲れが出そう妻の旅　典子
地球病む水も空気も疲れ果て　みつ子
アイデアが湧くと疲れる暇がない　はつ絵
ライバルに疲れた素振りさえ見せず　庸佑
ドリンク剤こっそり飲んで靴をはく　寿美子
話題ない客と座って疲れきる　紫香
温泉巡りつかれは家の風呂で取り　満津子
疲れたと死んでも言わぬ母だろう　度
佳
お疲れさまその一言に救われる　眉水
ぬぎすてて帯がとぐろを巻く疲れ　たず子
疲れ知らぬ青春だった古日記　白洋
散髪屋から疲れ落とした顔で出る　笛生
細ごまと気の付く女で疲れます　理瑛
人
お疲れさんと汗のシャツ洗う　〆女
地
来世も君と一緒は疲れます　冬葉
天
疲れ見せず夕陽輝きながら落ち　シマ子
軸
疲れたつかれたと夫の腑甲斐なさ　文秋

兼題「腹」　橘高薫風選

何はさて腹ごしらえをして出かけ　智子
腹の中はそうでもないと言いたそう　敬
子には子の親には親の腹積もり　ちかし
走らない馬よお前は満腹か　元江
汚い腹を見せたがるので困ります　(福)英子
そう言えば新婦のお腹それらしい　しげお
子を生んだ力が腹にまだ残り　シマ子
ビール腹おとこが孕むわけでない　鬼遊
腹ポンとたたく男について行く　笛生
同窓会みんな似て来た腹回り　道胤
布袋さん顔もおなかも笑ろてはる　杜的
たこ焼の腹で会議をつづけさせ　白洋
腹違いの妹に逢う十二月　正坊
腹割って話せる友の掌は温い　喜風
指の腹でやさしく洗う老母の髪　みつ子
腹立てて見てもゲリラは減りもせず　柳宏子
アメリカへ夫婦で腹を借りに行く　東雲
国連ででっかい腹のさぐり合い　美房
ロケットに乗る蛙の腹が真白い　杜的
米の味忘れたニッポン人の腹　雀踊子
信楽の狸の腹にあるコント　雀踊子
腹割った話と通訳にも分かり　白渓子
腹の虫愚かなことを考える　螢
笛吹けば腹のないのから踊る　弥生
腹割って話せば悩むほどでなし　典子
手に辞表腹すえて行く社長室　頂留子
風見鶏腹に一物ある男　芳子
腹に一物愛想笑いの顔に浮く　元江
煩悩を出してさっぱり空腹感　文
腹の底から笑ったことのない達磨　保州
空腹を満たしてくれたのは聖書　典子
いい奥さんと言われて腹の立つ日あり　小路
佳
腹の立つ日はお線香を立ててます　友熙
腹いっぱい満たして孝行忘れてる　弥生
腹芸が下手ではおとどにはなれぬ　三男
腹立てて帰っていったジャンプ傘　しげお
腹心が押し立ててきたむしろ旗　正坊
人
空腹を敵にさとられてはならぬ　幸
地
ありがたいことでお腹が空いてくる　智子
天
妻子あり踏み絵の前で腹決まる　はつ絵
軸
貧相な臍がちょこんと十二月　薫風

（清記—楓楽）

謹賀新年

平成三年 元旦

川柳塔わかやま吟社

新事務局を左記に移しました。
倍旧のご愛顧を賜りますよう
お願い申し上げます。

〒641 和歌山市紀三井寺一一一—二
牛尾緑良方
電話 〇七三四—四六—二八五五

頌春

平成三年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

満十周年記念大会のご支援ありがとうございました
ことしもご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます

土橋　螢
森山　盛桜
中原　汲香
中原　みさ子
乾　喜与志
土橋　はるお
田村　きみ子
津村　八重子
小谷　美っ千
中原　諷人

石尾かつ乃
乾　隆風
伊吹富恵
今本早苗
小倉利男
大角正道
大角幸代（旧姓　中村）
太田幸枝
黒田くに子
鈴木芙美
徳岡本丸
西浦小鹿
西川和子

安井博子
横山房子
吉田孔美子
木下　覚
鈴木公弘
中原夕峰
中原敦子
山根八重
五百川皓司
谷口百合子
中澤正恵
森　明美
山根しげる
ほか会員一同

☆ 事務局　〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279　中原諷人方
電話（0857）84－2100

新年おめでとうございます

三幸川柳教室一同

事務局　〒641 和歌山市東高松３丁目８－12

菅井智水庵

あけまして

おめでとうございます

尼崎

いくしま川柳会

例会　毎月第一金曜日午後1時

サンシビック尼崎三階

（阪神尼崎駅西南三分）

尼崎

おはま川柳会

例会　毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五－八

尾浜公民館

もくせい川柳会

橘　高　薫　風
黒　川　紫　香
安　藤　寿美子
一　瀬　福　一
上　田　登志実
江　口　明　光
小　畑　よし子
栗　原　富　子
滝　北　博　史
田　中　正　坊
玉　置　英　子
辻　川　慶　子
額　田　明　吉
春　城　武庫坊
星　野　登代子
桝　本　蕗　児
満　仲　きく子
三　宅　つえ子
村　上　とく子

定例句会　毎月第３月曜日　豊中市立中央公民館

新年おめでとうございます　1991年

久世川柳クラブ

牧野秀香
後安ふさえ
後安江山
富坂志重
矢野山人
杉本伊久栄
伏見すみれ
三村美恵子
森田甫正
池田半仙
二宗吟平

謹んで新年のご祝詞を申しあげます

川柳塔とっとり

池本山人
岩田秀和
岩田輪多郎
岩原喬水
上田俊路
小林由多香
武田帆雀
武田粗粒
谷口侑里
中島一歩
西尾呼風
西原艶子
西尾砂山花
早瀬友夫
春木圭一郎
福田多可志
前田一枝
美田旋風
山沢新風
両川洋々

おめでとうございます

川柳塔まつえ

小西雄々　鳥取県溝口町溝口七五七
久家代仕男　平田市灘分町一三九〇
園山多賀子　出雲市東林木町九三五
吉岡きみえ　出雲市松寄下町二八四
金村青湖　出雲市大津町大曲り二〇九七
松本文子　島根県八束郡宍道町一区
原　煩悩児　松江市朝酌町八三二一一
門脇静恵　松江市上乃木町一七六—一
安食友子　松江市本郷町四—二五
浦邊静江　松江市南平台二—二五
福間芳枝　松江市東忌部町二二四二
佐野木みえ　松江市北堀町九三
竹内寿美子　松江市国屋町三八一
原　長三　松江市大正町四一八
舟木与根一　松江市西忌部町六一八—一
恒松叮紅　松江市雑賀町一六八六
柳楽鶴丸　松江市菅田町二四—九

平成三年　頌春

川柳クラブ　**わたの花**

高杉鬼遊　平川幸枝
生島ますみ　冨士松しげる
岩倉能子　松葉君江
大内朝子　松本芙美子
小澤泰成　松本みき子
片上英一　水谷その
川崎友甫　宮崎弘直
杉村龍襄　宮崎シマ子
高橋初子　籾山　隆
田中トシエ　安永暁子
西沢一雄　山下美津留
二瓶道子　吉村一風
服部春子　鷲見　章

初春のお慶びを申し上げます

平成三年

川柳塔唐津支部

田口虹汀
仁部四郎
山口高明
筒井朴竜
久保正敏
野田旭恒
野崎ハル
中村弘
山下剛司
池田遊女
岩崎實
山門幸夫
山門タミ

おめでとうございます

熊本川柳会

黒田緑
有働仙芳
鶴田謹爾
北川一進
高野宵草
永田俊子
宇野昭代
大川幸子
岩切康子

あけましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例　会　毎月第２月曜日午後１時　西宮中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西５分）

事務局及び投句先
〒663 西宮市高木東町９－４　西口いわゑ

黒川紫香
秋元てる
上田佳秋
奥田みつ子
奥山美智子
門谷たず子
西口いわゑ
林はつ絵

春城年代
春城武庫坊
藤村〆女
丸山よし津
山片紀雄
山崎君子
吉田笑女

明けましておめでとうございます

川柳塔社常任理事会

主幹 西尾栞　小出智子

理事長 橘高薫風　塩満敏

副主幹 黒川紫香　高杉鬼遊

野村太茂津　田中正坊

副理事長 西田柳宏子　玉置重人

阿萬萬的　辻白渓子

常任理事 板尾岳人　西出楓楽

榎本吐来　春城武庫坊

奥田みつ子　吐田公一

神谷凡九郎　藤井一二三

河内天笑　宮口笛生

河内月子　宮園射月芳

川島諷云児　吉岡美房

小池しげお

柳壇

毎月25日締切厳守　集録・編集部

川柳岩出　小倉　アサ報

抜擢へ陰で引っ張るコネの糸　瑞穂
消費税裏の裏から笑い声　忠雄
裏話いつか表を歩き出す　和子
裏道を避けて通った長い坂　春子
毎日を実のある日々とつとめたい　幸子
故里に置いてある子に引っ張られ　愛子
孫に手を引っ張られ行くオモチャ店　正義
裏表ない暮らしこそ愉しいね　千代子
対局に裏手この一手勝負あり　正直
話し合い引っ張り合って折れ合わず　英子
柿の実が熟れて見上げる白い雲　美枝子
引っ張った縁を頼られ引き受ける　義美
ひと筋の道にもあった裏通り　アサ
昇進の足を引っ張る陰の友　喜市
木の実にも我が一生を知って落ち　綾子
裏腹な言葉でかくす真実を　昌子
忘られた柿の実ぶらり冬を待つ　精子
袖をひく泣く子の力に嘘がない　与呂志

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

骨太い十指に父の詩がある　栄美子
味のある魚はやっぱり骨っぽい　武雄
主役にはなれぬが骨のある案山子　保州
拳骨を知らぬ手毬はよく飛ばぬ　千寿子
骨折って次元が違う目に出合う　稚代
時代劇がかった小言など聞かぬ　高夫
時代劇茶の間の母のよりどころ　恭子
幕降りて未だ酔うている殺陣田村　柳宏子
時代劇身振り手振りで直ぐ真似る　二南
花道に消えるしぐさで決まる劇　好笑
僕の手に青虫死んだ振りをする　忠雄
方便に騙されてみる日の打算　太茂津
方便で花屋は花を売り捌く　輝子
方便へ力を貸さぬ昼の月　紀久子
便宜的手だてですので悪しからず　忠
方便を嘘で包んだオブラート　呑天
方便の嘘が膨らみ攻めてくる　光代
方便の嘘　感謝して病んでいる　英子
夢を掘る手前で忍の糸つむぐ　寿子
掘り下げた道に微塵の悔いも無く　アサ
掘るほどに温さがしみる畑の土　公子
掘り上げて磨いて光る石である　克子
責められぬ自分が掘った落し穴　正博
芋掘りに目の色変える都会っ子　瑞穂
掘り当てた温泉村の活性化　凡太
主食にした過去ありありと芋を掘る　三千代
二坪の畑掘り返し四季を追う　紀美女
掘りつくし閉山となる鉱山の月　金魚
夢を掘り当てて明日を見失う　緑良

三幸川柳教室　桜井　千秀報

修羅あまた沈めて堀は凪いでいる　保州
身の上をしみじみ聞いたこぼれ萩　千秀
大手門鳩は豪華な宿を借り　(福)美子
積んだゴミぐずな鴉と番をする　章子
吹き溜まり積もった愚痴の泣き笑い　玉枝
談合の見積もり額に裏がある　かなめ
生き延びる明日へ夢を積み立てる　みね
下積みの忍耐を知る舞扇　孝子
リハビリを積んで明日の靴が鳴る　当代
薬剤が徐々に蓄積する怖さ　嘉寿子
ゆりかごに遠い日の夢積んだまま　(前)美子
善積んで心の軌道補修する　三千子
見積もりで又遠くなるマイホーム　公子
宝石も砂利も積んでる夫婦船　正雄
内証です積み立て金が今日満期　千枝子
これからの生きる足場を堅く積む　好笑
試練積むたびに私を脱皮する　精子
宝塔を積む汗だから拭わない　桂香
年季積む腕が妥協を許さない　高夫
経験を積んだ手元は狂わない　和子
満載の車誤算も積んでいる　親蹄
稲穂より案山子が好きな群雀　(松)幸子
米作る農家も朝はパンを食べ　鉄治
米粒を拾って母の回顧録　敬子
幸せをこぼさぬように米を研ぎ　育子
米びつが暮らしのリズム知っている　朱夏
一椀の粥を待ってる遠い国　茜
白米と別れた糠の虚脱感　博幸
老農のどうあろうとも米作り　(中)幸子

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

ため息を溶かしてくれる友の酒　隆

街は酸欠短い早い息をする　度
一息をつく間に秋の陽が沈む　シマ子
暖かい笑み野仏に通う息　柳伸
いい寝顔わんぱくぶりがウソみたい　頂留子
八起き目でやっとみつけた上り坂　とみを
うまい酒苦い酒あり上り坂　欣之
人徳のうしろ姿は透明だ　夕花
人徳の一つに頭禿げている　弘直
人徳が松葉がににも慌てない　勝美
人徳の不足を妻が埋めてくれ　一風
人徳のメッキあちこち剝げてくる　英一
人徳が帰れば猫を抱いている　美幸
人徳がうかがえそうな菊の出来　春子
老兵の怖れ軍靴のリズム急　章
五十年リズム崩さぬ夫婦独楽　柳宏子
旋律の高さに琴の庭がある　元紀
良妻のリズムを乱す雄の蝶　朝子
上り坂貧乏耐えた妻が居る　恒明
あげまんの妻あり家運上り坂　雅士
金釘流の母のはがきは温かい　甘平
忘れてた人のはがきに偲ぶ秋　覚然坊
リズムする思いは空に輪を描く　しんじ

西宮北口川柳会　林はつ絵報

あの雲の向こうに亡母の貌がある　正坊
眼を閉じて開いて秋の天　秋の雲　杜的
雲は才女で挽歌のこころ持っている　元紀
木犀が匂い話の輪にはいる　静子
一片の雲秋天に見つからず　きよ子
無為無策とぼとぼ秋の雲を追う　佳秋
ベランダに降りて来そうな鰯雲　いわる

反抗期　家族の輪から一人抜け　江美
車座で仲間意識が盛り上がる　て る
知恵の輪に核がからんで外れない　武庫坊
輪の中のピエロになって生き延びる　みつ子
雨宿り女はおっとりして居れず　トミエ
おっとりと構え出世に遠くいる　諷云児
諦めてピエロの役に徹し切る　香子
明治生れ置いてけぼりを諦める　春蘭
諦めてからは憎々しい写真　二南
あきらめの早い妻ですよく眠る　芳子
止まり木で諦め節を唄い馴れ　哲夫
野良犬の自由を諦めてはいない　宣子
ネックレス冷えて逢瀬を諦める　正一
のし袋ご挨拶と書いて出す　保蔵
またもとの過疎にかえして祭済む　〆女
大声で呼ばれ嬉しい事を聞く　白渓子
ありがたい話お辞儀をするばかり　美智子
聞き上手　余分なことを喋らせる　園歩
町になり市になり故郷消えて行く　よし津
ひそやかに風が女を押して行く　富喜子
幸せに夫の爪を切っている　英子
落し蓋我慢がまんと言っている　はつ絵
笠雲の富士へ流れる茶摘歌　紫香

京都塔の会　松川杜的報

Sの字をたどれば人生おもしろい　年代
シングルを謳歌しているイヤリング　福子
掛け軸の柿が熟れてる寒い部屋　百合子
掛軸の吊す位置ないうさぎ小屋　花代子
片足を軸にターンのワルツの夜　圭坊
年金を軸に回っている家計　芳子

一幅の軸へ風鎮の思いやり　求芽
踏み越して母の教えに遠くいる　葉子
妻子あり今日も踏絵の街をゆく　礫
踏まれても雑草意気で明日を生き　武庫坊
十字架を踏むここちして左遷の地　紫香
どぶ板を踏むと一葉詩の世界　英子
落葉ふんで父が迎えに来そうなり　麗水
頂点の椅子にも作法ある筈だ　はつ絵
正座する作法は苦手と言う婦警　白渓子
三つ指は要らぬが作法ちと欲しい　杜的
宅急便に忘れた句を懐かしみ　達子
長い長い戦争だった母の墓　〆女
がんばってるわねえと関心持っていず　水客
洋食の作法を習いに行くホテル　栄

佳句地十選（前月号から）

遠山可住選

切り捨てた半分味方だったかも　森子
どうみてもフセインのヒゲ気に食わぬ　静風
いちにちのいのちぼやっと昏れてゆく　鬼遊
勝つために愚かなことを考える　螢
赤とんぼ石の寝釈迦につきまとう　作二郎
私をなくした思い爪染める　純子
飼い主が悪くて犬が憎まれる　年代
喪があけておいしいものが欲しくなり　由多香
花博の蝶の行方が気にかかる　修水
わたしから話題の枯れていく怖さ　隆

掛軸に遺訓が生きているのれん　ただし
お茶室を出ればお作法もう忘れ　美穂
逼塞はしても作法は小笠原　倫子
客として作法通りの茶を招ばれ　飛鳥
足踏みが無駄でなかった立志伝　正坊

川柳ささやま社　遠山　可住報

夢のままいたくて聞かぬ種明かし　純子
礼拝へ仏の顔の温かさ　恵美
もう一度足音欲しい松葉杖　美智子
一歩前つくろう見栄の無駄を買う　貞子
骨拾う箸こもごもの音がする　とみ子
顔見れば説得力が欠けてくる　靖子
前向きが下手で無心を言いそこね　ヒサ子
前向きに生きる笑顔へ陽がはじく　和子
真実は一つどの音にも染めぬ　つや子
二の舞はさせぬ門出をしかと説く　百合子
前編で終りたくない彩を溶く　冨美
先生と呼ばれて議員風吹かし　素水
性善説あざ笑ってる無人店　テル
拝殿の前で邪心がまだとれぬ　越山
先頭を走る孤独な男の背　文平
説明はいらぬとにかくピカソです　可住

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ぎりぎりに横車押し調子づく　朗子
ぎりぎりにわいた思案に助けられ　ゆき
掘り起すとき土匂い汗におう　ふみ
祖父に似た次郎がきっと家起こす　より子
嫁ぐ娘へせめて性格だけ譲る　八重子
譲るには条件があるのみますか　松子
そろっと譲るほそく笑った亡母の鈴　てい子
子に譲る使い古した知恵袋　恵子
金遁雲ゆずられ釈迦に会いに行く　寿々子
譲った物返せと老いの笑いもの　瑞枝
譲られた命に生きて若葉見る　登栄
譲る犬へ最後の乳をたっぷりと　亜弥
子や孫にきれいな水を譲りたい　玲子
あれもこれもゆずれば軽い旅の靴　冨美子
ゆずられた梯子なかなかのぼれない　晶子
譲られた壺に朝夕洗われる　田鶴
譲られた花の名前は忘れない　荒介
たらい回しの花なら譲ってはいらぬ　千代
賑やかな宴になった七回忌　花子
宴最中幸せの木をゆさぶりに　千春
父母に似たる宴の花筵　正子
宴果てて星になりたい二人です　やえ
命ある限り続けていく宴　日枝子

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

法要に明治大正の数が減る　いわお
故里は秋も最中と便り来る　澄子
山という字は三画と子に教え　六浦
一生を走りつづけた影法師　昌子
しんがりを走る我が子の写真とり　義嗣
敬老会　他人の愚痴も聞いてやる　敏之
乱伐に山の怒りがこだまする　修水
愚痴ばかり言ってはおれぬ年の暮れ　向西
愚痴ひとつこぼして神に叱られる　美智子
ひかえめな男で高い山が好き　十四郎
運動会ベベタで走る孫の汗　保蔵
もう三日口を聞かない倦怠期　歌子
ブラジャーで隠した山が燃えている　弘治
手土産を貰って愚痴を聞かされる　すみ
山小屋で拾った恋の共白髪　夢之助
逢曳のスリルも知らず八十路来る　〆女
走るからなんだなんだとついて来る　紫香

川柳たけはら　森井　菁居報

リサンにどんぐりわけてもらいたい　小三千　枝
落ち葉一枚秋が少しずつ増える　小五史　子
もう甘い顔はできない八敗目　勲
ニッポンの名所も知らずパスポート　静佳
夫婦独楽型は古いがよくまわり　節夫
ここいらに亡夫が居そうな山登る　ふさ枝
言わぬが仏心に通う秋の曲　浪子
お粗末も一人前に墨をする　喜久恵
どの部屋も灯りをつけて無気味な夜　喜美子
作品展せめて千羽の鶴を折る　ヤスエ
せめて杖　皇太后のおいたわし　麻代
やすらぎの壺で芒は風を恋う　栄恵
同じことした筈なのに母の味　愛子
車椅子　運動会を見せてあげ　房子
コスモスの風の向うにある愁い　一枝
愚かさを悔みつづける保証印　清水
不発弾抱えたまんま坂登る　淑子
ワンカップ一つで嬉しい日もあるさ　一路
戦争の恐さは知らぬ常夜灯　菁居
象を見ているあなたを思い出している　蘭幸
考えてみればつまらぬことでした　笹舟
つり竿の先にも秋がやってくる　比呂子
お母さんならどうすると娘に聞かれ　伸子
走馬灯秋はますます深かりし　笑子

藤村の心を拾う千曲川　博子
駱駝の背　王子王女になる砂丘　新造
蒼い空きみサングラスはずさぬか　静風
今日もまた仮面をかぶって生きた悔い　のばら
フスマ貼り替えると思い出消えそうで　貞子
もうおわりこれでおわりと旅つづく　政己

聴障川柳　稲田豊作報

老い楽へ急ぎお迎え来ぬように　豊作
一一三四　老いの体操　孫笑う　みつる
未だまだと笑って働く八十三　一晄
重ね着に老いを見せけり秋の風　三香
十五夜の月に溜息　古稀の宵　八恵子
席ゆずられ「老い」見破られ苦笑い　末子
核家族　老いても農は止められず　たみ
したいこと一杯あって老い忘れ　真女
このままで居たい節目の年になり　静子
老いて尚菜作り楽し今日も亦　美乃留
老いて見る夢路の妻は尚若し　進一
老夫婦お手手つないで温泉か　健太郎
老いらくの恋で第二の人生か　珍妙人

サークル樺樣　友碇雅子報

羊羹を切るよにいかぬ遺産分け　千代女
手土産に肩身のせまい羊羹党　三四子
甘党の物指しで切る夜の梅　美子
羊羹もお酒も好きな薄情け　泰子
言い訳がすぎて揺れ出す負け意識　智恵子
落葉では柿の葉ずしはないのです　薫風
勝力士マイクへぽっそり言ったきり　柳太
時々は勝たせて貰う人生ゲーム　美緒

いさり火川柳会　尾崎三代治報

手みやげとストレス抱え旅に出る　武士
旅に出てふる里の良さかみしめる　智恵子
湯の香り旅の疲れがとけてゆく　三代治
失った詩情求めて旅に出る　孝人
さわやかなガイドの笑顔旅和む　由多香
女坂一人で重い旅を行く　八重子
六十年の旅で辛苦をなめて来た　豊子
一人旅埋める絵の具が見つからぬ　伊都子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

生活の垢とストレス溜めてます　温子
苦学した辞書に手垢と線の跡　みほの
才媛のちょっぴり欲しい爪の垢　紫泉
生きている証拠の垢を汚ながり　社的
しまい風呂湯垢気にせぬ嫁が居る　紫映
朝シャンで心の垢は洗えない　寿美子
裸婦の垢　年に一度は拭いてやる　早苗
真っ白いタオルに昼の垢をつけ　螢
戦陣の垢がどこかにまだ残り　柳風
逆境にもまれて垢も少し落ち　梅朗
命乞う手垢で光る百度石　典子
欲深く心の垢がとれません　小鹿
公園の垢に社会の恥を見る　小生
回し読み手垢の付いた本帰る　白峰
不浄の垢さっぱり落し白衣着る　仙岳
肌に持つ亡夫の写真に手垢しむ　いわ子
御先祖の残した垢に箔がつく　幸子
温泉で二泊三日の垢おとし　静歩
垢ためて無精で過ごす夏男　幸枝

み仏へ心の垢を消して会う　日出子
ビアホール心の垢を飲み下す　喬水
垢じみた頁に残る祖母の顔　ひさ子
金欲の垢にまみれた役得者　孝恵
満月を眺めて今日の垢落す　野草
垢ぬけのしない身なりに金をかけ　玲子
ドック入りして積年の垢流す　節子
心の中にたまった垢が流れない　勝見
だんだんに世間の垢がついてきた　弘朗

川柳大阪　高須賀金太報

六法を齧りギクシャクしています　重人
切り札を出せずに話まとめられ　正之
割箸の裂け目あたりにある涙　希久志
医者嫌い恐い話は先送り　亮太
揉め事の無い日が恐い駅に在り　柳弘
金かけて命をかけて誤診され　しげお
円満の陰で迫力ない人ね　美津留
大正の意地を頑固で片付ける　雅巣
復活戦おっとまだまだ生きまっせ　洛酔
そこに線引くからおかしたくなる　凡九郎
国境をおかす手に貸すドルの嵩　与呂志
領海を侵すぎりぎり網を引き　比呂志
ドライブは外車でラーメン持って行き　一歩
天罰があるならあたれ悪い奴　三吉
天女舞う白砂青松今は無く　鉄心
統一へうごめく地下のヒットラー　本蔭棒
真っ暗なペンツに近づかぬことだ　金太

城北川柳会　神夏磯典子報

巨人軍連勝なるか頼みます　午郎

好物を忘れず供え彼岸終え　敏子
好きやねん負けても負けてもタイガース　秀夫
春来れば春　秋来れば秋が好き　新一郎
ストレスへ力いっぱい振る手足　文子
大詰へ来て靴紐ほどけない　テルミ
赤信号待ってよかった今日の無事　八重子
美しく老いてまっ赤なベレー帽　倫子
母さんの居眠りが好き肩たたく　達子
ひと目ごと愛が詰っている手編み　公一
現実を忘れて今日は野天風呂　登美子
特別にかまってくれぬ嫁が好き　典子
塾よりも土壌次第で子は育つ　きくゑ
温かい言葉に今日も励まされ　輝子
たばこ好きだんだん肩身せまくなる　ふみ
片意地な男が通るけもの道　白峰
頂上へ立つと叫んでみたくなる　史風
しっかりと張った根をもつ妻になり　昭子
問い詰める妻に主権を奪われる　温子
人間の奢りへマグマ火の叫び　満津子
コスモスのやさしくゆれて母偲ぶ　寿美礼
肩張ってみても正直すぎる腰　ただし
新憲法何やら崩れる音がする　静歩
仮面取る終着駅が人にある　静子
真心の色を探れば赤だった　右近

南大阪川柳会　中川　滋雀報

けったいな奴やと自分でも認め　柳宏子
風変りな女がひとり通夜の席　寿美
崖っぷちばかりを歩く風変り　覚然坊
初対面もう見抜かれた風変り　庸佑
風変りではありません家風です　清水

馬の耳に念仏風変りのみを研ぎ　千梢
前向きになると世間が見えてくる　滋雀
面と向かうと喉から出ぬ言葉　恒明
仏壇に向かうと今日が楽になる　冬葉
足の向くまま歩いています万歩計　文秋
好きだからこっち向くまで待つつもり　あいき
風向きの変らぬうちに貰う判　新造
振り向けば幾星霜の過ぎし道　シマ子
何が有利か野菜売場で思案する　作二郎
とても有利な風に出鼻をくじかれる　奏月
健康なことが有利になってくる　智子
水増しの有利はいつか穴が開く　章久
有利です便利ですけど高すぎる　トミ子
有利さはまだ奥の手を出してない　東雲
にせものに注意と書いた類似品　頂留子
同類が楽しい席にしてくれる　久子
人類が汚したツケに病む地球　公一
この指に集まる仲間とたむろする　雀踊子
類のない物に拘わる骨董屋　岩信
うるさくは言わず背中で叱る父　楓楽
おとなりがピアノを買うてから不仲　柳伸
馴れ過ぎてうるさくなって来た仔犬　萬的
本当を追うからうるさい事になる　凡九郎
説教も聞くにうるさい失意の日　勝美
会場にうるさい顔がど真ん中　悟郎

堺川柳会　河内　月子報

手をいっぱいひろげて花を表現し　半銭
今日はお花のご馳走ですよ地蔵さん　あか里
花咲いた気もしないのに古希近し　都
早咲きの菊一輪を仏壇へ　磯子

庭園で花の名前を読み返す　東雲
花屋から届いた蘭になじめない　楓
結構と言われ取り付く島がない　二南
いつも心に都忘れが咲いている　智子
結構にされ皆中流と思いこみ　紀美女
元気です明るい家の子沢山　てるよ
成績にふれず元気をほめてやり　満州
医者の目が和んでやっと出る元気　芳水
席蹴った日からやさしくなった父　千万子
四代の御世生きつづけまだ達者　寿恵子
金のない夫婦にて候　元気です　岳人
木枯しに元気印の旗を振る　泰子
元気な印　乳房が二つ満ちてます　金三郎
鈴生りの柿が元気に落ちてくる　森子
もみがらの煙に地蔵むせている　与呂志
負けた日の靴蹴るものが見当らず　月子
風下へ座り煙草にむせており　文
線香の煙まっすぐ亡母の旅　かりん
炭焼きの煙　頑固に過疎まもる　萬的
キッチンと呼ばれてさんま嫌われる　小雪
近道はさんまサンマの路地を抜け　凡子
ぼく焼いた煙はきっとどす黒い　天笑

倉吉川柳会　渡辺　菩旬報

お隣の物音　象が住むらしい　完司
教えても右上りに書くくせがある　碧水
胸高に結んだ帯の娘の門出　とめ子
あやとりを教える指があたたかい　柳風
帯しめて今出陣の時を待つ　久子
ショーウィンドーとても買えない帯ばかり　勝彦
生きている不協和音の花ざかり　和枝

長電話そろそろ切れと咳払い　玲子
地上げ屋に人もミミズも追い出され　康志
音無しの構えで老いがしのび寄る　喜美子
玉子割る音で機嫌の解る朝　ゆり子
そろそろと十八番出そうな酒の宴　秋草
帯の芯むかしの母が居てくれる　荒介
極楽へそろりそろりと行く用意　秋女
かさこそとわたしと秋がふれる音　石花菜
草に寝て静かに娑婆の音を聞く　瑞枝
値上げする時の理由が気にくわぬ　雄々
裏話教えてくれる裏通り　とみお
湾岸が騒ぐと油値上げする　かつみ
来年の羊そろそろ出番くる　独歩

川柳後楽吟社　従野　健一報

別れよう言えばだまってうなずいた　義親
独酌のそのまま父の忌を寝たり　草風
祭り餅撒いてあげたいひとたむろ　たけ志
長袖に跨下で冬に立ち向かい　浄美
暗闇で仮面をとれば鬼になる　哲郎
獅子舞が一升瓶を提げていく　金吾
悪いとこばかり親に似て生きのびる　桃風
夏の傷消しゴムくらいで消えないぞ　拓治
うれしい時　悲しい時を知る鏡　みよ子
人形劇酒の仕草も付いている　博友
折り返し地点は花屋の前にする　美智子
財テクの話はなぜに気が重い　柳五郎
振り向けば愚痴となるから前を向く　吟平
脇腹をつかれ言葉を丸くする　正秀
嫁いだ娘　今夜の満月見てるかな　青銅
ハイハイと素直　晩酌余計つき　佐加恵
からっぽの心へ潤い老母がくれ　進
地位もなく名もない父の節くれ手　玉水
根回しの酒と胃袋知っている　秋月
またひとつ謎を増やして女住む　鮫虎狼
マジシャンの謎をオウムが喋りだす　健一
謎々の答えを妻が握ってる　吉則
真実は言ってはならぬ胃が痛む　照路

岩美川柳会　羽津川公乃報

船が着く港はいつもカモメ群れ　たけし
宮仕え上手になったバッタ飼う　芳江
燃えている野心を妻が消しに来る　照女
つぎはぎの袋に詰める嘘まこと　民子
大黒さまの袋はきっと梨だろう　公乃
袋握ってスナック菓子の止められず　大漁
知恵袋破れて嘘がころげ出す　美代子
幸せが袋に少しずつたまる　幸代
ブランドのベルト不倫を知っていた　單車
風待ちの港やさしく船を抱く　美恵子
沈船の魚礁さかなの唄を聞く　忠良

川柳クラブわたの花　片上　英一報

檀那寺の本尊　何様かは知らぬ　シマ子
辻地蔵ラップに包むいなり寿司　章
消費税　神も仏ものがさない　友甫
仏心おこして猫にいつかれる　春子
捨て犬へ仏心が顔を出す　朝子
仏さんに内緒の話一つ増え　一風
いけるなら浄土へ往来してみたい　ますみ
水子仏悲しい定め　風車　初子
音痴です聴いて下さいナンマイダ　能子
好きだった手作りおはぎ仏の日　トシエ
人間でなくてよかった野の仏　みき子
平和です花に包まれ野の仏　弘直
一向に身元の割れてこぬ仏　英一
古里の幟り懐かし秋祭り　芙美子
リヤカーに乗せられお神輿不服そう　しげる
期待すな先祖に英才ないものを　泰成
農を継ぐ孫に期待の鍬洗う　君江
期待され連係プレーの秋日和　暁子
三代目　初代の余韻期待させ　一雄
晩酌に明日の手応え確かなり　隆
花束を貰って息子諦める　幸枝
陶工の期待と自信窯を出る　龍襄
金貯めてみてもあの世の六文銭　鬼遊

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

妹もわからぬ姉の風まかせ　実
浅はかな女心が仇になる　トキ
膝まくら女ごころが脈を打ち　つる
着て脱いでまた着て脱いで着る着物　一光
一線を越えて結婚せまられる　井蛙
今一歩女の心よみきれず　仟
幸せな女は紅を薄く引き　一花
何時までも女盛りのまま居たい　進
追えば逃げ追わねば怒る女心　彩人
与作にも寄り添う妻が居てくれる　風樹
口紅を直してからの黙秘権　黙人
お七にも紀子さんにもなる女　凡凡子
女ですもの涙の武器を隠し持つ　善保
復縁をせまる女の名演技　五楽庵
ほだされて女心は涙ぐみ　甲吉

佐川川柳　赤川　菊野報

台風に足止めされた旅の宿　春童
旅人も雲も流れて北の宿　千恵子
明日への命をくれたパスポート　朱坊
民主化の波東欧へ押し寄せる　健二
出まかせな言葉波紋をまきちらし　菊野

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

食欲の秋です1K程もどり　すみれ
心和む人に逢いたし秋の彩　江山
錦秋を年金バスが楽しそう　甫正
抱きあげる孫の未来の色をよる　志重
初孫をあやす夫婦の百面相　ふさえ
花言葉誰方に上げよう好きな詩　伊久栄
餓鬼大将　会社勤めでする懐古　美恵子
鬼を描く気魄の籠る絵師の筆　半仙
老いた鬼善と悪とを使い分け　山人
一家団欒可愛い鬼もいてたのし　邦人
ちんぷんかん身振り手振りでする会話　秀香
聞く方も聞かれる方も知らぬ道　吟平
叱られてチンプンカンの儘で寝る　恒心
催促に来て人間の裏を見せ　賛平

川柳化粧櫓　植村客遊子報

雑草は媚び知らぬまま強く咲き　サワ子
路険し金の成る木が見つからぬ　大鷹
相談に帰るふる里無人駅　岳詩
のし袋何時もカバンにある安堵　遊峰
一人寝へ鈴虫秋を告げに来る　輝月
吉相印せめてもすがる落ちこぼれ　葉香
美しい嘘が水割りかきまぜる　礎石
ギャルのミス舌をペロリと出してすみ　悲子
甘えてるポーズ撮られたとも知らず　三青
ゆっくりと急所を衝いて来る無口　昭子
目立たぬが老いても紅を忘れない　春蘭
旅行するゆとりは出来たが痛い足　美代
故郷の風に誘われ足軽く　茂章
決断がついてネクタイ締め直す　嘉
秋が来てそろそろ料理に腰を据え　姫女
あの阿呆が舞台下りたら座長さん　好花
フルムーンふたりを変えた旅の宿　はる子
炎天の汗良しビールが留守居番　おさむ
家族皆それぞれ出掛け猫と居る　永楽
ウエーブへ巨人が勝ってテレビ切る　客遊子

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

女助手来てから鏡に用が出来　吟笑
食欲の秋か輪をかけ肥り出し　よしみ
一筋の道に迷いのないゆとり　ひかり
鬼ヤンマ残暑見舞にやってくる　明人
不意の客嬉しかったり困ったり　白柳子
その坂を登れば未来が見えてくる　いさむ
病み上り食欲みてて出る笑顔　マサエ
台風を迎えてテレビ先にゆき　スミエ
七人の子等があるのに一人住み　チカエ
停年にやっとゆとりを見つけ出し　放任
コンスタンチャン体をはって国つなぎ　伽名子
聞く人の心で違う鐘の音　迷香
磨いても光らぬ靴もとってある　かおり
機械化も女田から追い出され　迷貫
患者という名の付いたお客様　迷観子

川柳東大阪　森下　愛論報

水子寺女ひとりが立ち去らぬ　晋吾
萩の寺萩には早し彼岸花　勝美
読経聞く茶の一服に救われる　美子
天と地の恵みで農夫朝を出る　湖風
恵まれた中できびしく孤にひたる　慶三
仲裁に他人を入れて余計もめ　雅士
登っても天井はない芸の道　文秋
子の登山母の祈りが背をよぎり　喜風
長い長い縄梯子をあむ高さ　雀踊子
登り坂老いには強い足がある　百合枝
目に涙校旗が登り汗が落ち　東雲
いさかいの朝は自分でパンを焼き　愛論
背の丸い影よお前も疲れたか　孤舟
残照へ海鳴りを聞く長い影　千石
窓際でだんだん影がうすくなる　度
長い影頭のあたり踏んで立ち　しんじ
先陣を切る大将が影武者だ　隆
地下鉄に連れて行けない影法師　頂留子
向う傷男の背中に影がある　章久

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

偽りの笑顔のピエロ胸で泣き　喜久亭
目出度い日一人は兄の葬送に　ちよ
自画像を画く気にさせた古希の顔　治幸
雑学が私のボンクラ救ってる　ふさ子
知りすぎているタレントの名を忘れ　義美
秋本番くんちが来るぞ金あるか　遊女
書斎とは言えぬがわいの四畳半　高明
お手植の未来に残る山の樹々　旭恒

外国に渡れば私外国人　ハル
何もかも自動にしたい懐手　虹汀
ゆらゆらと河面に映る影二つ　剛司
新玉の顔に手鏡さし出され　四郎
スランプを救った彼のあの助言　弘
明日へ伸ぶ緑の植樹村づくり　朴竜
娘が白衣着ても従軍などさせぬ　正敏

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

同じこと言うてる人を笑えない　芳枝
りきみすぎぽつんと何かが切れました　好栄
この誤算りきむ気持も萎えました　聖子
羊水の中で聞いてたメロディーよ　智重子
身の程をしらずにりきむねむり草　はるみ
見わたせばりきんでいるのは私だけ　歳栄
古里の山よ昔のままでいて　民子
この夏をりきみ通した温度計　鈴江
古里に叱ってくれる人がおり　かつ子
要らぬ米稔って古里忙しい　ヒデ子
ゆずられてあたりを見ればこんな場所　悦良
古里に卒寿の母が待ちわびる　博利
古里の一本松が見当らず　清泉
古里の星が呼んでる帰ろうか　白汀

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

勝気さが気楽に見せているつらさ　〆女
足の爪切らせ気楽な二人部屋　みち子
飯粒が散らばっている大家族　紫香
細くとも灯を抱き合うている家族　梨枝
団欒の家族の底にある謀反　敬
遺産分け済めばお呼びのない家族　文夫
ハンドルの角度に慣れてからの事故　英子
母さんの死角で読んでいる漫画　芳子
三面鏡角度を変えてみたとても　杜的
鋭角の視線ピカソの絵の女　萬的
止り木の角度にかるい恋がある　正一
クラス会今年も友が欠けている　堯
石山寺式部と同じ空眺む　正子
枯れた字に芸の深さを知る色紙　武庫坊
絵はがきに残る思い出秋が逝く　伊三郎
億単位　耳慢性でひびかない　保蔵
旅立ちと言うのに寒い風になる　定人
趣味多忙短い秋のカレンダー　園歩
行く秋を楽しんでいる土瓶むし　歌子
戦争のことを話してやる夜長　年代

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

雑音の荒れ補聴器に馴染めない　多賀子
荒れた手に母の歴史が載っている　ちかし
荒れ模横　朝の玄関素っ気ない　友子
荒れた手を勲章にして寡婦の意地　妻子
廃止線荒れて淋しい風の音　房子
屋台店荒れた同士の意気が合い　幾子
一味も二味もある老いの皺　清志
桃の味知って男は帰らない　たつみ
猫も杓子も恋の味なら知っている　操子
二代目も昔の味で売っている　与根一
味ばかり気にして愛を入れ忘れ　小鹿
芋蔓の味に戦時がよみがえる　清子
真似なくていいのに息子爪をかむ　登志子
真似てみても明治の亡母に近寄れず　みえ
真似ごとの畠に赤くなるトマト　秀子
マネキンを真似る嬉しい夢がさめ　邦代
人真似がやがて胃の腑におちてくる　嘉寿子
風の音真似ても詩が出てこない　文子
そうですか聴こえなかった電話番　太伸
筆不精お返事いつも電話にて　ツヤ子
プッシュホンいつも間違えるのは父　寿美子
間違いの電話ばかりの大安日　蘭水
ストレスをほぐすつもりか長電話　静恵
受話器持つと近くなるニューヨーク　鶴丸
町内に必ずひとり臍曲がり　代仕男
町内のみんなが起きた救急車　太泡
だんさんが居て町内がいつもめ　章峰
町内の小町娘がまだ嫁かず　長三
政党色がない町内でむつまじい　雄々
町内のゴミの日知っている鴉　叮紅

聴障川柳（前月分）　井上　富子報

草臥れた背広が肩で息をする　富子
肩たたき券を土産の孫が来る　たみ
肩叩き孫それぞれの力出し　静子
妊婦さん肩で息して苦しそう　健太郎
大げさに肩をゆすって成り上り　みつる
双肩の重味と渡った過去の橋　八重子
肩の荷を降してボケがしのびより　真女
肩書はないが上座に導かれ　柳香
何一つかつがぬけれど肩がこる　珍妙人
いかり肩農家の嫁の意地を見せ　鏡香
天秤をかついだ苦労忘られず　一晄
見送らぬ男の肩が泣いている　三香

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

もろて来た地図で途方に暮れている　寿美子
地図広げ我が家の番地　子が見付け　花　村
中東が真ん中にある世界地図　正　坊
母だけの暦に書いたスケジュール　明　光
日めくりの諺　礫となって朝　ただし
坂の道　感謝がつづく車椅子　つゑ子
沈む日へ今日のいのちを感謝する　富　子
好物を持ってお世話になりました　(玉)英　子
写経して微かに安堵らしきもの　(小)英　子
寝ていても微かに動く猫の耳　紫　香
電話口微かに入れ知恵漏れて来る　〆　女
コスモスが微かにゆれて地動説　蕗　児
あどけなく夢のサンタを待ちこがれ　福　一
この縁にかけて着ましたウェディング　登代子
虫になり冬眠したい辛い風　圭　坊
薬にも毒にもならぬ部下がいる　白渓子
遠来の友を迎える入場券　とく子
森に感謝忘れたエゴが突き刺さる　悟　郎
スタート台　孫と目が合いVサイン　吉太郎
汽車　電車　飛行機もある幼稚園　杜　的
感謝などしてほしくない鬼瓦　しげお
石庭に石相倚りて微かな思慕　作二郎

川柳ねやがわ　高田　博泉報

たかが咳一つ出来ない手術あと　三　峰
下積みの苦労かなしい咳に出る　菜　月
風邪流行る咳が隣を遠くする　一　途
焦点の合わぬ返事が気にかかる　えいめい
焦点が合わず世間が狭く見え　一　芳
ぴったりと焦点が合い恋燃える　速　水
弁解が上手になって職を退き　権　太
弁解をすればする程落ちてゆく　一　笑
大護摩の煙に仏おわします　花　世
湯煙の地獄極楽みて帰り　かすみ
薄持った人に出合ったよい笑顔　高　栄
美しく耐えるうなじを持つ喪服　礫
どん底で明るく祝う七五三　波留吉
少年と少女ことばが蝶になる　亜　成
一人住む夜中の咳が止まらない　あやめ
咳ばらい父は今夜も読書らし　光　子
焦点をどこに合わそうピカソの絵　吉之助
賛成派らしいマイクを向けてくる　おさむ
咳をする子を叱るのはやめにする　まさお
焦点へ菩薩と夜叉が共に棲む　雅　文
赴任地の情けが重荷になってくる　君　子
生きてゆくための不孝は許してる　時　弘
焦点になじめず腕を組むばかり　勝　一
最後まで弁解しない父の靴　てまり
松茸を貰ろうて騒ぐことはない　章
弁解はおよし値打ちが下がります　三千子
いっしょに帰るそんな仲間で疎まれる　冬　葉
弁解を全部信じた顔でない　庸　佑
顔だけは修理出来ない大工の娘　度
夕焼へ仔馬が背のぴする牧場　シマ子

川柳藤井寺　高田美代子報

成程と親の意見に無駄がない　ときお
長い列なるほど旨くて値も安い　繁　男
なるほどと生い立ちにみる里の家　ケイ子
うなずけぬ日もあり二十四時暮れる　美代子
なる程と言っておれない消費税　志　洋
走る姿見て玄人と直ぐわかり　みのる
なり振りを構わず走る終電車　たかし
松茸の走り奮発した財布　宗　一
寝坊した分だけ走る朝の駅　三　夫
捨てた恋心の隅を又走る　修　六
運動会　夫婦で走る羽目になる　三　郎
女の目動いて猫が走り出す　吸　江
トップよりビリを走った子に拍手　つや子
走るのが大儀になった影法師　一　屯
白い風だろうが走りつづけねば　美　房
世渡りの下手な男で飯を炊く　きよし
いい人と言われるだけのくだき下手　和　之
上手下手あって世の中おもしろい　昭　子
下手くそな言訳しないから信じ　与呂志
筆持てば下手なサインもしたくなる　敦　子
口下手の亭主に妻の助け舟　キミ子
口下手が語る戦後は終らない　悦　子
あきらめて妻に代筆させている　作　秀
達筆の次に署名をする不運　治　子
口下手の誠意は汗を流してる　比呂志
満員車　下手に動けば疑われ　信　子

翠　洋　会　中西兼治郎報

晩酌へ野菜の値段ばかり言い　千　歩
恥ずかしい思いするのはわたしです　透　太
山路で仏と出会う夕まぐれ　いつを
腕捧げその年金で生きてます　兼治郎
君の恥俺の恥でもある部長　正　雄
パートして少額ながら恥じぬ寄付　光　子
恥じらいを忘れて政権揺るぎなし　恭　昌

松茸の気分にひたる葱である　英一
曲ってはいても胡瓜にある素朴　宣司
不惑でも還暦に見ゆ木の葉髪　真
この恥は川の流れにすてましょう　みよ子
恥多き事のみなりし我が生涯　すすむ
なんきんの煮つけよろこぶ下宿の子　絹子
ブーメラン戻れぬまんま川に落ち　照子
再会は初対面より恥ずかしい　春子
鍬の土ついた野菜の礼を書く　しげお
菊活けて菊に恥じらうことばかり　みつ子
恥のおかげ一念発起今がある　綾子
腕白が骨折り松葉杖も折り　東雲
決心をするとき山に向いて立つ　さと美
子が出来て恥じらい少しずつ失せる　凡子
山が好き新田次郎を読んでいる　正坊
無農薬野菜ブライド高く持つ　楓楽
長生きをしてまだ恥をかくつもり　鬼遊

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

真実が眼鏡くもってよく見えぬ　粗粒
いいものを見たい眼鏡を更に拭く　享
老眼鏡似合うと言われ少し照れ　喜男
老眼鏡きれいに拭いて企てる　螢
平和への眼鏡に適うゴルビーよ　圭一郎
老いた母戸を早々と開けたがり　呼風
国会が火種持ち寄り開かれた　輪多朗
この扉開けるときっと夢がある　一歩
無実の身開ける扉もうれし泣き　砂山花
涙つぼ開けて本音を待っている　山人
高校の扉はいつも開けておけ　友夫
うちあけてみれば身近な人だった　艶子
病床のやつれを癒す手を撫でる　侑里
顎の下まで撫でながら髭を剃り　新風
秋風に頬撫でられて自戒する　由多香
撫ですぎた犬は番犬にはなれぬ　旋風
札束で撫でられてから迷い出す　俊路
ブレーキのきかぬ男でスキだらけ　一枝
煮えきらぬ男で明日の旗がない　帆雀
泣く奴があるか男の子を叱る　多可志
男親嫁がせた日を酒で埋め　喬水
鍵握る男昼あんどんでいる　天涯

南海川柳会　飯田　悦郎報

保証した二人折半荷を分かち　喜風
耳打ちは二人でひそと笑みこぼし　しんじ
カップルの割引き仮の夫婦で切符買う　文秋
巡礼は同行二人と独り旅　覚然坊
無色透明集めて海の青になる　庸佑
透明な目で世間見上げる赤ん坊　文
五十鈴川の透明一円玉光る　眉水
食べるだけ食べてかいこ透明に　度
森は秋色ノラのその後を透明に　作二郎
運命は努力のかげんでむきかわる　真柳
運命は流れるままに円い石　勝美
二階借り運命まかした夫婦舟　東雲
運命を引きずるように孤児還る　柳宏子
運命で片付けられぬのが夫婦　不二夫
焼肉のけむり青い目もはずみ　重人
国際化ブランド品が闊歩する　志華子
海の神　国際空港おくらせる　美津留
信頼の電力ほとんど店休む　悦郎
信頼をしてる証拠に叱ります　泰
信頼の絆がもろい核家族　真砂
信頼の握手左の手も添える　甘平

富柳会　池森子報

落書帳乙女の胸の言葉です　花子
私の人生知っている落書帳　二三子
裸婦の絵に温もりがあるルノアール　昭水
若き日の想い出に撮る裸婦の像　トシ子
芸術として裸婦像に立つ女　花梢
デッサンは裸婦の姿で腕を上げ　生子
棟方の裸婦へ命を賭けた鑿　一二三
あのことが票に響いて落選か　(伊)勇
落選のにがいワインを飲まされる　岳人
落選をしたので仏壇掃除する　文次
ワープロで乱暴な字が書けますか　透太
乱暴をすれば壊れる愛の箱　(田)勇
釜ヶ崎の乱暴うなだれる府警　森子
乱暴な言葉で温めてくれる　荘次
乱暴な言葉が喧嘩売りに行く

いずも川柳会　吉岡きみえ報

善人にゆっくり戻るハイキング　雨学
ハイキング口下手でよし親子連れ　リチエ
マイホームパパです今日はハイキング　れいじ
友の娘が嫁ぐは島の駐在さん　清子
文芸を語れる風が島にある　のり子
手の届きそうな気のする嫁が島　芳子
島の娘が島の教師にあこがれる　青湖
母背負う感謝の力をまだ残し　重昭
飽食が感謝の二字を忘れさせ　三十歩
弾のとぶニュース平和の日々感謝　キヨシ

裏町も変らぬ温い日に感謝　まこと
花に水花は感謝の彩で咲く　桂子
つつがなき日々感謝に弾む老い　水煙
真夏日の記録　旱魃のダムを見せ　寿美
記録的暑さの後は雨ばかり　草丘
みぞおちに溜る女の懺悔録　多賀子
四人目が出来たわが家の新記録　芳正
死亡事故ゼロの記録は砂の城　フミ子
苦も楽も記録残さず日向ぼこ　肇
ギネスブックが記録破りを待っている　幸一
歩くのはこのあたりまで曲り角　勝平
歩き方もそっくりA型父子です　良子
万歩計いつもの人とまだ会えず　茂美
真直ぐに歩いて拾うものがない　満江
倖せを右手でつかむまで歩く　佐吉
歩かねばわたしの道を見失う　文子
ひたすらに歩いた父の一行詩　町紅
亡父の本父に近づくために読む　ちかし
一冊の出雲風土記の旅の中　章峰
垢染みた古書を開けば父の声　代仕男

川柳泉尾　吉川　寿美報

秋冷えや都忘れが冴えてくる　サチ
過剰包装むだでしょうけど夢がある　伴子
アンカーを力走孫の晴れ姿　(中)文子
孔雀草双手いっぱい慈しみ　みさ子
どうしても素直になれぬひね生姜　はつ子
道しるべ里が近づき匂う風　恵美
カルメンも私も一途彼岸花　靖子
ポストより即答すきな電話口　敦子
好きな人入れる大きな傘を買う　(寺)文子
財布紛失犬にも行方聞いてみる　途子
満月が波にくだける船の旅　シマ子
月欠けて激しきものを身のうちに　美子
統一を祝うドイツへ月明り　悦子
月満たぬ運命カラカラ風車　淑子
故郷の月は大きくあったかい　葉子
見残しの夢を見ている朝の月　マリ子
子の画く月はいつでもまんまるい　美津子
月明り信じた道をついて行く　あさこ
催促をせずにストレス溜めている　洋子
催促に来たとも言えず花を誉め　一枝
催促に行かねばならぬ鬼の面　美代子
知らないで済めば済んだに風の馬鹿　トミ子
生い立ちを知れば拳が萎えてくる　弘子
身のほどを知るのは頭打った時　良子
人生にほどほどと言う味を知る　シメ子
つまずいて情けの海の深さ知る　可愛
足るを知る母のつましい昼夜帯　寿美

川柳高知　川竹　松風報

月の出へ待ったをかけた雲の意地　春童
台風の目にのぞかれた丸い月　功
酒供養　桂月永久に生きている　竹萌
名月を下戸も知ってる酒供養　幸泉
龍馬像旅の男の血を沸かせ　菊野
赤い羽根胸に月見の座が和み　朱坊
せっかちに祝辞が長い酒供養　高重
名月を土佐で見ましたフルムーン　松風

▼お願い　各地柳壇への投稿は、先にお届けいたしました所定の原稿用紙（LIFE C157）を使用の上、川柳塔社事務所にお送りください。締切日（毎月25日）を過ぎると翌月号に掲載することがあります。

（編集部）

川柳塔社常任理事会（11月30日）

▽中島生々庵句碑除幕式を12月22日、現地で行うことを決定。
▽平成二年度の一路賞・各地柳壇賞の選考委員を決定。
▽平成二年度の銀河系賞に新家完司氏、茴香の花賞に佐藤奏月さんを決定。
▽本社句会の十年以上皆出席者の表彰を一月句会で行うことを決定。
▽本社と地方同人との交流を図るため、臨時同人総会の地方開催について審議。
▽楊井二南氏（堺市）の同人推薦を承認。

夜市川柳　募集

題	選者	締切
第8回「妻」	**板尾　岳人**	**1月末**
第9回「積む」	古川　一高	2月末
第10回「猫」	中尾　藻介	3月末
第11回「賭ける」	橘高　薫風	4月末
最終回「越す」	西尾　栞	5月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑方　堺川柳会

■各地句会だより

川柳大阪五十周年

中原　比呂志

私たち『川柳大阪』は、大阪市交通局に働く者を中心として、毎月、句会を開催しています。不規則勤務のため、句会は平日の午前十時からという変った時間帯で、会場も地下鉄のホーム端の会議室といった具合です。

非番の人、句会後出勤する人、休暇をとって参加する人。助役、駅員、技術者と職種もまちまちですが、先輩たちが営々として育ててこられた『川柳大阪』を愛し、作句に励んでおります。

毎年、秋には交通局文化祭が開催され、写真・絵画・俳句・川柳などを一堂に展示し、優秀作品には、局長賞・委員長賞があり、翌年、三月には「大阪市職員と家族・文化の集い」も開催され、各部門ごとに賞が贈呈される行事もあり、部員にとっても大きな励みになっています。

交通局職員と川柳のつながりは古く、大正時代に遡ります。東野大八先生に執筆いただいた吉川啞人、橋本緑雨に加えて、『川柳雑誌』編集・竹田芦穂（ろすい）、第二支部幹事・森田輝翠、第四支部幹事・関本雅幽などは、いずれも市電の監督、運転手でした。

昭和四年、雅幽をリーダーに「鶴町川柳吟行会」が発足、昭和十四年には、緑雨によって「四ツ橋川柳」誕生。時期不明ですが、都島に石井風人ほか約五十名の会員、春日出に森田輝翠ほか四、五十名など、市電運輸事務所に川柳熱が広がり、電灯部にも「いなづま会」なる川柳会ができ、路郎先生の提唱された川柳の社会化、初心者指導に応えるような盛況となりました。

緑雨、光太郎などが、電気局川柳部の一元的統合を唱え、昭和十六年五月十三日、天王寺・軍人会館において「市電川柳会」創立句会を開催、小雨の中、路郎、水府両先生を迎え、百二十名が参加しました。

戦後いち早く復刊し、『川柳浪速』『川柳大阪』と誌名を変えて今日に至っておりますが、『川柳大阪』という誌名は、路郎先生がつけられたそうで、ガリ刷り表紙に一部ずつ、路郎の落款が押されて職場に配布されました。市電車庫の仮泊所や交通局病院の一室、文化祭会場へと路郎先生は、小集会にもかかわらず、足を運ばれて指導されました。

市電運輸事務所を中心とした川柳会も、一時期危機を迎えたことがありました。それは昭和四十年代、モータリゼーションのあおりで、市電車庫が順次廃止され、地下鉄への転換、配転で職場が混乱していたからです。だが伝統ある川柳部をつぶしてはならないと、「たにまち川柳」のメンバーが発奮、湿式コピー一枚の句報を持ち回り、一年近くの空白を埋めたのでした。

私たち、『川柳大阪』は、諸先輩が歩まれた苦難の道を振り返り、教訓を得るとともに、今後の精進を目指すため、記念句会を開催いたします。どうぞご来席の上、今後ともご指導賜りますよう、お願い申し上げます。

■山陰紀行

みか月十周年大会

奥田　みつ子

前夜の予報では雨模様となっていたので心配しましたが、十一月十日午前十一時十分に明るい日射しの中、私たち十六名を乗せた日交バスは鳥取へ向けて出発しました。途中の山の木々は穏やかな秋の陽を浴びて紅葉半ばというところです。バスは千代川沿いに下って行き、智頭などの停留所では、大阪からの土産を手にした里帰りらしい何人かが降りました。

その辺りから、空の様子が一変して白いものが舞い始め、鳥取に降りた時には寒さに震え上がりました。小林由多香さん、中原みさ子さんらの出迎えを受け、宿舎山紫苑のマイクロバスで鹿野へ向かいました。因幡の白兎の伝説で名高い白兎海岸も、次々に押し寄せる灰色の波頭で寒々とした感じでした。

予定通りリンゴ園に寄りましたが、吹きつける粉雪にリンゴを挽ぐ手がかじかんでしまいました。しかし、山紫苑に着いて「みか月」の皆さんや沢山の柳友の方々との再会に、身も心も温かになりました。

前夜祭では、地元の方の民謡を楽しみながら、数々のご馳走に舌鼓をうち、盃を重ねて川柳仲間の輪に溶けこみました。

翌十一日は好天に恵まれ、川柳塔鹿野みか月十周年記念大会は、百二十六名の参加者で会場は溢れんばかり。午前十一時、森山盛桜氏の司会で前年度の賞杯返還に始まり、祝辞が続く。川柳に格別深い理解を持つ小倉利男鹿野町長が出張で欠席のため、メッセージを中原諷人事務局長が元気よく読み上げました。

その後、披講までの休憩時間にマイクロバスで、緑ゆたかな、しっとりとした町並を通り、鹿野城跡、山中鹿之助の墓を訪ねました。その堀端にあった「緑ある過疎に残って悔いはなし　けんじ」という句木が特に心に残りました。

午後一時過ぎからいよいよ披講が始まり、みか月会長の土橋螢選「さむらい」から、西尾栞主幹選の「逞しい」まで八題の佳句に耳を傾けました。時に頷いたり、笑ったりしながらも緊張の時間が流れ、三時半に無事閉会しました。地元の方々の意気込みがそのまま成績にも表れているように感じられたのは、私一人ではなかったでしょう。

大会の準備から運営など、さぞ大変だったと思いますが、みか月の皆さんの温かくこまやかな心遣いに頭が下がりました。これからも十五周年、二十周年に向けて、ますますのご発展を祈りつつ帰りのバスに乗りました。

◇

当日の天位句は次のとおり。

さむらいが一匹秋の野を駈けた　川崎　秋女

似たような劇が終ってほっとする　金築　雨学

沖縄の言葉で平和刻まれる　西浦　小鹿

忘れたい事だけ残し旅終える　竹治ちかし

お月さま辻をいくつも光らせる　金築　雨学

姉が走って妹も走りだす　金築　雨学

衣紋掛け野心はどこにぶら下げる　森山　盛桜

逞しくなって網走から帰り　但見石花菜

（写真は、大会風景）

塔の会吟行記

山口美穂
新井朋子
新井晶子

塔の会の吟行も二十六回をむかえた。十一月十八日、よい天候に恵まれ、阪急の長岡天神駅に集合し、紅葉の光明寺へむかった。この歴史は古く、法然上人が日本で最初に念仏のうぶ声をあげられた立教開宗発祥の地と聞く。

広い境内、大伽藍は、西山浄土宗総本山としての偉容を感じさせる。紅葉祭で屋台店もあり、甘酒や地酒のふるまいを受けた。野点席の緋毛氈、紅葉のトンネルの赤黄みどりに石畳。そして昼食は「いっぷく亭」で京料理をいただいた。近くでとれた瑞々しい野菜も売っている。楽しい会話を交わしながら、句会場の求講堂へ移る。まるで寺子屋のような感じの席で句会がはじまる。

かわいいお客様が二人。塔の会ではじめてだと思う。新井泰子さんのお嬢さん。私たちとは異なった着眼点、表現力に感心するばかり。甘えたような恥らいのかわいらしい呼名で、句会がいつもより明るく感じられた。

紅葉をバックに記念撮影、また、楽しい想い出が一つふえた。吟行を企画し、お世話していただいたことに感謝しつつ、野菜やおみやげを手にさまざまな紅葉につつまれたお寺をあとにした。

（山口美穂）

今度の吟行では、課題吟が一句しかできてなかったのに、図々しくも参加させていただきました。会場でも四句浮かんだだけでしたが、暖かい雰囲気に救われました。

今月は、水煙抄にも茴香の花にも投句できませんでした。一時はよく浮かんだのですが、最近は少なくなってきていたので、なんとなく寂しい気がしていました。

お会いした方の中で、私の句を読んだことのある方がいらしたことと、励ましていただいたことに、とても勇気づけられました。皆様のおかげで、楽しい一日を過ごすことができました。ありがとうございました。

（新井朋子）

わたしが初めて句会に出たのは、紫香先生の受賞記念の時でした。その時は会場に着いてから考えたので一句しかとられませんでした。今度の吟行では三日前から考えて、十二句も出せて良かったと思いました。緊張したけれど、名前を言えるのは嬉しかったし、一句呼ばれるたびに、ハッピーな気分になりました。句が呼ばれて、横を向いたら、そばのおばさんが小さな拍手をしてくださったこと、帰る時、がんばってねと声をかけていただいたこと、おじさんに草笛を教えていただいたこと、みんな嬉しかったです。

祖母・母・姉が川柳をしていたから、私も気が付かない内に、思ったことを五・七・五にするくせがついていました。祖母にノートをもらったので、スタンプと一緒に川柳を書いて、思い出ノートを作り始めたところです。

句会の途中で、くじでプレゼントがもらえると聞いた時、ノートがいいなと思っていたら、本当にそうなってびっくりするほど嬉しかったです。これを川柳ノートにするか、スタンプ帳にするか、今迷っているところです。

（新井晶子）

……

当日吟と兼題の秀句は、次のとおり。

琴の音にやすらぎもらう京の秋　〆　女

紅葉のそれぞれがよし光明寺　美　穂

インタビュー女流作家の束ね髪　杜　的

教え子に大臣がいるおじいちゃん　正　坊

器量よし母を看取ってまだ嫁かず　トミエ

柳界展望

編集部

★第9回鳥取県没句川柳供養大会が昨年**12月9日**、鳥取共済5階ホールで川柳ふうもん吟社主催、鳥取県川柳作家協会後援により開催され、施主あいさつ（両川洋々）・弔辞・読経・焼香の後、句会を開き、年間に没句になった句の敗者復活吟も行われた。

★直原玉青先生が建立された前本社主幹中島生々庵の句碑―「輪廻の綾はるけく尊く逞しく」が、このほど兵庫県三原郡西淡町松帆西路689の国青庵（庵主直原玉青）の境内に完成し、昨年**12月22日**、現地で関係者多数参列の下に除幕式が挙行された。

★第2回全国川柳大会（カレンダー）の入賞者が旧冬発表されたが、全国15名の佳作に本社同人から次の2氏が選ばれた。

職退いて人間らしい夢を見る　川島諷云児

たった一日の都合が主婦にままならず　坂部紀久子

また、佳作A賞に越村枯梢、同B賞に仁部四郎・幸家單車、努力賞に金村青湖西田柳宏子・新正子の諸氏が入選した。

★川柳カレンダーによる全国川柳（誌上）大会の要項が決まった。選者は渡邊蓮夫・野村圭佑・尾藤三柳・磯野いさむ・西尾栞・去来川巨城・山田良行・大野風柳・吉岡龍城・斎藤大雄・宮崎慶子の各氏。投句料は無料で、雑詠3句（新作に限る。1人1枚）を投句用紙により**2月28日**までに、東京都町田市金井町242日本伝統美保存会文化部・「川柳カレンダー」全国大会事務局へ。選句により最優秀作1・優秀作2・女性奨励賞2・佳作15・佳作B30・努力作100が表彰される

▽**同人消息**△

■遠山可住氏（兵庫県・本社参与）は、川柳の普及により地域文化の発展に寄与したとして昨年**11月3日**、篠山町文化功労賞、さらに**11月10日**、兵庫県こうのとり賞を受賞した。

▽**ご芳志**△

■柴田英壬子さんから句集発行に際し、金一封を拝受しました。

新同人紹介

楊井二南（ヒなん）

―紫香・萬的・柳宏子推薦

▼**訂正**▲

■**12月号**＝P38中段2行目「というば」→「といえば」P39下段23行目「吉川亜人」→「吉川**啞**人」、P43中段カコミ3行目「第7田」→「第7**回**」、P77下段24行目「番組」→「**冷える**」、P95下段カコミ6行目「長江睦子」→「長江**時**子」、P98「9月号」→「**11**月号」

川柳東大阪	25日(金)午後6時から 初詣で・髪・ページ・越える	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
はびきの市民会川柳	27日(日)午後1時から 熱い・落ちる・スマート・黒い	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11 塩満 敏

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

1 月 各 地 句 会 案 内

	日／時および題	会場と投句先
堺川柳会	6日(日)　9時半から 翔ぶ・遠い・旗・自由吟	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から 羊・増える・餅・安い	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 遠い・箱・子供	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 未来・見る・見事・「みがく」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 夢・静か・集まる・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)　正午から 寝言・姿・浮かぶ・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1－7－7－905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
富柳会	17日(木)午後1時から 礼儀・冷淡・恋愛	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4－1　池森子
尼崎 いくしま	18日(金)午後1時から 希望・水枯れ・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
南海 川柳会	18日(金)午後6時から 年賀・雑煮・石段・年玉	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(土)午後6時から 奥・好み・側近・童心	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	20日(日)午前11時から 和服・夫婦・才能・相撲吟	寝屋川市泰公民館 京阪寝屋川市駅からバス泰公民館前 〒572 寝屋川市春日町6－9　高田博泉 句会費 1,000円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 一・事業・まるまる・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
岸和田 川柳会	24日(木)午後6時から 湯呑・針・人形・細い	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7－36　槙山武助
京都 塔の会	25日(金)午後1時から 玉・数える・文字	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1　松川杜的 句会費 350円　投句料 62円切手3枚

編集後記

★新年あけましておめでとうございます。このたび、川柳塔社編集長の職務を担当することになった。規約上の職名は編集部長だが、従来の通称と一般の雑誌の慣例に従って〝編集長〟とし、スタッフとして私とともに、編集部に所属される宮園射月芳・西出楓楽・小池しげお・奥田みつ子の諸氏は、〝編集委員〟として「編集後記」の執筆にもあたって頂くこととしたい。

★さて私自身は、現役時代ジャーナリズムの片隅に身をおき、いくつかの新聞・雑誌の編集長もつとめてきたので、編集長という仕事そのものに戸惑いはない。しかし、柳歴はわずか八年余で、川柳そのものがまだ十分に分かっておらず、また、川柳塔社内外の〝人〟をあまり知らず、私自身も知られていない。しかも加えて、今年が古希にあたる高齢で、特に〝頭〟の方の老化がいちじるしいという不安材料も抱えている。

★ともあれ、いったん引き受けた以上、少なくとも任期中の二年間は、私なりに微力をつくしたい。まずは主幹・理事長の意を体し、先輩諸兄姉の指導を仰ぎ、編集スタッフとのチーム・ワークによって『川柳塔』誌の向上と発展にあたりたい。大方のご協力・ご支援をお願いして、同人・誌友とともに歩む柳誌の作製につとめたいと思う。

★なんだか、私らしくない優等生の〝作文〟のようになってしまったが、大先輩の東野大八先生からご忠言も頂いているので、平常心で仕事を進めたい。（正）

○一九九一年、かのとひつじ、今年もよい年でありますように。新しいカレンダーの連休を調べてみた。主婦業は年中、「毎日が日曜日」ならぬ「毎日が平日」なのだ。だから、連休が多いことを期待しているわけでなく、むしろその反対なのだ。

○最近、日曜祝日は中央卸売市場が休みになる。そこで近所の市場もお休みになり、質のよい生鮮食品が手に入らなくなる。それで、連休前に献立を考え、冷蔵庫に買ったものを一杯押し込む。また、休日は家族四人の食事時間がまちまちになる。朝食が午後になる者さえある始末。そこで私の一日は、台所へ出たり入ったりで終り、そんな日が続くと、だんだん機嫌が悪くなる。

○けれど、考えてみれば、専業主婦である私には、これが一番大切な仕事。家族がリラックスして過ごすために、工夫と笑顔でこの一年の連休を乗り切るよう心掛けたいものだ。私にとって、家族あっての川柳だから。ちなみに今年の連休は土曜休日を除き、お正月に始まり、二連休が二・四・十二月、九・十一月は二回、四連休が五月、それにお盆と暮れとなる。（ふ）

☆あけましておめでとうございます。編集の手伝いなら校正をする事、即ち、限られた時間内に出来るだけ丁寧にゲラ刷りに目を通す事、とのみ考えていましたのに、この欄を分担することになり、責任の重さに戸惑い、貴重な頁を汚すことを恐れています。どうぞよろしくお願い申します。

☆昨年十一月三日、姫路市での兵庫ふれあいの祭典川柳大会に、毎日放送の小池清氏の記念講演があった。その中で「二十年間、司会をした〝アップダウンクイズ〟の十問正解者は必ずしも頭が良いとか、知識が豊富な方ばかりではなく、頭の切り替えの早い人が多かった。前の問題が解らなかったら、さっと諦めて次の問題に向かう。その切り替えが勝敗の分かれ目」という話が特に印象に残った。

☆主婦業とは煩雑なもので文部・大蔵・外務・厚生などの大臣、時には総理の代わりもしなければならず、その他、母親・女性、また一人の人間としての顔も必要となる。それを如何にこなすか。今までのように済んだ事を何時までもくよくよと思い悩まず、上手に頭の切り替えが出来るよう、今年の課題の一つとして努力したいと思う。（み）

作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾　栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　小出智子選

課題吟（3句）
「紅」　石垣花子選
「愛」　松原寿子選
「美」　藤村〆女選

初歩教室「栄　転」（3句）辻　白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

4月号課題吟「技　術」「郵　便」「記　念」

同人費・誌代などのご送金は、すべて川柳塔社事務所へお願いします。

所在地は下記奥付のとおり

振替口座　大阪　8—33368

誌　代　1年分 7,500円（送料共）

定価　六百円（送料56円）

平成二年十二月二十五日印刷
平成三年一月一日発行

編集兼発行人　西尾　巌
印刷所　藤原童心社

〒545
大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六—六九一四番
振替口座大阪8—三三三六八番

本社1月句会

日時　1月7日（月）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角

☆短冊交換会（1人3点以内）
☆平成二年　月間賞杯授与と皆出席者表彰
☆平成二年度　銀河系賞・茴香の花賞表彰

おはなし　黒川紫香

兼題「喜ぶ」　小出智子選
「バランス」　里小路選
「名刺」　西田柳宏子選
「弓」　橘高薫風選
「努力」　西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内厳守

会費　500円　投句料　310円（62円切手5枚）

本社2月句会　7日（木）

兼題　「目」「酒」「塔」「妻」「水」

NHK川柳作品募集

課題「芝居」　橘高　薫風選

ハガキに3句　1月10日締切

投句先　大阪市中央区馬場町3—43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係

発表　1月27日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「雪」　橘高　薫風選

ハガキに3句　1月15日締切

投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二年十二月二十五日 印刷
平成三年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六四号 川柳塔 一月号
定価 六百円（送料 五十六円）

Pierre Parchen

Daniel Monshell

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

SUPER OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540 大阪市中央区南新町1－4－7
(06) 941－8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

代表者 大矢喜一

豊津店
〒564 吹田市泉町5丁目11－14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

雑誌 05703－1